
白き不屈の魔導士

子義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き不屈の魔導士

【Nコード】

N7305P

【作者名】

子義

【あらすじ】

若き執務官はほんのわずかな油断から大切な相棒を失い自身も大怪我を負う。任務に失敗し、必死の思いで強奪されたロストロギアに手を伸ばすもそこで気を失ってしまう。

心身共にボロボロな彼が眼を覚ますとそこは生まれ育った街で、目の前には知らない少女。

そして何故か自身は子供の姿になっていた。

主人公は平行世界の高町なのは。性別も名も違うけど、その身に宿す不屈の心は変わらない。

任務（前書き）

沢山の素晴らしいSSに触発されて書きました。
少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

任務

それは三人にとっては至って苦にならない任務になるはずだった。スクライアによって発掘されたロストロギア、それを強奪した犯罪者の確保。言い方は悪いがそれほど大事な事件ではない。この程度の事件など日常茶飯事だ。

強奪した者は名が売れている次元犯罪者でも何でもなく、確保も至って簡単だと思われた。

そんな事件に三人が関わったのは、現場の近くに三人が乗っていた次元航行艦がたまたま居合わせたことと、依頼をしてきたスクライアの人間が親密な友人だったためだ。

「まあこの程度の内容だ。普段お前等が関わっているものに比べればぬるいだろうが、油断だけはするなよ」

その次元航行艦、アースラの艦長であるクライド・ハラウン提督が二人を激励する。

「了解しました。ささっと片付けてきます」

「俊くんの補佐は私がしっかりとするので安心してください」

「アリシアと俊也は私がしっかりと守ります」

敬礼する三人。今管理局でも話題になっているチームだ。

高町俊也執務官とアリシア・テストロツサ執務官補佐、そしてアリシアの使い魔であるリニス。

前者は管理外世界出身にもかかわらず極めて高い魔力資質を誇り、十五歳という若さで執務官資格を取るほどのエリート。

アリシアは魔力こそ少ないものの、補佐官としての能力はかなり

高く、同時にデバイスマイスターとしても優秀で名が知れている。得意魔法は補助全般、優秀なフルバックである。

リニスは生みの親で前マスターのプレシアから受け継いだ雷変換のレアスキルを持ち、戦闘能力もかなり高い。グレアム提督の使い魔であるリーゼ姉妹と共に最高ランクの使い魔と称されるほどの力を持っているオールレンジアタッカーだ。

このチームが解決した事件は数多く、またその話題性からミッドでの注目の的である。雑誌やテレビでも取り上げられ半場アイドルと化しているが、本人達にその自覚はない。

チームライトニングスターズと言えばミッドチルダの住人なら誰もが知っていると云っても大げさではない。

「よし、頼んだぞ二人とも。今日は珍しくクロノが帰ってくるみたいだから、終わったら飯でもいこう」

クライドの言葉に頷き、三人は転送されていった。

犯人の逃げ込んだ場所は管理外の無人世界。

任務は犯人の確保及び、強奪されたロストロギア、ジュエルシードの奪取だ。

任務（後書き）

序章は短めです。

失敗

確保に至るまでは実にスムーズだった。

森林に隠れて逃げる犯人。アリシアがその位置を割り出し俊也とリニスが追い詰める。

途中、魔法を使って攻撃されたが俊也とリニスのシールドはびくともしないし、アリシアの防御魔法も完璧だ。非殺傷設定でも当たらなければ意味がない。

俊也の師であり親友、そして今回の件の依頼者でもあるユーノ・スクライア直伝の守りはそう簡単に崩されはしない。もともと、敵のランクはCで対する俊也はS、アリシアはAでリニスもA。これだけ差がある上に俊也はいくつもの凶悪犯罪を取り締まる執務官、苦戦する方が難しい。

「ひっ、ひい！」

「よし、捕縛完了っつと」

「あっけないですね」

必死で逃げ惑う犯人をチェインバインドで縛り上げる。実にあっけない。クライド提督が言うようにわざわざ執務官が出るような事件ではなかった。

不謹慎になるが、俊也ほどの能力を持った執務管をわざわざこの程度の事件に当たらせるほど管理局に余裕はない。

「さすが俊くんにリニスだね！」

「いやいや全然大したことないって。わざわざ俺が出向かなくてもそこら辺の武装隊員で余裕だよ。手柄を奪ってなんか悪いな……」

「そうですね、私達はアースラで待っていても良かったかもしれませんがね」

俊也はアリシアの笑顔に苦笑しながら、仕事なのでいつもの言葉を紡ぐ。

「……俺は時空管理局の高町俊也執務官です。抵抗しなければあなたには弁護の機会があります。と言っても抵抗できないか」
チーンバインドでがんじがらめにされた犯人を見て苦笑する。

「このままアースラまで護送を……」

通信を繋げようとして一瞬目を離す。

そして、それがで取り返しの付かない失敗となってしまった。

一瞬の気のゆるみ。瞬き一回ほどのわずかな隙に足をすくわれた。完全に相手が抵抗を諦めたと思ったこと、最近かかわった事件に対し内容があまりに規模が小さいので気がゆるんでいたこと。そしてなにより追い詰められた馬鹿の行動力を見誤っていたことが大きい。更に、犯人が薬をキめていて良い感じにイってしまっていたことが最悪だった。

これらの要因が重なり取り返しの付かない事態を招く。
言い訳は出来ない。非殺傷設定などという甘いものに触れすぎていたせいか、完全に失念してしまっていた。人を死に至らしめる無慈悲な暴力を……。

「……！！」

気づいたのはアリシア。

彼女のブーストデバイス、バルディッシュのスタンバイモードを解除し、ソニックムーブで犯人と俊也の間に割ってはいる。

俊也は、そしてリニスは………気づくのが数秒遅れた。その時点で詰みだった。

「アリシ………！」

最後まで彼女の名を言うことが出来なかった。刹那に襲いかかる轟音と閃光と熱風と衝撃。

「………あ！」

あまりの衝撃で声も出ない。

完全に油断していた。シールドも間に合わない、バリアジャケットも吹き飛ばされた。

吹き飛ばされ、痛みと熱さにのたうちまわりながらも、気力を振り絞り必死に立ち上がる。

犯人の目の前に立っていた俊也とリニスはその衝撃を真正面から受けることとなった。ダメージは半端じゃない。即死を免れたのも奇跡だ。

視界が紅い。どうやら頭から出血している様子。

鉄の味が口一杯に広がっている。口内を傷つけたか、もしくは内蔵か………。

左手は痛くて動かせない。握っているデバイス、レイジングハートもボロボロで、かなり危ないみたいだ。

「………あ、アリシ………」

またも最後までその名を言うことが出来なかった。

目の前の光景に頭が追いつかない。

常に前線に立つ者としてその覚悟はお互いに出来ていたが、こうして目の当たりになると思考すら停止してしまう。考えることを放棄してしまう。

「・・・・・・・・」

言葉は出ない。

リニスは、居た。体毛に赤い液体が付着しているが、山猫の姿だけども確かに居た。横になりぐったりとしているが、確かにそこに存在した。

しかしアリシアは居なかった。

転がっているものはアリシアの形すらしていなかった。

美しい金糸のような髪も、思わず見とれてしまうような彫刻のように整った顔も、無い。

一面に広がる朱色と肉片。火薬と血肉の臭いが混じり合いとてつもない嘔吐感に襲われる。

目を背けたくなるほどのスプラッタ。

ほんの数分前まで自分を支えてくれていた大切な相棒はこんなにも変わり果ててしまった。

「・・・・・・・・俺達を、かばって・・・・・・・・」

麻痺した感覚が蘇って来たのか、涙が溢れて止まらない。

追い詰められた犯人は質量兵器・・・・・・・・おそらく、何かしらの爆弾を使って自爆。

犯人の行動に気づいたアリシアが俊也とリニスを庇って爆死。これが事実。これが現実。

なんて無情、なんて非情。夢なら早く覚める、これは洒落にならない悪夢だ。

「ち、くしょ……………」

がくりと膝が砕け倒れ込む。涙は止まらない。

アリシアのおかげで即死は免れたものの、瀕死の重傷である事は変わりがない。

「く、そ……………」

自分のミスだ。何故想定しなかった、なぜ油断した、なぜアリシアを死なせてしまった!?

前衛なのになぜ気づかなかった？ 後衛のアリシアに庇われて何をしているんだ？

どうして、何故、何故、何故……………。

悔やんでも悔やみきれない。アリシアは帰って来ない。そして、このままだとアリシアに救われた命もすぐに尽きてしまう。リニスの安否もわからない。

レイジングハートは絶望的な状態だ……………完全に沈黙してしまっている。自動修復するにしてもかなりの時間を要する……………その前に死が訪れるだろう。アリシアが守ってくれた命を散らす方が確実に先だ。

既に詰んでいた。覆らない。どうしようにもない。

死にかけの体、できない通信。

すぐにでも適切な治療を受けないと確実に命を落とす。

しかし……………この状態ではどうすることもできない。

「アリシア……………」

まだ涙は止まらない。

ずいぶんと世話を焼いてくれた三つ上のお姉さん。思えば、彼女に恋をしていたのかもしれない。しかし、彼女はもういない。自分のミスで、死なせてしまった。いつも側に立つ彼女を守ることも自分の仕事なのに。

何が執務官だ……………大切な人一人守れない屑じゃないか。

「せめて……………」

せめて任務を果たさなければ、彼女に顔向けできない。

死に体を必死に這いずらせ、犯人だった肉片のそばに固まって落ちていた二十五個の宝石へ手を伸ばす。

ジュエルシードは先ほどの爆発に巻き込まれたせいなのか、淡く発色し、所々ひび割れ、かすかに震えていたが俊也は気づかない。既に意識が途切れる寸前だったし、視界は霞んでいたからだ。

「ああ……………どこで、間違えたのか」

最良の道はどれだったのか、分からない。

「死にたく……………ない、よ」

手を伸ばす。

「願わくば、やり直しを……………」

手を伸ばし……………そこで世界が光に包まれた。

アースラのブリッジでは久しぶりに対面した親子が静かに談笑していた。

「最近忙しいみたいだな」

「おかげさまでね。私みたいに優秀だと休む暇も無いわ」

「まあ人手不足はいつも悩みの種だからな」

クライド・ハラウン提督とその娘であるクロノ執務官の二人は任務に出ている俊也達の帰りを待っていた。

クロノは執務官としての俊也の先輩であり第二の師でもある。俊也が魔法と出会ったからの関係なので、かれこれ付き合いは八年にも及ぶ。当時十四歳だった彼女も今は立派な大人へと成長していた。

なまじ優秀な執務官であるために暇がほとんど無く、今回こうして親子でのんびりと語らうのもかなり珍しい光景だ。二人ともかなりの能力と立場があるので仕事に追われ、全然家に帰れないのだ。こうして父親とゆっくり話せる機会も全然無いのでクロノはとてもよい心地よさに包まれていた。

それに加え弟分と妹分に会えるのだ、仕事のつかれもだいぶ癒えるだろうと楽しみに三人を待っていた。

が、そんな感情は一気に消し飛ばす事となる。

「・・・・・・・・・・！ 大規模な次元震を観測！」

オペレーターのエイミィ・リミエッタが立ち上がり叫ぶ。

艦内には緊急のアラームが鳴り響き、一気に緊張感に包まれた。

「次元震だっつて!?! 場所は……」

そう言うクロノに対しエイミーは青を通り越し白い顔で言葉を返す。小さく震えながら。

「場所は、えっ……うそ、でしょう? 俊也君と……アリシアちゃんと、リニスが行った世界……」

アースラスツタフは絶句する。

「……第62無人管理外世界、次元震断層に飲まれ……消滅。デバイスに応答無し……三人とも、反応ロスト……しました……」

エイミーの言葉に艦内は静まりかえる。

けたたましいアラーム音だけが鳴りやむことなく静寂に響いていた。

失敗（後書き）

リニスの口調合ってるのかな・・・。。。

ジュエルシードの数は仕様です。

漂着

「……今のは！」

「間違いなく魔力反応だ。近い……というか、庭からだな」

ソファアールから立ち上がるのは桃色の髪をポニーテールにした女性。目つきは険しい。

魔力反応……何かしら魔力を持ったものが自分のテリトリーに存在している。主と共に過ごす平穏を乱すおそれがある。主に害成すかも知れない。断じてそんなことを許すわけにはいかない。

「何かしらのマジックアイテムか、魔法生物か。……最悪、局員か」

ポニーテールの女性と共に立ち上がったのは蒼い体毛の狼。知性ある瞳で人語を発するその獣は普通の動物ではありえない。

「もしもの時は分かっているなザフィーラ？」

「承知しているともシグナム」

最悪命を奪う覚悟も決め、リビングを出る。

シグナムと呼ばれた女性は自身のデバイス、レヴァンティンを握り、ザフィーラと呼ばれた狼もすぐに戦闘に入れるように構えている。

「我ら二人だけで問題ないか？」

「愚問だなザフィーラ。ベルカの騎士が二人もいるのだ。敗走など考えられん」

シグナムの言うベルカの騎士は彼女等の他に二人いるが、一人は主と共に入浴中であり、一人は近くのスーパーに買い出しに行っている。

入浴中の騎士は魔力反応に気づいているだろうが、その場を動かない事が正解だ。もしもの事が合った場合、すぐに主を守護することが出来る。

「しかし、ここまで進入を許してしまうとは迂闊だったな……」

シグナムが悔しそうに顔を歪める。

常に気を張っていたつもりであったが、日和っていたのかも知れない。

新しい主と共に過ごした暖かな日々が惑わせた。本来彼らの過すべき場所は戦場であり、彼らが闇の書の騎士、ヴォルケンリッタ―である以上争い事は避けられない。

今代の主の願いで魔力の蒐集はしていないが、闇の書が危険な口ストロギアであることに変わりはない。何かしらの方法で管理局が書の転生先を探し出し局員を向かわせてもおかしくはない。

だからこそ悔やまれる。杞憂で終わることはおそらく無い。この管理外世界で魔力を持った存在が都合よく闇の書の主の家に現れるだろうか？ 現れるわけないだろう。偶然ではないはずだ。

「素早く片付けるぞザフィーラ」

「ああ。主の平穩を乱すわけにはいかないからな」

大きな家に相応しい広い庭。月明かりもなく、虫の音もなく、暗く静か。

二人はリビングから庭に移動する。魔力を感じてからほんの十数

秒。ヴォルケンリッターである二人からしてみれば少々時間がかかり過ぎているかもしれない。

風もなく静かすぎる夜の闇に立つ二人。少しばかり緊張した表情はすぐに驚愕に変わる。

そこには予想していたものは何一つなかった。
マジックアイテムでも魔法生物でも管理局員でもない。

「これは……」
「どういう事だ？」

二人の言葉も頷ける。二人が見たものはボロボロの布きれにくるまって横たわる少年と、傷だらけの姿で同じように横たわる一匹の猫だった。

傷は深刻だ。騎士である二人から見て、決して浅くはない傷。すぐにしかるべき処置を施さないと命に関わる、それほどまでの大怪我だった。

「酷いな……」
「どういふ状況かはさっぱり分からんが、少なくとも敵ではないのか？」

「流石に手負い……」
「いや、瀕死の体で単身乗り込んでくる愚か者とは考えにくい。見たところ主はやたとそう変わらない年齢のようだが」

シグナムは騎士甲冑を解除し、デバイスをスタンバイモードに戻す。

一刻も早く適切な治療、せめて応急処置でもしなければ危険な状態だが、あいにくシグナムもザフィーラも治療魔法は使用できない。主と風呂に入っている鉄槌の騎士も然り。ヴォルケンリッターでそういった補助を一手に担うのは買い出しに出ている湖の騎士だ。

だからこそ困り果てた。二人はまがりなりにも騎士を名乗る。目

の前の瀕死の命を見捨てるというのは彼らの誇りが許さない。

主の命ならば従うが、見捨てるという命令はないし、あの優しい主がそんな非道なことを命ずるとは思えない。

「シグナム、見てみる」

「どうした……何!？」

よく見れば少年の傷が少しずつだが塞がっていく。危険な状態なのは変わりが無いが、それでも徐々に回復していつている。

「驚いた。オートヒーリングとはかなりの腕を持つ魔導士なのだな」

「だが、これでこの少年が魔導士ということが確定したわけだが……どうするシグナム」

事態はややこしくなった。

これで少年がただの一般人なら保護し治療することに戸惑いは無いが、魔導士となれば話は別だ。

ここは管理外世界。魔導士がいることはあり得ない。

「この少年が管理局員ならば主はやてに近づけさせるわけにはいかない……」

が、ここで放置、もしくはどこかに捨ててくる等したら確実にこの少年は死んでしまうだろう。

「ザフィーラ……」

「悩むなシグナム。俺はお前の決断に従うさ。意識を取り戻す前にデバイスを確保し、バインドでもかけていれば抵抗はできまい。記憶を消すというのも一つの手だ。……命を奪うことは、避けたい」

散々血に染まっている両の手。しかし、これ以上血に染めたくはないというのは騎士四人全員が考えている切なる願いだった。

血と死臭から離れた今の生活はとても幸せだ。

だからこそ、この暖かな平穏を血で汚したくはない、もう汚れたくはない。

「私はこの子を運ぶ。お前はそっちの猫を。……主はやてには私から説明する」

シグナムは瞬きほどの間悩み、とりあえず保護することを決める。ザフィーラは彼女の決定に頷き同意した。

「急がねば。主はやてから賜った服を汚してしまうが人命にはかえられん」

シグナムは少年を抱きかかえ、ザフィーラは猫を優しく啜えリビングへと戻っていった。

そこには警戒した表情でシグナムの手に抱かれる少年を睨む鉄槌の騎士と、大怪我の少年に驚く車椅子に乗った愛らしい少女がいた。

未だ意識が戻らぬ少年、高町俊也はこうして八神家に保護された。

これはあり得なかった出会い。

これから始まるのはあり得なかった物語。

一人と一匹が加わることで開かれるもう一つの物語。

世界を越えた白い魔導士の物語、始ります。

漂着（後書き）

シグナムとザフィーラを同時に喋らすのなんか難しい……。

目覚め

色々なものが暗闇に浮かび上がる。

風景だったり、人物だったり様々。

大切な場所、大切な人。大好きなもの。

学校、寮、アースラ、翠屋、自宅……思い出が詰まった場所、心休まる場所。

浮かんでは消え、浮かんでは消える

アルバムを開いて、一枚一枚写真を取り出しそれを破いて捨てている。そんな感じだろうか。アルバムから写真がどんどん、どんどん消えていく。

最初に浮かんだ大切な人は母さん。

老化という言葉を知らない、いつまでも綺麗な大好きな母。女手一つで育ててくれた心から尊敬している、世界で一番だと自慢できる最高の母親。

次は姉ちゃん。

眼鏡がよく似合っている、優しい大好きな姉。正確には従姉妹に当たるそうだが、家族であることには変わりはない。いつも世話を焼いてくれた、優しい人。

兄ちゃんは憧れの対象。強く優しい、目指すべき目標。兄ちゃんのように強くなりたかった。

家族の姿がアルバムから消えた。

アリサ　初めての友達。

ユーノ　親友にして最初の魔法の師。

浮かんでは消え、浮かんでは消える。

父のように接してくれたクライド提督。

弟のように面倒を見てくれたクロノさん。
ミッドでの母親とも呼べるプレシアさん。

他にも、次々にアルバムから写真は消えていく。

家族、親しかった友人、魔法の師達。

そして最後に二つの写真がアルバムに残った。

薄茶色の髪をした女性。いつも帽子を被っているのが特徴的。

それは使い魔の証とも言える猫耳を隠すため。

大変可愛らしいと思うのだが、本人は猫耳や尻尾を見られるのを恥と感じているようだ。同じ猫型の使い魔であるリーゼ姉妹は隠そうとしてないが。

母性的で、一緒にいると安心できる大切な相棒。
名をリニス・テストロッサ。テストロッサの母子二代に仕えている優秀な使い魔。

美しい金髪の女性。明るく親しみやすい笑顔が眩しい大切な相棒。
名をアリシア・テストロッサ。大魔導士プレシアの娘にして執務官補佐兼デバイスマイスター。

魔力の多さや資質などは母にかなり劣るが、それでも優秀であることには変わりがない。

攻撃魔法はあまり得意とせず、補助を得意とした完全なフルバツク。そしてかなり名の知れたデバイスマイスターでもある。

好きだった。

それは家族に対するものか、女性に対するものか、今では確認しようがないが、彼女のが好きだった。

その大切な相棒二人が消え、辺りは真っ暗になった。まるで味わった絶望を表しているようで、口が歪む。

管理局でストライカーにすら匹敵すると謳われたチーム、ライトニングスターズ。

執務官、執務官補佐とその使い魔から成るチーム。結成一年弱で数多くの犯罪解決に貢献した管理局の期待の星。

それがたかだかCランクの犯罪者を捕縛できず、質量兵器を用いられて壊滅。何がストライカーに匹敵するだ馬鹿馬鹿しい。

こんなはずじゃなかった。

考えても、後悔しても、もう遅い。

もう、アリシアは 居ない。

アリシアは もうどこにも、居ない。

「……………ん」

目を覚ます。

全身の気だるさに加え、頭に霧がかかったように意識がはつきりとしなが、先ほどの夢のことは覚えている。

走馬燈のようなものだったのだろうか だったらここは天国か？ と思っただがそうではないらしい。

知らない天井。どうやらベッドに寝かされているらしい。電灯が作り出す人工的な光に満ちたこの部屋が天国であるはずがない。

天国はもっとアレだ、花が咲き乱れ天使が飛び交うとびきり幻想的な所のはずだ。実際の所は知らないが。

「気がついたん？」

声をかけられた。そしてその独特なイントネーションにドキリとする。

それは俊也の故郷、地球で言う関西弁のイントネーションに近い。まさか管理世界で聞けるとは思っていなかった。まあ関西人の魔導士がいてもおかしくはないのだが。

地球は管理外世界のくせに管理局に関わっている者が多い。俊也は当然のこと、グレாம்提督はイギリス出身で、ナカジマ三佐のご先祖様は日本人だったはず。何かしら因縁でもあるのだろうか、地球は。

「うん……助けられたみたい。まずはお礼を　　ありがとう」

「気にせんでええよ。困った時はお互い様や！　それにしても驚いたわ〜大怪我してうちの庭に倒れとったんやからなあ」

声の主に軽く戸惑う。

くりくりとした目が可愛い、どこか動物を思わせる愛嬌のある少女だ。足が不自由なのか、車椅子に乗り心配げな表情でこちらを伺っている。

しかし、幼い。おそらく小学校の低学年、九歳から十歳といったところだろう。もしかしたらもつと下かもしれない。

ミッドの就業年齢は低い。その点から言えば少女の年齢もまあ珍しくはないだろう。俊也も囑託魔導士になったのは十歳の頃だった。しかし、足が不自由なのに管理局員？　いくら管理局が万年人手不足であったとしてもこんな幼く足に障害をもった女の子を採用するだろうか？　いくらなんでも採用しないだろう。それともとんでもなく稀少なレアスキル持ちか？

いや、その前にまだ考える事がある。此処はどこだろう？

見た限りアースラではない。室内を見渡した限りでは、どうも日

本の部屋の内装にそっくりだ。そしてもう一つ、気になる事があった。少女が言った、うちの庭に倒れていたという言葉だ。それはありえない。俊也達が犯罪者を追い詰めたのは管理外の、おまけに無人世界の森林で人間が家を建てて住んでいるわけがない。そう、少女の家の庭に倒れているはずがないのだ。

「私は八神はやてって言うんよ。よろしくな」

「ああ……俺は高町俊也。よろしく、はやてちゃん」

驚いた。日本の姓名……外見の風貌から見ても完全に日本人だ。

「はやてちゃん、一つ聞くけどここはどこなのかな？」

「はやてちゃんて……なんか照れるわあ。ここは海鳴っていう町やけど……」

更に驚く。海鳴……正に故郷だ。第九十七管理外世界地球、海鳴市。高町俊也が生まれ育った町。

驚愕に固まっていると赤い顔をした少女、はやてが更に言う言葉で完全にフリーズした。

「しかしほんま照れるわ。同年代の男の子と喋った事もあんまないのに、ちゃん付けで呼ばれたらそりゃ照れるのも仕方ないと思わん？ いや、そもそも男の子に名前呼ばれるのも初めてやわ」

本気で照れているのだろう、はやては照れくさそうに笑いながら手のひらをうちわ代わりにしてパタパタと赤い顔を扇いでいる。

そんなはやての仕草を可愛らしいと思いつつも、聞き逃せない言葉が発せられたので顔をしかめて首を捻りながらも疑問を言う。

「同……年代？」

「せや、服とかボロボロやったからうちのパジャマを着てもらったるんやけど堪忍してな。男もんのパジャマは流石になかったから」
「……はやてちゃんのパジャマ？」

思わず今自分が着ている服を見る。

可愛いデフォルメされた狸がプリントされたパジャマ。黄色い生地で、いかにも女の子が着るといった感じだ。確かにはやてのもので間違いないだろう。

問題は、十七歳の男である俊也が何故それを着ているのか、そして何故サイズが丁度良い感じなのか。

「主はやて、気になるのは仕方ないですが、夜も遅いですし彼もまだ本調子ではないでしょう。明日詳しく話すことにしましょう。今日はもう休まれて下さい」

控えていたポニーテールの女性、シグナムがはやてに言う。

時計の針は十二時を過ぎていた。子供はそろそろ寝る時間だ。

「うん……せやね、俊也君もまだまだキツイやろし、安心したら眠くなってきたわ」

あくびを噛み殺し笑うはやて。目を覚ますまでずっと側にいられたのだろうか……俊也は申し訳ない気持ちで一杯になった。

「おやすみ俊也君。明日いっぱいお喋りしよな」

はやては心底嬉しそうに部屋を出て行った。その後大きな蒼色の犬が続く。

そして部屋には先ほどから一言も口を開かずに、殺気を孕んだ眼で俊也を睨む三人の女性が残った。

「お話する前に、申し訳ないけど鏡を貸してくれませんか？」

三人は怪訝な顔をしつつも手鏡を渡してくれた。

「……………どうして？」

俊也が呆然と呟く。

鏡に映るのは栗色の髪をした女の子のような顔立ちをした男の子。顔の作りは全体的に母親似だが目元は兄にそっくりだ。この頃はよく女の子に間違えられていた。親友、ユーノも最初は女の子と勘違いしてたくらいだ。自分も人のことを言えないのにずいぶんと失礼だと心から思う。

映っていた姿は確かに幼い。はやてが同年代と言っていたことも頷ける。

鏡には十七歳の少年ではなく、十歳前後の幼い少年が写っていた。

「そろそろいいだろう。本題に入ろうか少年」

「てめえ一体何もんだ？」

「嘘は言わないで下さいね」

シグナムと、赤い髪をした少し目つきの鋭い少女と、金髪のどこかおっとりとした印象を受ける女性。なんら統一性の無い三人だが、三人とも同じように鋭い殺気を俊也に向けている。

執務官として修羅場を潜ってきた俊也には分かる。殺気は本物で三人は相当な手練れだと。しかしこれが普通の反応だろうと納得もしている。今の自分はどこからどうみても不審者なのだから。

「まずはこの子を預けます」

枕元にあった相棒、インテリジェントデバイス、レイジングハートを差し出す。まだ修復が完全ではないのだから。念話を送っても返事はなかった。

「ほう、デバイスを？ 何故だ」

「師に聞いた話ですが、ベルカにはこんな諺があるそうです。曰く、和平の使者は槍を持たない」

俊也の言葉に三人が反応した。

「俺は見ての通り完全な不審者だけど敵ではない。その証として、俺の半身とも言える相棒をあなた方に託す」

スリープモードのレイハをシグナムに渡すと三人の殺気が緩くなり、消えた。敵として即刻処分という形にはならないみたいだ。

「なかなか見上げた事するじゃねえか」

赤い髪の少女がどこか嬉しそうに口をつり上げる。

「あなたの誠意、見せてもらいました」

金髪の女性が小さく微笑む。

「俊也と言ったか。それは諺ではなく小喃の落ちだぞ？」

そうだったかと首をかしげると。シグナムは少し笑った。

「……まだ名乗っていないかったな。私はヴォルケンリッターが将、シグナム」

シグナムが名乗るとそれに続き二人も名乗る。先ほどの俊也の行動がかなりの好印象だったらしい。

「鉄槌の騎士ヴィータ」

赤髪の少女が。

「湖の騎士シャマル」

金髪の女性が。

「そして盾の守護獣ザフィーラだ」

先ほどの蒼い犬が戻ってきた刹那に名乗りを上げた。

俊也が犬が喋った事に驚くが、使い魔か何かだと瞬時に理解してさほど動揺はしなかった。

「時空管理局所属の執務管、高町俊也一尉です」

改めて俊也も身分を明かした。

管理局という言葉に反応してヴィータが飛びかかって行きそうになったが、シグナムがそれを手で制する。

「さて、それではじっくりと話し合おうとするか」

どうやら一方的に襲ってくる事はないみたいだ。

俊也は話し合いの場を設けてくれた事に感謝すると同時に安心し

た。

「そろそろまじょうシグナムさん」

「こうして長い夜が始まった。」

状況確認

「……………管理局がどうしてこんなところにいるんだよ？」

ヴィータが再び敵意を剥き出しにして俊也を睨む。どうやら管理局に良い感情を抱いていないらしい。

こうした反応はさほど珍しくはないので俊也は軽く流す。

「それは俺もよく分からないんだ。あるロストログアを強奪した犯人を追って……………」

そこではつとなる。

そうだ、俊也は何故だか海鳴にいる。だが、他の二人は？　アリ

シアは？　リニスは？

「ごめんなさい、一つ聞かせてもらえないかな。倒れていたのは俺だけでした？」

「あなたの他には猫が一匹ね。一応治療は施してあるけど……………」

シヤマルが困ったような表情で答える。

「衰弱しきってるの。回復の見込みは……………あまり、ないわ」

ベッドから少し離れた籠の中に一匹の猫が横たわっていた。包帯を巻かれ痛々しい姿だが、確かにそこにいた。

「それは彼女のマスターがし……………」

フラッシュバックする。
目を背けたくなる光景。

おびただしい血の量。飛び散った臓物と肉片。

「うっ……く」

胃から込みあげてくものを必死で吐き出すまいとこらえる。

口を押さえ目尻には涙が浮かぶ。鏡で見れば酷い顔をしていたはずだ。

「おっおい、大丈夫かよ!？」

俊也の変貌に慌てふためくヴィータ。先ほどの敵意もどこかに吹き飛び困惑している。

そんな混乱の中、シャマルは冷静に俊也の背中を撫でていた。

「ありがとうございます……楽になりました」

「いいのよ……何かあるみたいね」

気分はまだ最悪だが会話する分には問題ない。

心配げな表情のシャマルに精一杯の笑顔で感謝の言葉を伝えると、痛む体に鞭打ってベッドから転がり落ちながら土下座した。

「おおい! どうしたんだよお前!」

「ちょっと、何してるの!？」

ヴィータの困惑は深まり、今度はシャマルも慌てている。シグナムとザフィーラはあまりに斜め上の行動に固まった。

「彼女はリニスと言って、俺の……」

考える。彼女は俊也にとって何なのか。

付き合いはかれこれ七年になる。弟のように扱ってくれたと思う。いや、むしろ息子として見られていたかも知れない。基本的に未っ子の甘えんぼな俊也はよくリニスに甘えたものだ。

一緒に寝たこともあるし、一緒に風呂に入ったこともある。なんだから言って知り合ってからはずっと一緒にの時を過ごしてきた。

「俺の……家族です」

胸を張って言える。

間違えなく彼女は高町俊也のかけがえのない家族だ。

「今彼女はマスターを失っている状態なんです。使い魔に魔力供給が無い状況の今、あまり時間がない……近いうちに消滅してしまう」

彼女のマスター、アリシアはもう居ない。

認めなければならぬ。リニスは見つかったのにアリシアは居ない。

あれは悪夢ではなく現実。

「もう家族を失いたくない……彼女と契約させて下さい。」

ここで彼女と契約してもあなた方には決して危害は加えません」

額を床に擦りつける。

その行動に息をのむ四人。見た目九歳の子供が土下座して半泣きになりながら必死に懇願している。その行動を一蹴するほどヴォルケンリッターは外道ではない。

「顔を上げる。お前の誠意は十分にを見せて貰っている。家族を救うのだろうか？ 早く契約をすませるといい」

シグナムの言葉にもう一度深く頭を下げ、リニスを優しく抱きあげる。

本来、敵か味方かも分からない俊也に使い魔を与えるのは危険だ。しかし、使い魔を家族と呼びここまで必死になれる俊也に対して四人は先ほどまでの不審感は雲散していた。これが使い魔を道具として使うような輩だったら、すぐさまにたたき斬られていただろうが。

家族のために必死になれるその姿に好感が持てた。四人にも今やそのように必死になれる家族がいるのだから。

「リニス……」

抱き上げたリニスは軽かった。思えばこうして猫の状態をじっくりみるのは初めてかも知れない。猫耳と尻尾を見られるのを恥じるような人だ。こうして素体の猫の姿を見られるのは裸を見られるのと同じくらいの恥ずかしさに違いない。

「契約内容はアリシアと同じ、ずっとそばにいて」

何故かすっからかな魔法を総動員してリニスに送る。

「リリカル・マジカル、仮契約 完了」

男が言うには恥ずかしい呪文を唱え仮契約を完了する。これでリニスの同意を得て本契約である。まあしぶつても無理矢理契約するが。

とにかく、これですぐさま消滅という事態は避けられる。

「……………」

「おいおい、ほんとに大丈夫かよお前」

リニスを抱いたまま、前のめりに倒れそうになったところをヴィータに支えられる。

「ありがとうヴィータちゃん」

「お、おう。でもちゃん付けはできればやめてくれ」

何か気恥ずかしかつたのだろう。ヴィータはすこし頬を赤らめてそっぽを向いた。

「魔力がほとんど無いのに無茶するからよ」

「……………」

シヤマルに俗に言うお姫様抱っこ状態でベッドに戻される。

「さて、辛いだろつが話を聞かせて貰うぞ」

シグナムの鋭い視線に少し息をのみつつ口を開く。元々衰弱していたのに加え深刻な魔力不足で体調の悪さが尋常じゃないので早く済ませたい。

「もう一つすいません。新聞ありますか？ 朝刊でも夕刊でもいいので、今日の分を……………」

「新聞？ 何だかよくわからんがいいだろう、取ってこようか」
「なら俺が持ってこよう」

ザフィーラがのっそりと立ち上がり、前足でドアノブを捻りドア

を開け出て行った。何とも器用である。

ガチャリとドアが閉まる音がし、部屋には何とも気まずい静寂に包まれた。

腕に抱くりニスの暖かさに安心しながらも考える。

この状況を……何故こんな状況に陥ったのか仮説を立て、推測し、結論を出す。

正直訳が分からない。夢と言われれば納得してしまうが、あいにく現実なのは確認済みだ。

地球とミッドの知識や常識、執務官の経験を持つても意味不明。

いや、そんなに考える必要はなかった。原因と言われて思い浮かぶのは一つしかないじゃないか。

「ジュエルシード……か」

ロストログアが原因なら説明は付く。というか、ロストログア絡みなら全部ロストログアのせいです。間違いはない。

効果は外見年齢の退行と次元移動といったところだろうか。断定はできないが間違いはないだろう。

「ほら取ってきたぞ」

「ありがとうございます」

退室時と同じように部屋に戻ってきたザフィーラ。口にはしつかりと新聞を加えている。テレビで時々見るお利口さんな犬みたいだと思ったが、決して口には出さない。

「……うん？」

いつもの癖でまずテレビ欄から目を通す。執務管になっても変わらなかつた癖で、よくからかわれたものだ。

そしてそのテレビ欄で懐かしい番組を発見した。昔からよくある特撮番組、いわゆる戦隊ものといったやつだ。

俊也はよく女の子に間違えられていたが、中身はれっきとした男の子。年相応にこういう戦隊もの、怪獣や光の宇宙人が大暴れする特撮、アニメなど大好きであり、夢中で見たものだ。

再放送かなと思つたが、そうではなかつた。

その戦隊ものだけではなく、アニメ、ドラマ、バラエティ番組、その全てが見知つたもの、そしてそのほぼ全てが現在では番組終了している。そう、今日の新聞のテレビ欄に載ることはありえない。

まさかと思ひながら日付を確認する。本当ならテレビ欄を見る前に確認しなければならぬ事だが………。

そして、改めてロストロギアという規格外のロストテクノロジーの出鱈目さを思い知る。

「にやはは………まいったな、斜め上過ぎるよ」

子供の頃の口癖が思わず零れた。

日付は、 年、九月二十八日。

俊也達ライトニングスターズがユーノの要請を受けジュエルシード奪取の任につてから、およそ八年前の日付だった。

「外見年齢の退行、次元跳躍に加え時間旅行とは。にやはは………
……さすがロストロギア、何でもありなんだな」

俊也はあまりの予想外の現実に叩きのめされた。

時を越えた迷子

「……状況が把握できませんでした。自分でもいまいち信じられないし、あくまで憶測の域をでないけど聞いてもらえますか？」

シグナム達は無言で頷き、俊也もまた頷き返す。

リニスを枕元に優しく寝かせ、頭の中で纏まった考えを口に出す。

「まず初めに、俺の実年齢だけど十七歳です」

「おいおい、いきなり嘘ぶっこくなよ」

ヴィータが突っ込むが、俊也はそれを黙殺し話を続ける。

「今の外見年齢は多分九歳くらいだと思います。原因はロストロギアで間違いないです。俺とリニス以外には何か落ちていなかったですか？」

「あつたぞ。そのジュエルシードとはこれのことか？」

シグナムがはやてのものなのだろう、ウサギの形をしたポシェットから取り出したそれは間違いなく強奪されたジュエルシード。ひび割れているものもあるようだが、確かに二十五個そこには一つも欠けることなくあつた。

「並々ならぬ魔力を感じていたが、よもやロストロギアとは……」

「暴走の心配はないように処置はしているので安心して下さい。これが原因なんですか？」

シヤマルの問いに答える。

説明するのはここに至るまでの過程。あくまで推察だが……。
。任務の失敗、犯人の自爆と相棒の死。痛み、悲鳴を上げる心を精神力で押さえ込み、何とか表情に出ないようにする。アリシアが死に至るまで説明するのはあまりに辛すぎた。

「……………今説明したとおりです。おそらく、ジュエルシードの力は外見年齢の退行と次元跳躍に加え時間旅行だと考えられます」

俊也は自分の考えを述べたが、部屋の空気は死んでしまった。説明に驚き、考える表情を浮かべたが、一番大きなリアクションを起こしたのはアリシアの死を話したとき。悲痛な表情を浮かべる騎士達は思った以上にお人好しのようなようだ。

「お前は……………辛くねえのかよ？」

冷静に話す俊也に対し思うことがあったのか、ヴィータが声を上げる。

「俺もアリシアも管理局員、いわば軍人です。それも執務官と補佐官となれば危険が伴うのは当たり前。覚悟は出来ていた……………出来ていたはずなんですけどね」

声が段々と小さくなり、視界が滲む。

「すまねえ……………」

ばつが悪そうにヴィータが俯く。
辛くないはずが無い。辛いに決まっている。

大好きな人が目の前で肉片になった。しかも自分をかばってだ。女から守ってもらってのうのうと生き延びる。酷く情けない。彼女を守るのは他でもない自分の役目だったはず。それが逆に守られるとは何と不様なことであろうか。おまけに守ってくれた彼女は死んでしまった。笑い話にもならない。

「にやはは……ごめんね、こんなに泣き虫のはずじゃないんだけどな、俺」

袖で涙を拭う。拭っても拭っても溢れてきて止まらない。

涙をこらえきれないのは小さくなってしまったからだろうか？

どうも口調も幼く感じる。魂が肉体に引つ張られるというやつだろうか……それは後々考える事にする。それ以外の問題が今は山積みだ。

「辛い話をさせたな……そして、お前はこれからどうするとうんだ？」

「はは……どうするにも何も出来ないですよ。重傷を負い、頼れるものは何もない。まさにお手上げ状態です」

「……管理局や親に頼るといふ選択肢は無いのか？ いや、管理局に連絡されたら困るが、この時代にもお前の親族は居るのだろうか？」

「それは出来ません。この時間軸に高町俊也という存在は二人いることになりました。この時代の俺と、未来からやってきた俺の二人です。もし俺が俺に会うようなことがあればどんなパラドックスが起るか想像できません。ドッペルゲンガーに会ったら死ぬといいますし、良い方向には行かないでしょう。」

管理局も駄目ですね。いずれこの時代の俺は管理局に入ります。そこで確実に不都合が起きる……」

九月、俊也が魔法の練習を必死に頑張っていた時期だ。

ユーノの指導の下鍛錬に明け暮れていた、楽しくて楽しくてしょうがなかった日々。

もちろんこの時期にもう一人の自分と出会った記憶のなどない。ならば、関わらない方が良いに決まっている。もちろん、大好きな母と兄と姉にもだ。

「いわば俺とリニスは次元漂流者、それも管理局どころか誰も頼れない」

この時期はリニスとアリシアとも出会っていない。

アリシアから聞いた話だとこの時期はブレシアさんが入院したりとミッドで色々とバタバタしていたらしい。執務官補佐としてもまだまだ新米で覚えることも多く、本当に目が回るほど忙しかったか。

地球には居ないはず。アリシアとリニスと出会うのは俊也が十歳の頃、季節は冬……つまりは現在より一年以上後だ。

「……そう考えるのが妥当なのか。にわかには信じられんが」

「肉体の退行はともかく、時間移動は聞いたこともありません。まあロストロギアに常識なんか通用しないでしょうけど」

リニスを撫でながら考える。

理解の範疇を超えてしまっているが、時間を跳躍したのは紛れもない事実。

それに伴い様々な問題が浮上してくる。

頼れる存在は無い。住むところもお金も無い。パラドックスを避けるためこの時間軸の自分と遭遇することは避けなければならない。そうすると下手に外を出歩く事も出来ないし、戸籍も無いと考えて

良いだろう。ならば病気になって医者に行くことも出来ないし、学校や就職だって不可能だ。

「……既に詰んでるか」

何もできやしない。

俊也は考えれば考えるほど悪くなっていく状況に絶望しながら顔を俯かせる。

「シグナム、そろそろいいんじゃないかしら。この子はまだ体力も回復しきってないのだし、早めに休んだ方がいいわ」

シヤマルの言葉にシグナムが頷く。

「そうだな。俊也、詳しいことは明日主も交えて改めて話そう。今日の所はもう休め。気がついていないだろうが尋常じゃないくらい顔色が悪いぞ」

「そんな白い顔しやがって、あたし達が悪人みたいじゃねえか。ほら、寝てる」

ヴィータが俊也をベッドに寝かしつけ布団をかける。

「お前に悪意が無いことは既に皆承知している。何、悪いようにはせんさ。今は身体を休める事だ。監視の必用も無いだろう。シグナム、我らもそろそろ休もう」

ザフィーラの言葉がきつかけで、この場は解散となった。

不審者である俊也に対する措置としては随分甘いと思うが、俊也にとっては大助かりだ。

このまま家の外にでも放り出されていれば、最悪死んでいたかも

知らない。

「ありがとう……本当にありがとう」

彼等に心からの感謝を。

涙をこらえて目を閉じると直ぐに深い眠りについた。

疑問

「ん……」

窓から差し込む朝日で自然と目が覚めた。

不思議と目覚めはいい。妙に頭がスッキリしている。

軋む体に鞭を打って上体を起こす。何故か全力で走った後のように気だるい。頭はスッキリしているので妙な気分だ。

見慣れない部屋、一瞬此処がどこだか分からなくなるが、すぐに昨日のやりとりを思い出す。

「……夢じゃ、ない」

「そつや、夢なんかないよ」

聞き慣れない声の方を向くとそこには昨日の少女、はやてがいた。いつからいたのだろうか？ 寝顔を見られたと思うとどこか恥ずかしい。

「おはよう俊也君、疲れはちゃんととれた？」

「うん、何だか久々にぐっすり眠れた気がするよ」

執務官とデバイスマスターを兼任していた俊也の毎日は多忙だった。

休みはほとんど無く、毎日夜遅くまで仕事をしたり、デバイスの研究をしたり、徹夜する事も少なくない。

「それなら良かったわ。お腹空いてへん？ 何か消化の良い物がいいと思っておじゃ作っとるんやけど食べれそうか？」

「ありがとうはやてちゃん。うん、貰うよ」

素直に好意に甘えんとする。前日瀕死の大怪我を負ったのが疑わしいほどに身体は健康そのもの。胃袋も先ほどからぐうぐうと自己主張を開始している。

「ちゃん付けせんでええよ、何か恥ずかしいわ。じゃあちょっと待っててな、すぐに取ってくるさかいに」

そう言うとはやては眩しいほどの笑顔を見せて部屋を出て行った。

「………しっかりした子だな」

正直な感想。

自分のはやてくらしいの年の時はどうだっただろうか？ 囑託魔導士になって多少は改善されたが、ひどい甘えん坊でこんなに大人びた空気は纏っていなかったはずだ。

「頭が上がらない。なあリニス、レイハ」

返事は無い。

リニスはまだ眼を覚まさないし、レイハの応答も無い。

大事なことは分かっている。レイハは自動修復が済むまで、リニスはおそらく誰かが回復魔法をかけてくれたのだろう。もうほとんど外傷は見あたらぬ。

俊也が魔力供給しているので消滅する心配もない。じきに眼を覚ますだろう。

「アリシア………俺たちどうにか生きてるよ」

視界がぼやけてきたので慌てて眼をこする。

ここで泣いたらはやては心配するだろう。あんな小さな女の子に心配をかけさせるわけにはいかない。

「お待たせや俊也君。我ながらの自身作やで！」

「おう、起きたのか。どこか痛かったりしないか？」

涙の痕跡を完璧に消し去った頃にヴィータを伴ってはやてが帰ってきた。

車椅子のはやては食事を運びつつドアの開閉は難しいので、お盆を持っているのはヴィータだ。

「猫の方はまだ起きねえみてえだけど心配すんなよ。シヤマルの回復魔法はかなりのもんだからすぐに眼を覚ますさ」

昨日のやりとりで完全に警戒は解かれたようで、ヴィータはかなり嬉しく話してくる。

正直こういう態度で接してくれるのはかなり嬉しい。

「ほら、飯だ。はやての飯はギガうまだから驚くなよ！」

お盆にはお椀に入ったおじやと牛乳の入ったコップ。ミッドで米食はあまり普及していないので、こうして米を食べられるのは日本人の俊也にとつてとてもありがたい。

「ありがとうヴィータちゃん」

「礼はあたしじゃなくてはやてに言えよ。あとちゃん付けはやめろ」「分かったよヴィータ、俺の事も俊也でいい。はやてちゃんありがとう、いただきます」

「はい召し上がれ。だから私の事も呼び捨てでかまわへん言うとするやん。何か気恥ずかしいんよ」

「うん、わかったよはやて」

ほんのりと頬を紅くするはやてをかわいいと思いつながら、おじやを口に運ぶ。

「うまい……」

あっさりとした和風の出汁で食べやすい。卵も半熟になっていてかなりいい具合だ。

「口に合ったみたいで良かったわあ！ 私ってこうして身内以外の男の人に手料理食べて貰うって初めてやねん。いやあ美味しい言ってくれてほんま嬉しいわ！」

「うん、その年でこれだけ料理できれば大した物だよ。やっぱり料理の出来る女の子っていいなあ」

何故か俊也の周りの女性は料理スキルを持っている者が少なかった。

姉である美由希を筆頭に、アリシア、クロノ、ランスター提督に姫殿下。ちゃんとした料理と呼べる物を作るのはリニスにルシエ少将くらいか。

箸を進めながら思う。今思い描いた人物達とはもう二度と会うことは出来ない。

世話になりっぱなしで、なにも恩返しできていない。申し訳なく思うが、どうしようにもない。

「ごちそうさま。本当に美味しかった」

「お粗末様でした。これでも一人が長かったら料理は得意なんよ」

空いた食器はヴィータがお盆に乗せて運んでいった。

ヴィータに感謝の言葉を述べつつ、先ほど聞き逃さない単語を口にしていたので聞いてみることにした。

「一人が長かったって？」

「うん、私随分と長い間一人暮らししとったんよ」

「一人……暮らし？」

一人暮らし？ 小学生の女の子が一人暮らし？ それも長い間？ その事を何でもないように語るはやてに驚愕する。

どこか照れくさいのか、少しはにかみながらも嬉しそうに話すはやて。

「それでも今は一人やないからな、ここ毎日が本当に楽しいんよ。無駄に鍛えられた家事スキルを思う存分発揮できるしな」

「はやて……その、ご両親は？ それにシグナムさん達と暮らしてたんじゃないの？」

「おとももおかも、だいぶ前に死んでしまっただ……。あ、そんな顔せえへんでもいいよ、私はとくにふつきれてるから。気にせんでいいって」

苦笑しながら言うはやて。おそらく言葉通りに気分を害してはいないのだろう。

「ぶつちやけた話、もう両親の顔もよく覚えてないんよ。薄情やろ？」

「そんな事……シグナムさんやヴィータ達とは？」

顔を思い出せないほど昔から一人暮らし？

疑問が次から次へと浮かんでくるが、今ははやてとの話を優先させる。

「シグナム達とは今年の六月四日、私の誕生日に家族になったんだよ！」

嬉しそうに話すはやてとは対照的に俊也は混乱していた。表情は冷静を装っているが、はやての話には突っ込み所が多すぎる。

「私っていわゆる魔法少女らしいんですよ。シグナム達から聞いたんですけど、俊也君も魔法使いなんやろ？」

「うん、今は修復中だけどこの宝石が俺のデバイス……魔法の杖だよ」

沈黙している相棒、レイジングハートをはやてに見せる。

「その宝石が俊也君のデバイスなんやね。私のはこれや！」

にっこりとした笑顔ではやてが取り出したのは一冊の本。

そのハードカバーのしつかりした本を大事そうに腕に抱きながら、本当に、本当に嬉しそうに話す。

「この子な、闇の書っちゆう物騒な名前なんやけどな。物心つくころから家にあつてな、鎖が巻かれとって読まれへん変な本やったんやけど、今年の誕生日にえらい光って鎖が解けてな」

「……そしてシグナムさん達が現れたと」
「そうなんよ！ 最高の誕生日プレゼントやったわ！」

テンションが上がりきゃいきゃいとはしゃぐはやて。その幸せそうな顔を見るとこっちまで心が温かくなる。

そんな姿を微笑ましく思いながら考える。

はやての話は驚くことばかりだ。

まず足の不自由な小学生女子が一人暮らしをしている点。

それなりに長い期間保護者が必要な子供を一人で放置し、現状を維持していた点。周りの大人はどうしていたのか。

はやてがこの異常事態を異常と認識していない点。

正直俊也はこの現状、そしてはやての今までの生活が信じられない。

「シグナム達はヴォルケンリッターって言ってな、この闇の書の主を守る騎士らしいんよ。私が主って事になつとるんやけど、そんな堅苦しい主従関係やなくて今は楽しく家族やつとる。みんなええ子達やで」

「うん、俺も良くしてもらつたし皆優しい人だね」

「そうやる！ 最初は堅苦しい所もあつたんやけどなあ……」

それから惚気るように家族の事を喋る。

「ヴィータはアイスが大好きで最近ゲートボールにはまっている事。シャマルが塩と砂糖を間違えて甘いおにぎりを作ったこと。

ネタでザフィーラにペティグリーチャムを与えたところ美味しそつに平らげた事。

シグナムは服の上でもすごいのが分かるが脱ぐと更に凄い事。

色々つつこみたい話も合ったが、本当に楽しい日々だった事ははやての顔を見れば分かる。

「あはは、なんか一杯しゃべってもうたな。ごめんな、まだしんどいやろ？」

「はやての笑顔を見たらしんどさなんかどっか行っちゃったよ。こつちまではやての元気を貰ったみたい」

そう言い笑いあう。

この数十分でかなり打ち解けたと思う。

不幸な生い立ちからは考えられないほど明るくてしっかりした子だ。とても好感が持てる。

「俊也君とお喋りしているとおもしろいわ。男の子と話すんやからちょっと緊張しとったんやけど」

「俺は見た目が女の子っぽいからね……あんまり男として意識していないのかもね」

「あはは、正直に言うとも最初は女の子かと思ったんや。せやけど、シヤマルが汚れを拭いて着替えさせる時にな……」

赤くなるはやて。どうやらばつちりと見られたらしい。

「あ、あはは。ごめんな。せや！今お風呂沸かしてんよ！やっぱりお風呂入ってさっぱりしたいやる？ ちよつと沸いたか見てくるわ！」

赤い顔をしたまま慌てて部屋を出ていくはやて。こちら辺の反応は年相応らしい。……いや、ちよつとませているか？

俊也としては小学生に裸を見られたくらいで別に羞恥心など沸かないが。

疑問（後書き）

俊也の世界と原作世界の違いはいつか纏めて掲載したいです。

友達

あの後すぐに部屋に戻ってきたはやては風呂が沸いていた事を伝えてくれた。

「昨日も言ったかもしれへんけど、男の子の着替えはないんよ。おとんの服着るにしても大きすぎるし……申し訳ないけど私の服を着てもらうしかないんやけど」

「服を貸してもらえただけでも十分だよ。幸いにしてサイズはぴったりみたいだし」

はやての服がぴったり事実苦笑する。

子供の頃の俊也は小柄だった。子供の頃は女の子の方が生長が早いと言うが、その点を除いても小さかった。アリサより身長が高かった事がないくらいだからよっぽどだ。

ちなみに下着までは借りれないので現在ノーパンだったりする。

「ほんますまんな、堪忍してや。今日にでも買いに行ってくるから。俊也君はブリーフ派でよかったんかね？」

「俺はボクサーパンツ派で……いや、わざわざ服を買いにいつて貰うのも……」

「遠慮は無しやで。しばらくはうちで暮らしていくんやし服が無いと困るやろ？」

何でもないように言ったはやてに驚いた。声も出ない。

「なんやえらい驚いた顔して。簡単な事情はシグナム達から聞いとるよ。事故で別の世界からやってきたんやろ？うちの庭に倒れとったのは偶然やろうけど、行く場所もないやろうし困った時はお互

いさまや！ 遠慮せんで甘えていいんよ
「はやて……」

なんと頼もしい言葉か。この小さな女の子に頼らないといけない現状を情けなく思うが、ここは好意に甘えるしかない。

魔法とかかわっているからか、別の世界からやってきたという嘘みたいな話を信じてくれているのはとてもありがたい。

「ありがとう……絶対にこの恩は返すから……」

「そうかしこまらんでや、恥ずかしいわ。そのかわり一つお願いがあるんやけど……」

そう言うとき少し恥ずかしそうに俯き、意を決したように俊也の眼をみて可愛らしいお願いをする。

「その、な。私と友達になってくれへんか？ 異性の友達はもちろんやけど、同年代の友達もおらへんねん」

恥ずかしいのだろう、顔を真っ赤にするはやてを見て自分の顔も赤くなつていくのを感じる俊也。

(可愛すぎるぞはやて……)

精一杯の勇気を振り絞つての言葉だっただろう、まるで告白を終えた後みたいに赤くなるはやてを素直に可愛いと思った。

「そ、それで、どうやるか？」

「もちろん、俺なんかで良ければ」

断る理由なんか無い。こんな可愛らしい女の子と友達になれるな

ら願ったりかなったりだ。

友達ゼロ発言の後だけど、こんな暗い発言は色々とおかしいはやての現状のせいだ。

同年代の友達、と言っていたからおそらくシグナム達は俊也の実年齢が十七という事を伝えていない。

違う世界からやってきた男の子……それがはやての認識だろう。

実際は色々複雑な事情を抱えている俊也だが、はやてが知る事情はこの程度でいいだろう。アリシアの死なども知ってしまうと色々気をつかわせてしまう。

色々詳しい事はシグナム達と話し合っつて決めなければならぬだろう。もしはやてが外出した時にこの時代の俊也と出会ってしまうと目も当てられない事態になってしまう。

「よ、よかつたわあ。ああ緊張した……これで私達お友達やね！」

「断るわけないのに。よろしくはやて」

右手を差し出すと嬉しそうに手を握りぶんぶんと思いつきり握手する。

嬉しそうなはやての顔を見ると自然と顔がほころんでくる。友達というは大切だ。俊也もそれはよくわかってる。俊也は友達という存在に救われたのだから。

「あら、随分と楽しそうね」

「シヤマル！ あの子、俊也君と友達になつたんよ！」

「良かったですねはやてちゃん！ ふふ、とっても嬉しそう」

バスタオルと着替えを持ってきたシヤマルは、はしゃぐはやてを見て微笑む。

「はい、タオルと着替えです。はやてちゃんのパジャマだけど文句

は言っちゃだめよ？ スカートを履くよりいいでしょう？」

「俊也君スカート似合いそうやもんな」

「あんまりからかわないですよ。女装にはトラウマがあるんだから」

タオルとデフォルメされた猫がプリントされたピンク色のパジャマを受け取る。

見た目が女の子っぽい俊也は、たまに理不尽なゲームを吹っかけられては罰ゲームとしてよく女装させられた。

主な首謀者は枕元で寝息を立てているリニスとクロノ執務官、たまにランスター提督も。ちなみにユーノも被害者だ。

「早く入ってくるとええで。しっかり温まってゆっくりと疲れをとるんやで」

「お言葉に甘えて……っ」と

「大丈夫!？」

ベッドから立った所でバランスを崩して倒れそうになった。

すんでのところでシャマルに支えられて倒れる事はなかったが、なぜが膝が震えていて上手く立てない。

「まだ体が本調子じゃないみたいね。一時的なものではあると思うけど……お風呂場で倒れて頭でも打ったら大変ね」

「うーん……お風呂は好きだから入りたいけど……」

死因が風呂で滑って頭を打ったなどギャグ漫画でしか見た事がない。さすがにそれはごめんこうむりたい。

「大丈夫やで俊也君、すっごい解決策を思いついた！」

にまゝとなんだかとても良い顔で笑う。

「シヤマル、シグナム達はもう家出たか？」

「はい。シグナムは道場に、ヴィータちゃんはザフィーラと散歩に行っています。おじいちゃん達に顔を出すでしょうから少し遅くなるでしょうね」

「なら大丈夫だな。皆には内緒でちよつとした贅沢や！ シヤマル、私らも俊也君と一緒に入れればいいねん。朝風呂なんて久しぶりや！」
「あら、いいですね！ それなら心配ないですし」

俊也を置いてけぼりにして盛り上がるはやてとシヤマル。俊也は一呼吸分呆けたから慌てだす。

「何言ってるんだよはやて、俺は男だよ？ 恥ずかしくないの！？ シヤマルさんも止めて下さいよ！」

「いや、私としては友達と裸の付き合いをするっちゆうのも一つの夢でな……」

「同姓としてよ！ シヤマルさんはなんでそんな聖母みたいな目でごつちを見てるんですか！」

「いや、はやてちゃんも慌てる俊也君も可愛いなと思って」

頭を抱える。

はやてはまだ大丈夫。可愛らしいといってもまだ子供、どう頑張っても妹のようにしか見れないし、女として見たら捕まる。

しかしシヤマルはまずい。控え目に言っても美人だし、上品でどこかおっとりしている空気をまとっている彼女は大変魅力的だ。

(シヤマルさんは俺が見た目の年齢が退行していることを知っているはずなのに……)

女の子っぽいと言われる俊也も立派な男の子なわけで……シヤマ

ルと一緒に風呂に入ろうものなら色々とのっぴきならない状態になるのは仕方がない。

どうにかしてくれ、と目でシャマルに訴えかけるがシャマルの返答はますます俊也を不利にする。

「あら、私は気にしないわよ。はやてちゃんと同い年くらいですし」
「どうやら男として見られていないようだ。内心色々複雑である。」

「家長命令やから拒否権はないよ俊也君」

「ずるいよはやて……」

それを言われたら従うしかない。

今の俊也ははやての機嫌一つで路上の人になってもおかしくないのだから逆らえない。

「それにな、実は私弟とかほしかったんよ。だから弟とお風呂入るみたいで楽しそうやん！」

「なん……だと」

はやてからは友達兼弟分として見られているらしい。これはさすがに予想外だった。

友達（後書き）

ちなみに俊也はなのはと違いアリサにぶん殴られたのがきっかけで友達になっています。

家族（前書き）

文章力が……欲しいです。
そして中々話が進まない……。

家族

「かゆいところは無いですか？」

「大丈夫です。気持ちいです……」

「ふふ……それは良かったです！」

真っ裸で椅子に座り、優しく丁寧に頭を洗われている。

洗ってくれているのはシャマル。時々鼻歌が混じるためかなりご機嫌のようだ。

「よかつたな俊也君。役得やで、こんな美女二人とお風呂に入れるなんてな」

はやては湯船からからかいの言葉をかけてくる。

実際にシャマルは美人だ。はやては美人と言うよりは可愛いという表現の方が合っているが。

「はい、流しますね。ちゃんと目を閉じてないと染みますよ？」

「だから……あまり子供扱いは……」

今の俊也は正しく子供だ。体格だつてはやてと同じくらいでとても小さい。

しかし、心は十七歳の少年である。子供扱いは勘弁してもらいたいのが本音だが、どうやら望み通りにならないらしい。

詳しい事情を説明していないはやは仕方がないかもしれないが、シャマルには事情をちゃんと説明しているのだが……。嫌がらせか、単に男として見られていないだけか……。どちらにせよ俊也の心境は複雑だ。

はやては変な所で律儀というか漢らしいというか……」

お風呂ではタオルを巻かないのがマナーや』と言い、顔を赤くしながらタオルを巻かずに生まれたままの姿を俊也にさらけ出した。シャマルもはやてに習いタオルを装備していない。

俊也もそれに従い嫌々タオルを手放した。当たり前だが裸を見られるのは恥ずかしい。しかも体が子供だからそれによりいっそう拍車がかかっている。

つるつるな自分の局部に、完全に子供な自分のモノを見たときは何故かショックを受けた。

はやては幼いながらも男のモノに少しばかり興味があるらしく、真つ赤になりながらもチラ見して『その、なんか可愛いな』という感想を言い俊也を落ち込ませた。

アリシアと初めて一緒に風呂に入った時も同じ感想を貰ったはずだ。

しかし、その時は身も心も正真正銘の十歳で、今は体は子供心は大人のコン君状態。今とは状況が違う。とてつもなくご立派というわけでは無かったが、さすがに可愛いと評されると少し落ち込む。そして何より俊也を落ち込ませたのはシャマルだ。

シャマルは十人いたら十人も美人だと答えるほどの美貌の持ち主だ。それに加えてプロポーションも良く、白い肌や形の良い胸など男を惑わす要素を大量に持っている。

俊也も男だ、こんな美女と混浴すれば当然男としての機能が働くが……それが働かなかった。

子供の体なのだから当然だが、問題は感情面。シャマルの体を見て綺麗だと思いが、少しも興奮できなかった。詳しく言えば性的な目で見る事ができなかったのだ。この事実は俊也を揺さぶった。正しく心が体に影響されているのだろう。しかし俊也にしてみれば十七歳にして完全に性欲が失せて涸れているような状態である。それは落ち込みもする。

「はい、綺麗になりましたね！ 体も洗いましょうか？」

「あ、それなら私も混ぜてや。三人で洗いっこしよ！」
「いいですね！ 裸の付き合いにはつきものですよね！」

きゃいきゃいと楽しそうにはしゃぐ女子二人。俊也はおいてけぼりだ。

体の洗いっこ、とても興味がそられる魅力的なフレーズだが、実際は背中を流すだけだ。さすがに前は自分で洗う。

「シャマルが俊也君を、俊也君は私をお願いや」

はやてはシャマルに抱えられて湯船をでると、俊也の前に座った。ちなみにお風呂用の椅子はシグナム達が来てから買い足したらしく、計三つもある。

「いやぁ実はこういうの少しあこがれとったんや。ほら、漫画とかドラマとかでこういうのあるやん？ 子供が親の背中を流すってな」
「なら、はやての背中を流す俺ははやての子供と言うことになるけど？」

「私が養つっていう意味では子供ではあると思っけどな？」

そう言われたらぐうの音も出ない。

「何だか楽しいですね。背中を流し合いなんて初めてですから。俊也君、しっかりとはやちゃんを洗ってあげて下さいね」

「任せてよ、これでも時々姪っ子の背中を流してたから」

末っ子の俊也は姪を下の兄妹ができたように喜び可愛がった。姪も俊也に懐き、たまに里帰りすると無邪気に甘えてくれた。

「姪っ子かぁ。それなら俊也君はもう叔父さんなんや？」

「叔父さんと言われると何だか複雑だけどね。兄ちゃんの子供で雲つていう名前なんだ。とても元気で明るい子だよ。それに将来は間違いない義姉さんに似て美人になると思う」

月村雫。兄恭也とそのお嫁さん、月村忍との間に誕生した女の子。夜の一族の身体能力に兄、恭也と姉、美由希から御神の英才教育を受けていて、将来間違いなく最強の御神の剣士に成長したであろう愛すべき姪。魔法抜きにして陸戦ランクはどのくらいのものになっただろうか……。ちなみに兄と姉は間違いなくストライカークラス。俊也は剣の才能はなかったために純粋な体術、剣術では二人の足下にも及ばない。

姪の成長を見てみたかったが……。それも叶わない。

「一度会ってみたいなあ。あ、でも別世界なら無理か……。残念や」

はやては別世界の人間という話を信じている。騙しているように悪いが、別の世界という表現はあながち間違いではないだろう。

「すぐに仲良くなれると思うよ。はやては面倒見が良さそうだから尚更だね」

タオルを泡立て背中を流す。小さな背中、華奢な体、それを宝物を扱うように優しく洗っていく。

「ん……。良い気持ちや。私な、下の兄弟が欲しかったんよ。そしたら一人で寂しい思いすることもないやろ？」

「今は一人じゃないですよ。はやてちゃんには私達があります」

「うん、今は寂しくないよ。毎日幸せや」

絆を再確認している二人。とても心温まる光景だ。

はやての話が本当なら家族が出来て日が浅い。半年も経っていないのに加え、おそらくシャマルは……はやての家族は人間ではない。

魔導生命体……詳しくは分からないが使い魔ともまた違った存在なのだろう。

しかし、はやての顔を見れば幸せという言葉が嘘じゃないことがわかる。あんな笑顔を浮かべている少女が不幸なはずがあるわけではない。

「シャマルもシグナムもヴィータもザフィーラも、大切な家族や」「ふふ、ありがとうはやてちゃん」

そしてそれはシャマルも同様。

顔をのぞき込んでみると見惚れるような笑顔を浮かべていた。

背中 of 流し合いは中々に楽しかった。

途中向きを変えたりもしてみた。はやては小さな手で一生懸命背中を洗ってくれた。その一生懸命な姿は何か心にくるものがあった。

シャマルに背中を流された時は時々やわらかな感触を背中に感じた。無論、一糸まとわれないシャマルの持つ女性の象徴なのだが……
……一切興奮できなかつたのが少し悲しかったのは内緒だ。

逆向きになるとそんな感触が襲ってくることもなく、気を張らずにシャマルの綺麗な背中を流すことができた。はやてはまだ女性特有のふくらみがないため安心できる。

はやての提案でこうして裸の付き合いをしたが、はやての思い通

りにすっかりうち解ける事ができた。

広めの浴槽なため三人で湯船に入ることが出来、肌は密着してしまっているが割とゆったりと入る事ができる。

シャマルが俊也を抱きかかえ、俊也がはやてを抱きかかえる形だ。背中にシャマルの胸が当たっているがもう気にならなくなった。思考は大人のはずだけど、体は子供の反応をしてしまう。

そうやって肌を密着させながら、色々話をした。

はやては俊也の事を聞きたがったので聞かせても構わない事を話して聞かせた。

好きな食べ物や趣味、得意な魔法など、何でもない世間話だ。

「はやてちゃん、そろそろ上がった方がよくないですか？」

「せやな……結構長湯しとるな。俊也君、のぼせてないか？」

「俺はもともと結構長湯する方だから大丈夫だよ」

「それならよかった。じゃあそろそろ上がるうか」

友達とのお喋りが楽しいかったみたいでそこそ長く話した。はやての楽しそうな顔を見ると俊也も楽しくなる。どうもこの少女を放っておけない、ついついかまってしまいたくなる。

「俊也君、頭拭いてあげる。こっちおいでや」

はやては俊也のことを完全に弟分として見ている。

本来なら俊哉の方が年上なのだが、はやての好きなようにさせる。弟の世話を焼けるのがうれしらしい。

ちなみにヴィータは妹じゃないのか？ と聞いたら。

「ヴィータはちょいと気の強い娘やな。シャマルはドジっ子母さんでザフィーラはまんま犬やし、シグナムはお父さんやな。ソファア

に座って新聞読みながらコーヒー飲んでる姿はほんまに中々に様になつとるで』

という言葉が返ってきた。

中々愉快的家族評だ。しかし、そう語るときのはやての笑顔、必死にドジっ子部分を否定しようとするシャマル。じゃれあう二人を見て改めて仲が良い素晴らしい家族だと思った。

もつとこの家族と仲良くなりたい。そう心から思えた。

今は悲しい記憶を仕舞い込み、この明るい家族の下で生きていこう。

(母さん、兄ちゃん、姉ちゃん、忍義姉さん、すずか義姉さん、ユーノ、クロノさん、クライドさん、エイミィさん、オリヴィア姫殿下、ティータ、ティアナさん。……………アリシア)

様々な人の顔を思い浮かべる。

今まで関わってきた人、お世話になった大好きな人たち。

(……………さようなら)

その人達に別れを告げる。もう二度と会うことはできない。ある意味では高町俊也は既に死んでしまっているのかもしれない。

(俺はここで生きてみる。この温かな家族の元で、リニスと一緒に……………)

はやてに髪を拭いて貰いながら、ばれないように、これで最後と心に決めて、静かに涙を流した。

家族（後書き）

原作世界と俊也世界の差異を少し説明します。

クライドさんは御存命。

クロノの性別。

恭也、忍、年齢が原作よりも上。

さすがが美由希と同じ年で親友。

俊也とさすがは盟約を結んでいて一生の友達。

ティードは俊也の二つ年上で同期の執務官。

ティアナはティードの姉、クロノの士官学校の先輩で次元航行艦の艦長。

聖王の血筋は絶えず残っていて、日本で言う天皇のような地位。

と、色々と考えています。

ある程度投稿が進んだら番外として設定集も投稿したいです。

感謝（前書き）

思うように話が進まない・・・。

感謝

「ただいま」

「主、遅くなりました」

ヴィータとザフィーラが帰ってきたのはお昼少し前。

ヴィータは朝早くから仲の良い近所の高齢者とゲートボールを楽しんでいた。ザフィーラはその付き添いで、お爺ちゃんお婆ちゃんに撫でられたりエサを貰いながらスポーツに励むヴィータを見守っていた。

自身のデバイスであるグラーフアイゼンとゲートボールのクラブの形が似ていることから興味を持ったのだが……。試しにやってみたところ結構面白く、現在では老人会のゲートボールチームに所属するほどはまりこんでいる。

「少し顔を出すだけだと言ったのに、結局まじって遊んでいたな」

「いいじゃねえか。爺ちゃん達がどうしても言うんだから」

ザフィーラはヴィータがこうしてスポーツをすることはとても良いことだと思っている。

ヴィータのような小さな少女は血生臭い戦場に立つよりも、無邪気に笑っている方がずっといいに決まっているからだ。

ご老人の方々はとても可愛がってくれて……。本当に優しい人達ばかりだ。孫のように扱ってもらえ、ヴィータも照れながらも居心地良さそうにしている。

闇の書の騎士として……。うとまれ、恐怖の、憎しみの目で見られたことは数え切れないほどあるが……。こうして暖かく接してもらるのはいつ以来だろうか。

記憶にはない。だからこそ今の日々感謝する。暗い記憶ではな

く幸福の記憶を刻み込む。

今の主には感謝してもきれない。こうした穏やかな日々を過ごせるのはあの小さな主のおかげなのだから。

「はやて〜お腹空いた……………つと、寝てるのか」

「む……………状況が読めんが」

帰宅した二人が見たものは居間で川の字になって寝ている三人。シャル、俊也、はやての順で並んで寝ている。別に昼寝をしているのは良いのだが、そこに俊也が混じっていることに多少は驚いた。

「随分と仲良くなったようだな」

はやてと俊也は手を繋いだまま寝ている。その姿はさながら中の良い姉妹のようで微笑ましい。可愛らしいピンク色のパジャマを着ている俊也は女の子にしか見えない。

「あたし達が出ていた間に何があつたんだか……………」

ヴィータもザフィーラも、昨日の一件から俊也を怪しんだりしていない。明確な敵対行為をとらなければ結構仲良くやっていけるとも思っている。複雑な事情を持つているが、それは自分たちも変わらない。はやてが保護を決めたのだ、賛成はしても反対はしない。

「起こしちゃうのは悪いな……………アイスでも食べてるか」

「ヴィータ、アイスは一日一本までだぞ」

「わかってるって」

この世界の菓子はとても美味しい。特にヴィータはアイスクリー

ムに魅せられている。

今代の主の元に顕現して初めての食事、主自ら振る舞ってくれた温かな手料理に感動し、口にして更に感動を重ね、食べ終わり、満腹感と幸福感に包まれているところに食後のデザートとしてやってきたバナライイス。ヴィータは一瞬にして虜になった。

鼻歌を歌いながら冷蔵庫へ向かうヴィータ。ザフィーラは窓際へ移動して伏せる。窓から日光が当たりとても気持ちが良いのだ。のんびりと日向ぼっこをする姿は完全に座敷犬、守護獣の威厳とかはどこかに忘れて来たらしい。

「ん……あれ、二人とも帰ってたんですか？」

「おう、起きたのかシャル。それにしても随分仲良くなったみたいじゃねえか」

丁度カップのバナライイスを食べ終えた頃にシャルが目を覚ました。時計を見て慌てている。もう時間は一時に近い。いつも昼食は十二時頃に頂くので普段より少し遅い時間だ。

「大変！ お腹空いたでしょう？ すぐに支度しますから」

「いや、お前は手を出すんじゃないかねえじつとしている」

「俊也はまだ体調も万全じゃないだろう。お前の料理など食べたら治る怪我也治らない」

「ちよつと！ 失礼すぎないですか二人とも！？」

シャルの家事スキルに全幅の信頼を寄せる二人だが、料理だけは別だ。

甘いおにぎりから始まり、スクランブルエッグという名の消し炭を作り上げ、ご飯を炊けばべちゃべちゃだし、レンジを使えば爆発させる。そのような過去の武勇伝があるためにシャルは一人で台所に立つことを許されない。

はやてがいれば別に問題ないのだが、当のはやては現在熟睡中。劇物を作らせるわけにはいかない。台所を壊させるわけにはいかない。

「仕方がねえからカップ麺でも作るさ。確かホームラン軒の味噌があつたはず……」

「いや、今朝主が作ったおじやが残っているはずだ」

「お、じゃあそれ食うか。温めるだけでいいもんな」

シヤマルの手料理よりカップ麺の方がまし。そう言われてさすがにプライドが傷ついた。

「くっ……いつか絶対見返してやるんだから！」

「あ、声大きいぞ……ほら、はやてが起きちゃったじゃねえか」

眠そうに目を擦りながら上体を起こすはやて。俊也はまだ眠っている。

「ふぁ……よう寝たわぁ。二人とも帰ったんやね。すぐお昼用意するからちよいと待っててな」

小さなあくびを一回してからしっかりと目を覚ます。

車椅子に座るためシヤマルに抱えてもらおうとしたところ、自分の片手が塞がっている事に気がついた。

「ふふ……しっかりと手え握って可愛いなあ。違う世界から迷い込んで心細かったにきまつるもんな……。でも安心してええよ、寂しい思いはさせんからな」

優しく俊也の頭を撫でるはやての姿は幼いながらも聖母のよう。まるで絵画のように惹きつけられる美しい光景だ。

「まるで弟ができたみたいや。なあヴィータもそう思うやろ？」
「うん、確かに可愛い寝顔してる」

しかしヴィータは俊也が正しくコナ君状態である事を知っているため、可愛いとは思いつつも弟扱いに少し同情するのだった。

お昼はやはり食べやすいものがいいだろうということで、にゅうめんに決まった。

簡単に作れるし夏に買っていた素麺が大量に残っていたので丁度よかった。

俊也はあれから直ぐに目を覚まし、いきなり眼前に飛び込んできたはやての慈愛溢れる表情に驚き頭を撫でられている事に赤面した。

はやてが調理し、シャマルがその手伝いをする。サポートに徹底し、味付けに手を出さなければシャマルは劇物を作らない。手伝うだけならヴィータにも出来るが、それは口に出してはいけない。

はやては皆で食卓を囲むことを望んだためザフィーラは人間形態になったが、俊也はさして驚かなかった。この女所帯に黒一点はキツイのでぜひとも仲良くやっていきたいと心から思った。

何故か俊也の周りには綺麗どころが多くいて、男が少ない。

その異常さにはティータと友人になり指摘されてから気がついた。彼曰く。

『お前の環境羨ましすぎるだろ。どれだけの男性局員が羨望と憎悪の眼差しを向けているか』

俊也の友人について考えてみよう。

チームを組んでいたアリシアとリニスは女性。魔法の指導をしてくれたクロノとランスター提督も女性。直属の上司であるオリヴィア姫殿下、後輩であるマリエルも女性。出向している陸上警備第75部隊の部隊長であるカンナ三佐、出向先の相棒であるトレニア一尉も共に女性である。

親しい男の友人と言えばユーノとティータしかいないのではないか？ クライド提督は上司だし、幼い頃からよくしてもらっているので父親のような感じた。お世話になり親しくしてもらっているゲンヤ三佐とゲイズ中將もやはり父子ほど年が離れていて友人とは言えない。

見事に女だらけ、男友達はユーノとティータのみという驚きの事実に愕然としたのも記憶に新しい。

「へえ〜オールラウンダータイプは珍しいな」

「その年で執務官にデバイスマイスターの資格を持つとは優秀だな」

はやてとシャマルとは風呂で語り合ったが、この二人とはまだあまり話せていない。

食事ができるまでの時間、俊也はヴィータにせがまれたため自身の事を話している。

「元々機械いじりが好きだからデバイスマイスターは趣味と実益を兼ねてる感じかな。執務官は師匠の一人に勧められて……試験には三回落ちただけだ」

魔法の話は結構もりあがった。俊也は独立汎用型に分類される魔

導士で、攻撃、防御、補助をそつなくこなす万能タイプである。

ユーノから基礎と防御、結界魔法を学び、クロノから更に応用と戦い方を学び、ランスター提督から幻影と射撃を学んだ。

「師が有能だったから……」

思えば恵まれた環境だった。指示してくれた人達は皆その道のエキスパートだ。

「それで武装隊に出向していたという話だったが」

「うん、俺の本来の所属は時空管理局本局技術部魔法研究開発課だから」

「長い名前だな」

本来の所属はあくまで技術部。元々訓練校をでて武装隊に一年ほど所属していたのだが、課長であるオリヴィアに引き抜かれ技術部に転属になった。

元々機会いじりは好きだったし、オリヴィアも親切丁寧に指導してくれた。それに加えアリスアにも色々教わったためデバイスマイスターの資格もわりとすんなりと取ることが出来た。

そして数年かかって執務官の資格を取ると補佐官にアリスアを指名し、人手不足の地上部隊に出向になった。そこでアリスアとリースと共にチームを組んだのだ。

「あたしも万能に近いけど補助とか結界とかからつきしだからなあ」
「俺は近接は出来ても遠距離は得意ではないからな」

俊也のようなオールラウンダーは珍しく重宝される。

俊也のチーム、ライトニングスターズが大きな功績をあげられたのは俊也の魔導士タイプによるところが大きい。攻めてよし、守つ

てよし、補助に回ってもよし。苦手な距離が無く、弱点が見あたらない相手が敵にいるとかなりやつかいだ。

「お前を敵に回したらやつかいそうだな」

「まあ俺が敵に回ることはないけどね」

笑い合う。この短時間でこの二人ともかなりうち解けた。

はやて自慢の家族はやはり皆心優しいみたいだ。

「お前の使い魔……リニスだっけか？ 早く目を覚ますといいけどな」

「デバイスの方も修復も大体終わっているみたいだ。お前も明日には体力が戻るだろう」

「うん……リニスもレイハも大切な家族だから。俺も、魔力は戻ってきてるし完治も近いと思います」

万全な状態に戻ってから改めて今後の事を考えよう。この先ずつとこの家によっかいになるにしてもならないにしても、色々と問題が山積みだ。

リニスとレイハと、よく話さなければ。

「あたしらの事はシグナムが帰って来てからだな。管理局員のお前にはあたしらの事情に色々思うことがあるかもしれねえけど」

「今の我らは主との平穏を望んでいる。それだけは誓って本当だ」

二人の真剣な目に思わず息を呑み、そして頷いた。

「おまちどおさまや！ 我ながらめっちゃ美味しくできたで！」

「少し遅くなっちゃいましたけどお昼ご飯にしましょう」

はやての声で先ほどの真剣な空気は雲散した。

「もっと深い話は夜だな。今ははやてのギガうまな飯を食おう」

「うん、俺もお腹ぺこぺこだよ」

テーブルに五人分の器が並べられ、シャマルとはやても席に着いた。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

手を合わせ、色々なものに感謝してから麺を啜る。

今まで関わった人達に。生き残った幸運に。身を挺して守ってくれたアリシアに。暖かく迎えてくれたはやてとその家族に。心からの感謝を。

「美味しい……優しい味だ」

「ほんまか？ おおきにな」

はやてが作ったにゅうめんはどこか懐かしい味がした。

感謝（後書き）

なのはは砲撃型だけど俊也は汎用独立型。戦闘タイプはクロノに近いです。

純粋な砲撃の撃ち合いではなのはに劣ります。

75部隊の二人は半オリキャラです。俊也世界の住人なので本編には絡んできませんが。

母と娘（前書き）

色々となつ造してますが、あくまで平行世界という事で。

母と娘

夢、夢を見ている。

懐かしい夢、幸せな夢。

私が生まれて初めて見たものは満面の少女の笑みでした。

『こんにちは、初めまして。今日から私があなたのママよ』

その少女こそ私の主。そして姉であり、同時にお母さん。

大切な記憶。いつまでも色あせることなく、死してもなお記憶に残るであろう幼き母の笑顔。

『お母さん……？』

『そうよ。私がママ。これからよろしくね、リニス』

『リニス？』

『そうよ、リニス。それがあなたの名前』

『リニス……私はリニス』

母はいわゆる孤児院で過ごしている孤児でした。

三歳の頃に両親を亡くされてからずっと孤児院で過ごしていると語ってくれました。

そんな母に私は生み出されました。

少し勝気で、けれども面倒見がいい。頭が良く、読書が日課で……
…とつても悪戯好き。そんな人が私の母。

母と共に駆け回り、お腹いっぱい食べて、ぐっすりと寝て、時々悪戯をしたり、勉強したり。共に笑い、泣き、喜びも悲しみも分かち合い……幼少時代は本当に恵まれていました。

転機はいつ頃だったでしょうか……そう、確か私が生まれて丁度十年。私の外見は既に成人女性のそれと大差なく、母も少女から大人の女性へと徐々に成長していたそんな時でした。

母の魔力は極めて高く、さらに魔法技術も一流。簡単に言う天才でした。

孤児院から学校に通い、飛び級を重ね最高学府を首席で卒業。そしてある論文が管理局技術部の目にとまり、局員扱いの外部協力者という待遇で管理局に迎えられました。

この事に園長や孤児院の沢山の兄弟達はとても喜んでくれて、笑顔で送り出してくれました。兄弟達との別れに私も母も涙したものです。

新しい生活に母は生き生きとしていました。かくいう私も新生活はとても楽しく充実した日々でした。

母は技術部に所属してから完全に才能を開花させたようで……生体義肢の研究、デバイスの容量の増加、演算の高速化、ベル力式力ートリッジシステムの最適化、ロストロギアの解析等、その他にも数多くの功績を残しました。

それと並行して魔法の研究も進んで行い、数多くの魔法を習得し、ついには大魔導士と呼ばれるようになりました。あくまで技術者でありながらもランクは条件付きとはいえ破格のSS。模擬戦で薙ぎ払われた武装隊は畏怖を込めて『雷の女帝』と呼び、その大層な二つ名に頭を抱えていたのを覚えています。

私は母の助手を勤めながら同時に体術や魔法を学びました。これは母を守る力を付けることが目的……というのは建前で、実際に強くなっていくことが楽しかったからだったりすることが本音です。

同じ猫の使い魔ということで意気投合したリーゼロッテとリーゼアリアの姉妹がよくしてくれて、他にもベルカの古武術家にも稽古をみてもらい、私自身空戦Sというかなり上のランクに認定されました。

母が天才なため、必然的に生み出された使い魔である私も優秀であつたらしく、母と同じ雷変換のレアスキルの評価も高かつたみたいです。

リーゼ姉妹と共に管理局最強の使い魔とも呼ばれました。照れてしまいますが、嬉しかったのは本当です。

時が経ち母も部下を持つようになり、私はいつの間にか母のことを名前で呼ぶようになりました。技術部に所属して五年、母は今や技術主任。あくまで外部協力者という形でありながら重要なポストを用意されている……。母はそれだけ手放したくない人材という事でしょう。

外見年齢は早い段階で母を追い抜いた私ですが、母が私の外見年齢を完全に追い越した頃二度目の転機が訪れました。

女性としての幸せを手に入れたのです。

才女で高嶺の花という認識が強く、人気はあるものの男性からの声全然かからなかった母。

研究三昧という寂しい青春時代を過ごしていたのですが、ようやく春が訪れました。

お相手はデュアリスというスクライアの青年。綺麗な金髪に紅い瞳をした優しい人でした。

母より一つ年下で、魔法の資質はあまり良くななく、どうしても母と並ぶと見劣りしてしまう……。そんな人。

しかし、母を思う気持ちは誰にも負けていなかった。何度かアタクを繰り返し、ようやくデートに誘えた時は嬉しそうに私に報告に来ました。

デュアリスは中性的な顔立ちで、背も高くスラツとしていてモデル体型。簡単に言えば大層なイケメンです。そんな彼にお誘いを受けたプレシアは慌ただしく化粧品やら服やら買い揃えていました。忘れていた青春を謳歌している母はどこか恥ずかしそうでした。それでも幸せそうで……私の知らない笑顔で彼と共に歩き続けました。彼なら母を任せられると砂糖を吐きながら思ったのも懐かしい思い出です。

彼と出会ってから三年で入籍。私の胃が壊れそうなほどいちゃついて、結婚二年目で待望の子供が生まれました。

二人の愛の結晶、アリシア。

どちらかといえばお父さん似の、大変可愛らしい子供……。生まれたばかりの彼女を抱いた時は不覚にも涙が溢れて止まりませんでした。

私にとってもアリシアは娘同然。使い魔たるこの身は子を成す事が可能か分かりませんが……。それでも、私もまたアリシアの母親であつたと自負しています。

母が注いでくれた以上の愛情を注ぎ、共に笑い共に泣き、一緒に時間を幸せに過ごしていった……。いつまでも幸せが続くと思っていました。

しかし、その思いも叶わない。

アリシアが四歳の頃、首都クラナガンでテロが発生。

テロリストは早急に捕縛されましたが、怪我人多数、死傷者多数の大惨事となりました。

陸の局員は最善を尽くしました。海や本局が難癖付けようと彼らは最善を尽くした。人員を際限なく吸い上げられ、少ない人材で本当によくやってくれた。それは私も母も理解しています。

しかし、失った人は帰ってこない。この怒りを、悲しみをどこにぶつけていいのか分からない。

この日、母は最愛の人を失いました。

この日を境に母は研究に力を入れ込み、家にいる時間が極端に減りました。

アリシアは聡い子だったので、理解して我慢していましたが……やはり寂しかったのでしょう、今思えばあの頃の笑顔には影があったような気がします。

人員不足の解消、動ける魔導士がもつといたらあの人は助かったかもしれない。

そう言い、ある研究を進めました。

デバイスコアに人工的なリンカーコアを組み込み、非魔導士でも魔法を使えるようにする。この研究が完成すれば人員不足は解決され、涙を流す人が減る……。寝る間も惜しんで研究を重ねていきました。

管理局の全力のバックアップを受け、プロジェクトは進行。母のもと様々な技術者が集まり研究を重ねていきました。

研究を始めてから数年、アリシアも大きくなり母の助手を務めながら勉強に励む毎日。

長年の過労のせいでしょう、母が病に倒れたのは必然だったのかも知れません……。

新しく発見された管理外世界、そこから未知のウイルスが持ち込まれミッド中に病が広がりました。特に体の弱っている人や子供、お年寄りを中心に爆発的に広がり一時期パニックになりました。

一度発症してしまうと数時間おきに発作を繰り返すこの病気……幸いワクチンはすぐに作られましたが、母はもう手遅れでした。

症状を和らげる事は出来ませんが、完治は難しい。この診断結果にアリシアと抱き合っ泣きました。

この病で多くの人が亡くなり……名だたる管理局員も少なくない数が逝き、更に人手不足が深刻化しました。

プロジェクトは事実上凍結。あと一步という所で完成のめどはついたのに……抑えきれずに悔し涙を流したことは決して忘れません。

その後アリシアと私は勉強を重ね、アリシアはデバイスマイスターとしてそれなりに名が知られるようになりました。

母親ほど魔力が多くないアリシアは主に技術者兼のフルバックの魔導士として成長していき正式に同入りすると、執務官補佐の資格を取る研修として次元航行艦アースラ所属の執務官、クロノ執務官の補佐としてアースラに乗り込みました。

アリシアが補佐につく前にある事件を民間協力者の協力のもと解決していたみたいで、その事件経過を見るために再び現地に行くという事で私とアリシアは彼女に同行しました。

行先は第97管理外世界地球。

俊也と出会ったのは雪が降る十二月の頃。忘れられない思い出です。

そこである事件を俊也と共に解決して、私達は親交を深めました。甘えんぼな俊也はとても可愛くて、アリシアは弟ができたみたいと喜んでました。

翌年春、正式に俊也が管理局に入局。母と俊也が合ったのは丁度その頃。

娘の次は息子が欲しかったと告白した母は俊也を自分の子供のように可愛がりました。

俊也はよく病室に通ってくれて、よく母の話し相手になってくれました。

一年経ち、俊也が技術部に転属になると母は自らの知識を俊也に教えて行きました。

さながら病室は講義室のようになり、俊也も熱心に話を聞き、理解し、少しずつ知識を吸収していきました。物覚えのいい俊也はとても優秀で、私やアリシアを驚かせました。

母は嬉しそうな顔で俊也に自らの知識を教え……思えば後継者を育てようとしていたのかもしれないね。わりとすんなりとデバイスマイスターの資格を取った俊也をよく褒めていました。

そして俊也がデバイスマイスターの資格を取り一年半、とうとうその時がやってきました。

病室には母にゆかりのある人達。

孤児院の院長先生。

クライド提督。

クロノ執務官。

エイミィ・リミエッタ。

オリヴィア姫殿下。

レジラス中将。

グレラム提督。

リーゼ姉妹。

ユーノ。

俊也。

アリシア。

そして私。

『院長先生……わざわざありがとうございます』

『いいのよ……あなたは私の自慢の娘なのよ』

『クライド提督、クロノ執務官、エイミィちゃん……アリシアの事、よくみてあげてください』

『ああ……任せてくれ』

『アリシアは優秀ですから何も心配いりませんよ』

『クロノちゃんもそう言っていますから安心してください』

『オリヴィア……あなたは本当に立派になったわ。これからも、俊也を良く見てあげてね』

『はい、先生。姉弟子として、上司として……っが、頑張っています……っ』

『中将、力及ばずプロジェクトは未だ完成していません。申し訳ありません』

『いいんだ、君はよくやってくれた。想像以上の働きだった。君と共に仕事ができ誇りに思う。ゆっくりと休むといい。』

『グラム提督とリーゼ達にはどれだけお世話になったか……』

『いいんだよ。君にこそ色々助けられた。ありがとう……』

『私は楽しかったよ。出会えてよかった』

『私も……絶対忘れないから、小さなリニスのママ……』

『ユーノ、来てくれてありがとう。あなたならいい学者になれるわ。私が保証する』

『あ……ありがとう……っぎいます』

『俊也……あなたに教えられることは全部教えたわ。頑張ってね、あなたとオリヴィア、アリシアとリニスがいれば大丈夫。私の研究は完成するわ』

『はい……ミッドのお母さん』

『アリシア、駄目なお母さんでごめんね？ 全然かまってあげられなくて』

『うっん！ そんな事ない！ 母さんは……世界で一番、だか……っ』

『リニス』

『なんですかプレシア』

『あなたを生んで本当に良かった。あなたは私の誇りよ、私の可愛い最初の娘……』

『……っ！ いや！ 目を開けて！ お母さん！ お母さん！ いやだ！ ……いやあ……』

夢が覚める。

懐かしい夢。悲しい夢。

母との別離。

私を誇りと言ってくれた大好きなお母さん。

夢が覚める。

残酷な現実がやってくる。

「アリシ……ア。しゅん……や」

「っ……と…」

「ん？ どうした？」

現在ヴァイータとゲーム中。

はやては食料や俊也の衣服を買いにでかけ、シヤマルはその付き添い。ザフィーラは荷物持ちだ。

ヴィータが留守番役で、暇だからと俊也と共に対戦格闘ゲームで遊んでいた。

「よし、またあたしの勝ちだな！」

「ああっ……ヴィータって地味に強いなあ」

ヴィータの操るレッドサイクロンが俊也の操るヨガマスターを投げてKOした。対戦を始めてから俊也は一度もヴィータに勝っていない。

「魔力が急激に持つて行かれた。リニスが起きたのかも」

「お、なら見いくか。困惑してるかもしれないし、説明しねえとな」

ゲームの電源を落とし、部屋を出て行く二人。

俊也より一日ばかり遅い目覚めだが、リニスは確かに目を覚ました。

何よりつらい現実が彼女を待っている。

母と娘（後書き）

俊也世界のプレシアはいい人。超いい人。娘を亡くして狂っていませんから。

レジアス中将もいい人。超いい人。裏で犯罪者となんか繋がっていません。

アリシアの金髪は父親ゆずりと思うので、父親をねつ造してみました。

スクライア出身にしたのはテストアロツサ姓を残すため。

ユーノもなのはとくつつけば高町家に婿養子ですよね？

守護騎士と使い魔（前書き）

デバイスは日本語でしゃべります。

守護騎士と使い魔

目に入ってきたのは感情的な光景だった。裸の女性がベッドで半身を起こし、呆然とした表情で両手を眺めている。

豊かな胸も綺麗な肌も、隠すことなく曝け出し、ただただ静かに絶望している。

リニスは目覚めてから時間をかけずに現状を理解した。さすがに俊也の身に起こった退行は予想できていなかったが。

自分が愛娘に庇われたことを。あの爆発に巻き込まれては無事では済まない事を、正しく理解してしまった。

「……………」

俊也もヴィータも、無言で立ち尽くす。

かける言葉が見つからない。それほどまでにリニスの絶望が二人に伝わってきた。

あまりに虚ろな目、生気を欠いた表情。抜け殻という表現が当てはまるような……………そんな姿。

俊也はリニスの弱い面をほとんど見たことが無い。プレシアが亡くなった時に初めて彼女の涙を見たと言って間違いではない。

だが、今のリニスはプレシアが亡くなった時よりも酷い。

泣きわめいていた方がまだましと思えた。今の彼女は、感情の全てを無くしたかのようで……………。

「見てられない……………」

耐えられず目をそらす。

俊也の知っているリニスは……知的で優しく面倒見がいい、姉のような、母のような強い人。

それが今は見る影もない。

俊也も立ち直ったわけではないが……リニスの受けた心的ショックは俊也の想像の遙か上を行っているらしい。

もう泣くまいと決めたのに、リニスのあまりに弱い姿を見ると涙がこぼれそうになる。

ヴィータはリニスを見た瞬間にまずいと思った。

あの表情はまずい、全てに絶望して生きる気力を失った人間のする表情だ。

長く戦場にいたヴィータは何度もあの表情を見てきた。

夫を失った者、妻を失った者、子を失った者、親を、友人を、恋人を、大切な人を、物を、心の拠り所を失くし……全てに疲れ切った人間のする空っぽな顔。

大抵は生きる屍のような酷い状態になってしまう。

戦乱の世ではそういった者は真つ先に命を落とす。生きる気力が無いのだから、死を拒む力もなく、すんなりと自らの最期を受け入れる。……リニスは既に死人の表情をしていた。

何とかしなければいけない。だが、生きる希望を失った者に希望を持たせるのは難しい。

大抵の人間はここで折れてそれでお終い。それはヴィータにとってもあまり後味のいいものではない。

【マスター……】

「レイハ……！」

沈黙を打ち破ったのは俊也にとっては聞きなじみのある機械音。

「デバイス……治ったのか」

俊也の相棒、インテリジェントデバイス・レイジングハート。自動修復の完了はリニスの目覚めとほぼ同時だったらしい。

【状況が分かりかねます。マスターのお姿、隣の女性、この場所はどこなのか。……リニスの状態は良くありません】

疑問をぶつけるレイハだが、アリシアの話題は出さない。……レイハもまた、アリシアがどうなったのか……正しく理解しているみたいだ。

「詳しくは後で話すよ。この子はヴィータ。俺達が保護してもらっている人の……娘さん？」

「家族なのは確かだが、娘という表現が正しいかは分かりかねるな……あたしの事は今はどうでもいいだろ、今はこの姉ちゃんの方が先決だ」

「レイハ……リニスの様子は？」

【すみません、私も先ほど再起動が完了したばかりですので……私 が起動したときには既にリニスはこの状態でした】

おそらく目が覚めたりニスは人型に変身し、辺りの様子を窺ったのだらう。

そしてある残酷な現実に至った。何度も何度も否定しただらう。俊也もそうしたが、現実是不変変わらない。逃避してもそこにある残酷な現実には何の変化も無い。

アリシアは死んだ。

この事実を揺るがないし覆らない。

「リニス……俺だよ、俊也だ。分かる？ お願いだからこ

つちを向いて……！！」

俊也が語りかけるとリニスは虚ろな目で、だがしっかりと俊也の方を向いた。

「……俊也？ ああ、懐かしい姿です。ふふ、やはり夢なのですかこれは。よかった、悪夢でも覚めない夢は無い……この悪夢も終わりが来る。アリシアが居ないなんて、最上の悪夢です。早く目を覚まさない」と

それは逃避の言葉。

夢だと思いこむ事で心が壊れる事を防いでいるのか……しかし、逃げたところで現実是不変ならない。

「リニス……俺のこの姿はロストロギアのせいだよ」

「……私達は、庇われたのですね」

「うん、そしてこうして生き延びてる」

顔を歪ませ涙を流す。

俊也が生きていたことは嬉しい。子供の姿という予想外の状況だが、生きていただけ十分だと、生きていてくれてよかったと思う。

が、アリシアが居ない。

大事な大事な家族が欠けている。

「あ……なんて事、アリシア……どうして？

どうしてあの子が！？ どうして私は気がつけなかったのです！

なんて不様、何が最強の使い魔ですか！ 主を、大切な娘を守れなかった！ それどころか庇われて生き延びるなんて……私が死ねばよかった。何故こうして生きています？ 俊也、教えて下さいよ……おしえて……」

手で顔を覆い、声を上げて泣く。
その姿にヴィータは顔を歪ませる。

あれはもしかしたら自分の姿かも知れない、と。
主を亡くし、しかもその原因が自分を庇つてとなると……
なるほど、あのような絶望に包まれた姿になるのも納得出来る。

自分を庇ったことが原因ではやてが死んだらヴィータは自分を決して許しはしないだろう。

泣きわめき、絶望にうちひしがれ、先ほどのリニスと同じような
死人の表情を浮かべ、ゆっくりと機能を停止していくに違いない。

リニスの絶望は理解できる。
だが、少し安堵もしていた。

(感情を表に出せるなら、まだ間に合う……!)

親近感を感じた。

同じ主を持つ存在だからか、同情からくる感情なのかは分からない。

しかし、彼女の主は自分を犠牲にしてまで使い魔を生き延びさせた。
本来なら逆だ。そこまで彼女は思われている。そして、彼女の
事を家族と言い土下座までしてみせる友がいる。

恵まれた使い魔だと思う。

最近の事情はよく知らないが、ヴィータの古い記憶では使い魔は
人並みの扱いを受けてはいなかった。道具として扱われ、半場奴隷
のような立場だったと記憶している。

全ての主従がそうであったとは言わないが、互いに信頼を寄せ合
っている事、あまつさえ俊也のように家族と言いついて使い魔のために自
身の体を張る事は希有だった事は確かだ。

それはプログラム体であるヴォルケンリッターも然り。

盲目的に主に従うヴィータ達だが、扱いに不満が無いと言ったら

嘘になる。

道具、兵器として扱われて良い気持ちができるほど壊れてはいない。騎士の本領を発揮できる場が戦場であることに否定はないが、騎士道を重んじてくれる主が何人いたか……両手の指より多くはないだろう。

優しい人が一人もいなかったわけじゃない。歴代の主やその周囲の人間が皆悪人だったわけではない。しかし、良い記憶と悪い記憶、どちらが多いと尋ねられれば後者と答えるだろう。

両の手は血がこびりつき取れはしない。

だが、優しいはやての元に居る限り血を塗り重ねる事はないだろう。

はやてはヴィータ達に希望を与えてくれた。家族と過ごす日常という奇跡。

幸せを噛みしめている。これほどまでに優しい時間をヴォルケンリッターは知らなかった。

この幸せと同じ幸せを感じていたであろうリニス。しかし、彼女の幸せは壊れた。

(他人に思えねえ……どうにかして、助けてやりたい……)
……！)

あそこにいるのはIFの自分だ。

はやてを亡くしたら、今のリニスのようになるか暴走してしまうだろう。

助けてやりたい。ヴィータだけではなく、シグナム、シャマル、ザフィーラも同じ意見だろう。

絶望するにはまだ早い。リニスには思ってくれる友が居る。一人ではない。

「おい、あんた」
「・・・・・・・・」

ヴィータの言葉に返答はない。ただただ手で顔を覆い、嗚咽をもらす。

しかし、ヴィータは諦めず言葉をかけ続ける。

「あたしはヴィータ、お前等を保護してる主の家族だ」

近づき手を握る。

リニスは涙で濡れた顔でヴィータを見る。

綺麗な顔をしている。顔立ちはなんとなくだがはやてに似ていると感じた。はやてが大人の女性に成長したらリニスのようになるかもしれない。ますます他人に思えない。是が非でも助けたい。助けれる命があるのなら手を差し伸べる。奪う事ばかりだった人生だ。たまには救う事があってもいい。

「あたしはヴォルケンリッターが鉄槌の騎士、闇の書の守護騎士プログラム。人間じゃねえし厳密に言つと生命体ですら無いのかもしれない」

その言葉に驚く二人。

俊也は何かしらの魔導生命体とは思っていたが、プログラムとは予想できなかった。

「あたしには主がいる。こんな人間でもないあたし達にとても優しい。あたしはそんな主が好きだ。だからあんたが主を亡くしたその心の痛み、理解できるんだ。もし主が死んだと思うとぞつとすんだけど、主はあんたを守つたんだろ？ だったら死んだ方がよかつたなんて言つもんじゃねえよ。主の気持ちを無駄にしちゃいけない。」

「……なあ、あたしはあんたが他人に思えないんだ、だから生きていて欲しいと思う。初対面で大層なこと言っただけ、どうか死んだ方がよかったなんて言わないでくれ」

ヴィータの言葉を受け、更に涙を流すリニス。

「リニス……死んじゃ嫌だよ？ 俺を一人にしないで……」
「うっ……しゅん……や……うっ……あ」

俊也とヴィータを抱き寄せ、ぎゅっと力を込める。

歯を食いしばり、嗚咽を漏らさないようしながら涙を流し続けるリニス。

ヴィータは安堵した。

この様子なら時間はかかるだろうけど立ち直れる。救えたのだ、ヴィータの言葉がリニスを救った。

「アリシア……私の可愛い娘……ごめん、ごめん、ごめんなさい。ごめんなさい……」

きつと一生後悔し続けるだろう。

しかし、彼女はきつと命を無駄にはしない。死ぬなんて言葉は口に出さないだろう。

アリシアの分まで生きなければいけない。

リニスは既に死人の顔をしていなかった。

今後

「契約内容はずっと俺のそばにいる事。姿を消す事は許さないし、死ぬなんてもつてのほか」

「契約内容了解しました。決してあなたのそばを離れません。俊也……マスター、私達は永遠に一緒です」

「リリカル・マジカル 契約完了」

何とか泣きやみ、生きる気力を取り戻したりニス。

シヤマルの服を借りたりニスと俊也は手をつなぎ、契約を結びなおした。

ミッド式の魔法陣が展開し、俊也の魔力がリニスに流れ込む。仮契約の時も結構な量が持つて行かれたが、本契約になると更に多くの魔力が流れていく。

「確かに魔力のラインを確認しました。さすがに上質な魔力です。プレシアにひけをとりません」

「……さすがリーゼ姉妹と一緒に最強に数えられるだけあるね。結構しんどい……アリシアはこんなに魔力を持つていかれてたのか」
「アリシアは俊也とプレシアに比べれば魔力量は少なかつたですから……」

魔導士として俊也やプレシアが規格外なだけで、アリシアは一般的な魔導士レベルの魔力は持っている。

規格外に生み出されたものもまた規格外であっただけの事。強大な力を持つが故存在の維持に大きな魔力を必要とする。一般的な魔導士が維持するにはかなりしんどい。アリシアは普段から結構無茶をしていた事になる。

「無事に終わったみたいだな。ほら、温かいミルクだ。飲んだら落ち着くだろ」

「ありがとうございます」

「ありがとうヴィータ」

ヴィータからホットミルクを受け取る。

ヴィータはかなり好意的だ。ホットミルクを渡すなどという小さな気配りにも助けられている。

実際、彼女がいなければリニスの心は死んでいたままだったかもしれない。この小さな女の子は命の恩人だ。

「中々いい光景を見せてもらった。私達の立場からしてみると俊也とリニスの関係はとても好ましいな」

「だな。使い魔に優しい主人は珍しかったからな」

この部屋にはヴィータの他にシグナムがいる。

道場での指導を終え、帰宅した時管は四時くらい。ちなみに昼食ははやて特製のお弁当を頂いた。

泣くりニスにつられてヴィータも泣きだしてしまい、ヴィータが泣きだした事で我慢の限界に達した俊也も泣いてしまった。

結果、ベッドの上に抱き合って泣く三人がいるという(そのうち一人は全裸)カオスな部屋に踏み込んだシグナムはしばらく固まった。

「さて、まだ本調子でないところ悪いが丁度いい機会だ、今後の事を話し合おう」

シグナムとリニスは一通り自己紹介も済ませている。ちなみにリニスにシャルルの服を貸したのはシグナムだ。

簡単な自己紹介を済ませた後、シグナムははやてにリニスが起き

た事を連絡し、ヴィータはホットミルクを作りに行き今に至る。

【まずは現状の確認です。ここは海鳴市、私達から見て八年前の世界】

「新聞で確認したし、テレビも見た。信じられないけど事実だよ」「私も確認しました。にわかには信じられませんけど……」

レイハが進行役を務め俊也達とヴォルケンリッターの話し合いが始まった。

俊也とリニスがベッドに腰掛け、対面に椅子を持ち込んだシグナムとヴィータがいる。その間に待機状態のレイハがふよふよと浮かんでいる形で話し合いは進む。

【当面の問題は……】

「まず第一に衣食住だね。ある意味次元漂流者である俺とリニスはどこも頼れない」

「そしてその問題は主はやてがお前たちを保護すると明言している。私達は悪意のないお前たちをどうしようとは思わない」

「つまり衣食住の問題は解決してるわけだな」

まず問題一つ問題が解決した。小学生の少女の紐だが背に腹は代えられない。リニスはなんとかしてバイトはできるだろうからまたおいおい考える事になるだろう。

「その前に一ついいか？ 私はヴィータ達と違いまだお前たちの事をよく知らない。簡単にだが説明してくれないか？」

「ああシグナムさんには説明する機会がなかったですね」

そう言い次の問題に移る前に自身の事を簡単に説明することにした。

今回はリニスもレイハも目覚めているのより詳しく説明できるだろう。

「まずは……レイハ」

【はい、表示します】

レイハが表示させたのはミッドでの身分証や資格の類。それなりの数シグナムとヴィータの前に映し出した。

「管理局のID……うん、やっぱりどこか女っぽいけど男だな。今じゃどう見ても女なんだけど」

ヴィータはIDの顔写真を見て感想を言う。

IDの写真は十七歳の時のもの。童顔で確かに女の子っぽい顔立ちだがちゃんと少年に見える。現在の九歳の顔は……残念だが女の子にしか見えない。

「やはり優秀なのだ。見慣れないものもいくつがあるが……」

管理局のID、執務官、A級デバイスマスター、メカニックマスター（生体義肢）、医務官（生体義肢）、小隊指揮、無限書庫司書。

多くの資格を有している俊也。シグナムが優秀と言ったが、その評価は間違いではない。俊也は多才だ。プレシアクラスと比べればどうしても劣ってしまうが、十分秀才と言って言いレベルだ。現在は執務官として出向しているため前線での戦闘が主になるが、本来俊也は技術官よりの局員だ。執務官の資格を有しているが、出向するまでは執務官の役職にはついておらず前線から離れてそれなりに年月も経っていた。それでも修練はかささず行っていたので執務

官の役職についても何も支障はなかったが。総合Sランクは伊達じゃない。一般的な武装隊員と比べると頭一つ飛び出た強さを有している。

技術官でありながら一般武装隊を凌駕する戦闘力を持つ俊也。

『さすが『雷の女帝』の弟子、『歩く理不尽』の弟弟子だけのことはある。どこかおかしい』

などと武装隊員によく言われたものだ。

管理外世界出身でありながら戦闘では一般武装員を凌駕し魔導士ランクはS。技術面では最高レベルの頭脳を持つプレシアとその弟子であるオリヴィアに技術を叩き込まれ、年少ながらA級デバイスマスターの資格を有し、局全体でもかなり希少な生体義肢を扱える資格も取った。

戦闘とメカニクスの技術は抜きんでており、それに加えて容姿もよかった。管理局が広告看板にしようとするのも頷ける。実際雑誌の表紙やインタビューなどの効果は大きく、本人達は知らない事実だがアイドルとしてプロデュースするという話が実際にあった。

「生体義肢っていうのは何なんだ？ 聞いた事ないけど」

「生体義肢っていうのは簡単にいえばすごく高レベルな義手の事だよ。機械で基礎フレーム……手の骨格なんかを作るんだ」

「へえ……最近はその事もできるのか」

「人工骨格に人工筋肉や血管などを用いて本物と変わらないような高度な義肢を生体義肢っていうんだ。神経も繋げてるから痛覚もあるし怪我をすれば血だって出る。デザイアっていう博士が完成させた技術だよ」

あらかた説明を終え、本題に戻る。

まだまだ問題は山積みだ。

【では、今後の私達について決まったことを纏めます】

話し合いによって決まった事。

まず第一に八神家に敵対しない事、はやてを裏切らない事。

管理局に連絡はしない。また、存在を知られないように行動する事。

この時代の俊也達、知り合いと出会わないように細心の注意を払う事。

「今あげた事は絶対条件ですね。私も俊也もあなた方を裏切る事は無いと誓います」

「結構辛いけど、はやて達と過ごすなら寂しくはないよ」

俊也は既にこの家族に不信感はない。むしろ信頼している。

優しい家主の少女にその少女を心から慕う家族。絶望に覆われていた心が晴れるほどにここは温かい。

【そして目的……】

「過去に来たのなら未来は変えられる」

「私達がここにいる。未来を知る私達がここにいる。……この時代の私達を、私達と同じような悲劇を味あわせない……！」

アリシアを死なせない。

アリサを死なせない。

どうにかして介入して最良の結末に導く。悲劇を見るのは自分たちだけで十分だ。悲しい思いをするのは自分たちだけでいい。

「そして、研究を完成させる。ここにはこの時代から見て八年進んだ研究データがある。何とかして完成させたい……」

「その研究とやらは何なんだ？」

研究データ。あと一歩という所でプレシアが倒れたために事実上凍結となったプロジェクトのデータだ。

プロジェクトが凍結されてもオリヴィアやリニス、アリシアと俊也が纏めていたためプレシアが倒れた時よりも完成には近付いている。その研究データがレイハの中に記録されている。

「この研究データはプレシア母さんの悲願。魔導士不足を解決することが目的で発足されたんだ。リンカーコアを持たない人でも魔法が使えるようにする事が最終目的」

「デバイス自体に疑似リンカーコアを取り付けて魔力精製させる事が一番手っ取り早いです。色々案はあるのですが…… 実用までには至っていません。私と俊也は技術的に八年先にいます。怪我の功名といえはいいのか…… たっぷりと時間ができたので、少しでも完成に近づけるように努力します」

プレシアの悲願。プレシアをバックアップし全面協力してくれたレジアス中将の悲願。

研究に関わったりリニス、アリシア、オリヴィア、シャーリー、マリー、俊也の悲願。

「…… 実用化されれば素晴らしい成果を得られるだろうな。争いごとや犯罪も減るだろう」

シグナムの言う通り万年の人手不足が解決すれば犯罪は一気に減るだろう。

救助隊などにも多くの人員が割かれ、救われる命もずっと増えるはず。テロによって夫を失ったプレシアの思いが込められたプロジェクト。あと一歩、ほんの少しで完成する。

理論はほぼ完ぺきだ。疑似リンカーコアになり得る物質が見つければすぐに実用化できる。

「戦いしか能がないあたしが言うのもアレだけど、争いが減るのはいいことだ。……血なまぐさいのは正直もうこりこりだよ。そうだ、そのプロジェクトの名前は何ていうんだ？」

「発案者、プレシア母さんの思いがこもったプロジェクト名だよ」

傷つき涙を流す人が減るように、自分のように大切な人を失くす人が少しでも減るように。

理不尽な運命から一人でも多くの人を救えるように、理不尽な運命に嘆く事が無いように。

その悲しい運命を変えてしまえるように　　そっとう思いを込めてつけられた名前。

「　　プロジェクトFATEっていうんだ」

今後（後書き）

アリサは俊也世界では既に亡くなっています。
シャリオとマリエルの年齢設定が異なります。シャリオは俊也の四
つ上でマリエルが二つ下です。

デザイナー博士とはもちろんあの人の事です。

幸せ

「リニス〜サラダの盛りつけお願いな」

「わかりました。任せて下さい、はやて」

俊也とリニスが八神家に保護されてから一月ほど経つ。

十月も終わりに近づき、最近は段々と肌寒くなってきた。

リニスとはやての顔合わせは問題なく終わった。ザフィーラの件があつたので人の姿にそれほど驚かなく、終始笑顔で自己紹介などを済ませた。

それぞれの第一印象は。

リニス曰くはやては「しっかりした子供」

はやて曰くリニスは「えらいべっぴんさん。あといいおっぱい」

後日聞いたらそのような感想が返ってきた。

その頃はもうほとんど家族の一員のようなものだったので、はやても遠慮はしていない。

家族に遠慮するのは可笑しいので、はやての態度は嬉しいのだが、胸を揉みしだくのはやめてほしいとリニスは言っていた。

別に嫌なわけではないが恥ずかしいとの事。

リニスはちよつとした畏怖の対象だったので、こつしたスキンシップをとってくる者はあまりいなく免疫がないらしい。

はやての生い立ち等を聞いたときは眉間に皺を寄せたりリニスだが、今のところ何の問題もなく仲良くやっていけている。

はやては基本家にいる。行動範囲は家に病院に図書館、近所のスーパーとあまり遠出はしない。はやてが外出する時は家族の誰かが付き添うので、この時代の俊也が居そうな場所を避けるようにお願

いしてある。今のところこの時代の俊也に鉢合わせはしていない。俊也も子供の時車椅子の女の子と合った記憶はないので、このまま行けば案外大丈夫な気がする。

問題も何もなく、俊也とリニスは久々にゆっくりとした時間を過ごすことができている。

戦闘も無く、デスクワークも無い。毎日はやたと遊び、勉強を教え、趣味も兼ねたデバイスの研究をする。ここ数年でこんなに心落ち着いた日々は無いというほど、優しい時間を過ごしている。

そして時々ふと思うのだ。管理局員になって自分は何がしたかったのだろうか、と。

天才だと言われた。ユーノに、クロノに、クライド提督に。

魔法との出会いは偶然。たまたまその力があり、助けを求めるユーノに応える事ができた。

当時九歳にして魔力ランクAAA、魔導士ランク推定空戦AA。入局しそれなりの事情が分かる今になって考えると自分がいかに異常だったのかわかる。

囑託から正式に局入りして武装隊に配属された時は空戦AAA+。十歳にしてエースクラスの力を持つ……。それも管理外世界の人間が、だ。

珍しさもあつただろう、周りから可愛がられて……。実際に自分の力が役に立つことが嬉しかった。

思えばここからか、子供っばさが抜け出したのは……。時空管理局所属、いわば軍属。ミッドでは低年齢での就職は珍しくないが、日本では考えられない。自覚は無かったが、どんな年相応の姿からかけ離れていったと思う。

自分の力が人助けになる事が嬉しかった。

御神の剣の才能はなかった。それがたまらなく悔しくて、悲しくて……。兄と姉とは別の力が、才能があることがわかった時

はそれはそれは喜んだ。

学校が終われば魔法の練習。休みの日にはミッドへ。要請がかかれば授業中でもミッドへと跳んだ。

みんなと接する時間はどんどん減っていった。今になって振り返ると母は寂しそうな顔をしていたように思える。

管理局に入って何がしたかったのか。今ではプロジェクトの完成という確固たる目的があるが、オリヴィア姫殿下に引き抜かれるまでは只単に周りに流されていただけのようで……いや、実際そうだったのだろう。

今までの人生を否定する気はないが……今のこのんびりとした時間を過ごすかどうかどうしても思ってしまう。

管理局に入らずに過ごすEIFの自分。

優しい母、兄、姉と大好きな友人達と過ごす日常。

その場合はどんな将来を目指していただろう？ 翠屋の二代目だろうか？ 姉が嫁に出してしまえば必然的に継ぐことになるだろう……それも悪くない。

「俊也君、どないしたん難しい顔して」

「ああはやて……ちょっと考え事をね」

テーブルに料理が並べられていく。

メインははやて特性のハンバーグ。俊也の隣ではウィータが目を輝かせている。

「将来……はやては将来の夢とかある？」

「ん〜夢かあ」

はやても席に着く。料理はシャマルとリニスが分担して運んでくれている。

「せやね、お料理は好きやし得意やからちよつとしたレストランや定食屋みたいな事できたら楽しいやろうなあ」

「はやてに料理は絶品だから繁盛間違いなしだね」

「あはは、あんま褒めんでよ照れるわあ。でも、夢は夢や。こんな足やしまともな職につくのはあきらめとるしな。どしたん急に？」

はやての少々自虐の入った返答に冷や汗をかきながらも言う。

「いや、俺の実家は喫茶店なんだけど………管理局に入局せずにはいたら実家を継いでいたのかわって」

「喫茶店か、初耳や。だからお菓子の類を作るのが上手かったんやね」

小さい頃からある程度母から教えて貰っていたのでちよつとした菓子類を作るのは得意だ。

クッキーやマフィン、頑張ればケーキだって作れる。以前みんなに振る舞ったチョコレートのマフィンはとても好評だった。

「うん、ええな喫茶店。せやね………お昼は普通にお菓子や軽食、夜はファミレスが出すような料理を出すような店はどないやる？ 夜に限ってはお酒も出したりしてな」

「お、なんか良い感じのアイデアだね」

「せやる？ 昼は俊也君にまかせて夜は私の出番ってわけや！」

「二人で喫茶店やってる設定になっちゃってるよ」

「ええやん、可愛い主人に美人の奥さんって評判になるで」

「はは、それ俺と結婚しちゃってるよ」

「せやね、あはははは！」

何気ない話で盛り上がる。

はやてと切り盛りする喫茶店……きつと楽しいだろう。
お菓子作りと紅茶には多少心得がある。お客様に提供できるレベルだと自負している。まだまだ母には遠く及ばない腕前だが。

はやては料理の才能がある。本当に美味しくどこかほっとする味はお客様も満足するレベルだ。実際に下手な飲食店で食べるよりずっと美味しい。教えればお菓子も直ぐに美味しいものを作れるだろうし、紅茶やコーヒーも同様だろう。九歳にしてはずば抜けた料理スキルだ。実際に経営してみたら上手くいくのではないだろうか？

「……………結婚かあ」

急に真顔になりぼつりと呟く。その真剣な表情にドキリとした。

「なあ俊也君、結婚は女の幸せやいうけどほんまやるか？」

いつになく真剣な表情。無邪気な子供の表情も、女性陣の胸を揉みしだく時の邪な表情もしていない。初めて見る真剣だけどこか寂しげな表情。

「私は足にハンデもつとるし、学校にも行けてへん。友達かって一人もおらへんかった。いつつも独りぼっち。病院に行って、図書館で本を借りて一人で読んで、お腹が空いたら自分でご飯を作って一人で頂きますとご馳走様。ずっとそんな生活やった」

「……………」

はやての独白を静かに聞く。口は挟めない。

「正直な、寂しかった。一人のご飯は味気ないし、一人でゲームをするのも飽きた。本を読むのは好きやけど、やっぱり一人は寂しかった。うん、私はね、ずっと寂しかったんや。」

せやから、今はめっちゃ幸せなんよ。家族がいる、友達もできた。家に帰ったら『おかえり』って声が聞こえる。私が作ったご飯と一緒に食べてくれる人がいる。一緒にゲームをする人がいる。みんな私に優しい。……私は今までの人生の中で一番の幸せを噛みしめとる」

独白は続く。

「正直言うとな、結婚できるとは思ってたない。石田先生は頑張ってくれとるけど足は治りそうもないし……こんなハンデ抱えとる女貰ってくれる人なんておらへんやろうしな。

でもな、結婚なんかできなくていいんや。今の時間がずっと続けばそれで満足や。」

大切な家族と、シグナム、シヤマル、ヴィータ、ザフィーラと一緒に過ごすこの家には、今は大切な友達……。俊也君にリニスがある。私一人だけやったこの家に今は七人もおるんや。もう毎日楽しくて楽しくてしゃあない。女の幸せを一生知ることが無くても私は満足や！」

そう言い切ると寂しそうな表情とは打って変わり幸せそうに顔を綻ばせる。

「せやからな、ずっと友達でおってな、俊也君……」

俊也の手をそっと手を握り微笑むはやて。

対する俊也は絶句していた。

そしてはやての温もりをもっと感じられるようにぎゅっと手を握り替えした。

そしてそれははやての話を聞いていたヴィータも同様。

ヴィータははやての足を治すことの出来ない自分の不甲斐なさに奥歯が砕けるほどきつく歯を噛みしめた。

(大人びているとは思ってたけど、これは早熟とかいうレベルじゃない。達観しすぎている)

子供らしくなかった。

いや、子供だったら環境に耐えられなかったのか。急にでも大人にならなければ寂しさに耐えられなかったのか……。

ならば原因は大人にある。はやてが子供らしさを失ったのはこのありえない環境を作り出し放置した大人のせいだ。

(保護者……確か、『グレアムおじさん』)

送金は確認した。通帳には毎月大金が振り込まれている。

しかし、金は送っていてもはやてに一人暮らしをさせるのはありえない。はやてが一人だったのは何かしら意味があったはずなのだ。

(グレアム……ただの偶然?)

俊也の頭の中には管理局でお世話になった上官の顔が思い浮かぶ。

「俊也君……あのな、最初に握ったのは私なんやけど……ちょっとはずかしいわ」

「あ……ごめん」

あわてて手を離す。

照れているのか顔を紅めるはやては謙遜なしに可愛い。思わず見惚れてしまつくらいに。

「まあいざという時には俊也君に貰ってもらうから心配ないかな？」
「……うん、はやてだったら俺も大歓迎だよ」

「おっ？ これはアレやで幼馴染ルートでよくある『子供の頃に将来を誓い合った』っていうフラグや！」

「……そんなの良く知ってるね」

「ゲームは色々手え出したからなあ。RPGにマスゲー、育成、パズル、サウンドノベル……もちろんギャルゲーもや！」

声を上げて笑うはやてを見て苦笑する。

今日ははやてのまた違った一面を見る事ができた。

(寂しがり屋か。案外、似たもの同士なのかもしれない……)

しかし俊也とはやてでは環境が違う。

俊也は寂しいと訴えかけることができる家族がいた。はやてには訴えかける家族すらいなかった。寂しさの度合いでははやての方がずっと大きい。

(だから、せめてこれからは……)

これからははやてが寂しい思いをしないように、そばにいたいと、そう思った。

寂しげな表情は似合わない。

向日葵のような笑顔こそあの愛らしい少女にはよく似合う。

もっとはやての笑顔が見たい。

この感情が何なのかは良く分からない。

だけど、これだけは確実だ。

高町俊也は八神はやての笑顔が大好きなのだ。

幸せ（後書き）

ヒロインはなせです。

番外 少し未来の話

最初の出会い？　せやな、正直相当インパクトのある出会いかたやたったな。

その時俊君は気絶しとったから、私が一方的に知つとったっていうのが正確やな。

一緒にお風呂に入つとったヴィータが険しい顔したかと思つたらすぐにお風呂上がるう言つたんや。

私は結構長湯する方やから、正直まだ入つときたかつたんやけど、しゃあないから上がったんよ。そしてリビングまで行くとビックリや！　ザフィーラが猫啜えとるのは百歩譲つてええとつして問題はシグナムや。血まみれの子供を抱えとつたんやから驚くなと言う方が無理や。

正直めっちゃてんぱつたなあ。救急車？　警察？　殺人事件なんか！？　黒の組織の作業なんか！？　とパニックってたわ。後から俊君がコナ　君状態やつたとわかつて心の中で吹き出したのも懐かしいわ。

え？　コナ　君つて何かつて？　そうか、ミッドでは知られてないし知つてないのは当たり前やね。ちよつと口すべらしてもうたわ、コナ君の事は忘れてや。

話を戻すで？　俊君は血まみれやつたけど怪我はして無くてな、とりあえず安心しろ言われてどうにか落ち着きを取り戻したんや。

私らがリビングに集まつとるとタイミング良くシャルが買い物から帰つてきてな、俊君とザフィーラが啜えてた猫……まありニスの事なんやけど、二人を見て貰う事にした。知つての通りシャルは治癒のエキスパートやからな。当時の私は魔法の知識もなかったし、ただ心配して眺める事しかできなかった。

ん？ 魔法の知識が無い事が不思議か？ 前になのはちゃんが言
つてたと思うけどやな、私もなのはちゃんも魔法に出会ったのは偶
然やからな。出身は知っての通り地球やし。流石に子供の頃からラ
ンクSSなんて馬鹿げた事はないよ。当時の私は只の九歳の女の子
やったからな。

シャマルが言うのは気絶しているだけらしく、一安心した私は俊
君をベッドに寝かすことにした。小さい頃住んでた家は無駄に広く
てな、使っていない客間もあつたから丁度よかつた。

ベッドに寝かしてまず体を拭いてあげよう思つてな、なんせ血ま
みれや。気持ち悪いやろうしちよつと血が怖かつたしな。

シャマルが洗面器にお湯を入れて持つてきて……体を拭
こうと身に纏つていた布きれを取つたときや、私に衝撃が走つたの
は。

ここで当時の俊君の容姿を説明しとくね。

そりやあもうなのはちゃんそっくりでな、相当可愛らしい顔しと
つた。ショートカットなのはちゃんを想像してみて？ そんで、
なのはちゃんは垂れ目やけど俊君はちよつと釣り目気味で……
・まあそんな容姿や、女の子にしか見えへんかつた。

身長は私より小さくて、手もちっちゃくて……なんて言
えばいいのかな？ 保護欲というか……いや、今考えると
母性本能か？ ともなく、こう、心を驚づかみされるような子供や
つた。将来は間違いなく美人さんになると確信できる子やつた。男
の子なんやけどね。

ん？ そうやね、今でも中性的で綺麗な顔立ちしとるもんね、俊
君は。本人はちよつと気にしとるみたいやけど。

そんでや、当然私も女の子やと思つた。それも普通の女の子やな
い美少女や。

子供の頃の私は足が不自由でな、交友関係はほぼ無いも同然で、

友達もおらんかったし、人と喋ることもあんまなかった。

あ、そんな顔せんでええって、昔の話や、気にしてへんよ。

そんな私の前に現れた美少女、正直ドキドキしたわ。

起きたら何話そうかとか、もしかしたら友達になつてくれるかなとか思いながらシヤマルの作業を見守ってた。

まず上半身が露わになった。当然やけど、胸なんて無いな。まあその頃は私も無かったけどな。せやから何も疑いも持たなかった。シヤマルは丁寧に体を拭いて、次に下半身の布きれを取った時にそれが目に飛び込んできた。

思わず叫んだわ、いやあほんまあん時はビックリしたんやで？

ついてたんや。なんや、何がかつて？

さて、ここで問題です。女性の象徴とはなんでしょう？

恥ずかしがらんで言ってみいや・・・はい、スバル正解。

女性の象徴とはずばり『おっぱい』や。む、なんや赤い顔して。はあ、みんな初心やなあ可愛らしい。

それなら男性の象徴とは何でしょう？

ふふ・・・押し黙るんやないよ赤い顔して。エリオの股にぶらさがつとるもんや。

なんや、みんなほんまに初心なんやな。この程度で恥ずかしがつとつたらこの先身が持たへんよ？ん？私は恥ずかしくないかって？私は乙女やなくて大人の女やからな。恥ずかしくもなんともないよ。

ああまた話が脱線してもうた。

今は恥ずかしくも何ともないけど、九歳の私にはなかなか刺激が強くてな、相当混乱したわ。

女の子と思っていたら男の子やった、そんでもって男のモノを初めて見た。そりゃあもうてんぱったよ。

考えてみいや？なのはちゃんにおんちんがくつついとるや。

もうわけがわからなかったね、ほんま。

それで男の子やったって気づいて慌てて目をそらしたんや。
中々衝撃的な出会いやろ？ 忘れられへんわ。もっとも、この時
点で俊君はまだ目を覚ましてないんやけどな。

俊君が目覚めたのはそれから四時間くらい経ってからやった
な。私はその間心配で離れることができませんと部屋におった。
目え覚ましてからちよつとした自己紹介してすぐに寝たけどな。

それで、次の日や。何故か早く目が覚めた私は俊君の様子を見に
部屋に行ったんよ。昨日と違って安らかな寝顔しとった。まさに天
使のような顔やった。ドキドキしっぱなしやったよ。

ずっと部屋におつてもしやあないし、私達の朝ご飯とは別に俊君
用に消化のいいもん作つてな、朝ご飯を頂いてからまた俊君の部屋
行つて寝顔眺めてた。

俊君が目え覚まして、私のご飯を美味しい言つて食べてくれて、
色々話して友達になった。今でも鮮明に思い出せる、心から嬉しか
った。

ん？ なんやスバルにティアナにキャロ、その顔は？

なんや、九歳の私が恋する少女みたいやつて？ ふふ、あんな、
今から考えると多分一目惚れやね。自分の中の感情が上手く理解で
きてなかっただけであれは初恋や。

すずかちゃんと友達になった時とはまた違った嬉しさやったもん
な。

初めて友達ができた私はどうも距離感をつかみかねててなあ、何
故かは知らんけど一緒にお風呂に入ろつて誘つてな、実際に一緒
に入ったんよ。その時はシャマルも一緒やったけどな。

え？ 私が大胆やつて？ せやね、今思つとめっちゃ行動的やつ
たわ。さつきも言っただけど距離感がわからなかったんや。でも、お

互い九歳やったし問題ないやろ？ ほら、スーパー銭湯でエリオも女湯入ったん。

こら、顔を赤らめるんやないよエリオ。思い出しとるんか？

まあええわ、俊君も言っとったけど役得や役得。

俊君もリニス、シグナム、シヤマル、ヴィータにフェイトちゃん、アルフ、忍さん、すずかちゃんにアリサちゃんと随分役得しとるんやから。

あ、当然全部子供の時の話やからな。

そして、お風呂でいわゆる裸の付き合いをしてな、俊君の事何も知らんかったから色々教えてもらったんよ。

今でも覚えとるし、忘れもせん。

好きな食べ物はモンブランと丸ごとバナナ。基本甘いものが好き。苦手なものは義理のお姉さんの妹さん。苦手なだけで決して嫌いではない。

趣味は機械いじりで、得意な魔法は圧縮、縮小、変身。

二つ名は白い魔獣にカミカゼ。

好きな女の子のタイプは家庭的な人。

ちゃっかり好きな女の子のタイプまで聞いてったなあ。

ん？ 二つ名が気になるか？ せやね、俊君今はバリバリの技術者やもんね。フォワード陣は俊君が戦つとるとこ見たことないか？

今は訳あつて総合Aやけど、俊君の全盛期は総合Sや。なんたつてあのなのはちゃんの家族やで？ 普通なわけあるかいな。今のフォワード陣が戦つたら瞬殺されてまうよ。

俊君の戦い方はすごいで。なのはちゃんみたいなパワーでのごり押し、殲滅と違うからな。一回模擬戦でも頼んでみたらいい勉強になると思つて。

ん？ どしたんキヤロ、眠いんか？ ああいつの間にか結構な時

間になつとるな。

よっしゃ、今日はこれでお開きとしよか。フォワードは朝の訓練あるやろ？ しつかりと体休めとかんとね。

じゃあお休みや。紅茶おいしかったで、おおきにな。

番外 少し未来の話（後書き）

時期はstrickers、海鳴出張からティアナがOHANASH
Iされるまでの間。

談話室ではやてがフォワード陣に俊也との出会いを話しているとい
うシチュエーションです。

はやての俊也の呼び方は仕様です。

このはやては仕事以外でも積極的に新人達と話す機会を設けて原作
より親密な関係になっている設定です。

俊也の容姿は目つきが鋭くない星光の殲滅者を想像して頂ければ大
体合っています。

家族 2

「なあはやて聞いてくれよ！」

時刻は既に夕刻、はやてとりニスが夕食の準備を開始したところにヴィータが帰宅した。

妙にテンションが高く、興奮した様子で顔も生き生きとしている。リビングでノートに研究を纏めていた俊也とソファーに座ってレヴァンテインの手入れをしていたシグナムは作業を止め、何事かと顔を見合わせる。

「おかえりヴィータ。えらい嬉しそうやなどないしたん？」

「ただいまはやて。今日じいちゃん達とゲートボールの大会があったんだけど」

そこで話を切り、彼女のお気に入りであるのろいうさぎのポシェットから何かを取り出す。

「見てくれ！ メダルだ！ あたし優勝したんだぜ！」

誇らしげにはやてにメダルを見せる。相当手作り感を感じるものだったが、けっこうしっかりとした作りだった。そのメダルを宝物のように扱い、台所に立つはやてとりニスに自慢するように見せる。普段は無愛想なヴィータも、今は完全にはしゃいでいる子供だ。ここまで興奮した様子を見るのは俊也がはやての世話になってから初めてだった。

「おお！ すごいやんヴィータ！ 優勝なんてそうそうできるもんやないで！」

「まだゲートボールを初めて日が浅いのに……きっとヴィータには才能があるんですね」

料理の手を一端止めて、ヴィータを祝福する二人。

どこからどうみても家族のそれだ。リニスもすっかり八神家の一員となっている。

「よっしゃ、今日はちょっとしたお祝いやな。リニス、メニューチェンジや」

「了解です。ピーマンの肉詰めからハンバーグに」

「それに目玉焼きものせるで。花丸ハンバーグや！」

「おおっ！ はやて、リニス大好きだ！」

一瞬にして騒がしくなる台所。

喧噪の方を向きシグナムは頬を綻ばせた。

「嬉しそうな顔をしてるね」

「そうか？ いや、そうなのだろうな。あれがあんなに年相応の姿を見せるのでな」

「そっか、優しいねシグナムは」

「ん……そうでもないさ」

俊也は家族に敬称をつかわない。故に、シグナムもシャマルもザフィーラも呼び捨てだ。

すでに八神家と俊也は他人ではない。同じ屋根の下で暮らす家族だ。

保護されてからもうすぐで二ヶ月。そんなに時間をかけずに家族と呼べる関係を築き上げる事ができた。

「ヴィータには笑顔が似合うね」

「そうだな。普段はむすつとしていた奴だが笑つと中々に可憐だ」
「やっぱり妹は可愛い？」

俊也の質問に一呼吸置き。

「ああ、可愛いな。妹……と呼べる存在であるかは分からないが、主はやて曰くあれは『我が家の末っ子』らしいからな。幼い子供が笑っていると自然と暖かい気持ちになる。……子供扱いすると怒るがな」

そう答えるシグナム。

その答えに満足し、ノートを片付け始める俊也。

「まあ末っ子といってもお前が来るまでの話だ。今はお前が『我が家の末っ子』だからな」

「ぐっ……毎回同じネタでいじらないでよ」

にやりと笑うシグナムに苦笑する俊也。

実際に俊也の扱いは末っ子だ。はやてからは完全に弟分として見られている。

しかし、はやて以外からも弟分として見られているのはいかなものか？ シグナムやシャマル、ザフィーラに弟分として見られるのはまだ納得できる。俊也が退行していなくても外見年齢は三人の方が上だ、文句の言いようもない。

しかし、ヴィータからも弟として見られているのは何故だ？ いや、そこは完全に俊也に非があるのだが。

簡単に言つと、九歳の俊也の身長よりヴィータの身長の方が高かったのだ。

同級生と比べても発育が遅く小柄だった。更に母親似の顔でかなりの童顔なので小学一年生に間違われる事など頻繁にあった。

自分より小さい俊也に保護欲が沸いたらしいヴィータは何かと俊也の世話を焼きたがった。

末っ子扱いに不満があったらしいヴィータは自分よりも小さい存在が現れた事が相当嬉しかったみたいだ。今までの不満をぶるつけるように『姉』として振る舞った。

元々俊也は末っ子だ。世話を焼くより焼かれる方が馴れている。そうした俊也の目から見てもかいがいしく世話を焼くヴィータは中々様になっていた。

こうした二人のやりとりを他の家族は生暖かい目で見守っている。それがここ最近の八神家の日常風景だ。

「ご飯は私とはやてに任せて下さい。疲れたでしょう？ お風呂が沸いてますよ」

「先に入ってくるとええ。上がる頃にはハンバーグも出来上がってるよ」

「そうか？ なら先に入ってしまうか……。俊也と一緒に入ろうぜ」

上機嫌なまま俊也を風呂に誘うヴィータ。

「好かれているな」

「嫌われるよりは全然いいよ。しかし、これでも中身は十七歳なんだけどな」

「今更だ。私だって十七歳の男の扱いはできないさ。見た目はヴィータより幼いんだ。いちいち気にしてられん。そうでなければ一緒に入浴などできないからな」

シグナムとの混浴も何度か経験している。

無駄な肉が無く引き締まった健康的な体に他者を圧倒し、はやて

に『至高』と言わしめる大きな胸部を持つシグナム。

例のごとく微塵も興奮できなかったが……。

最初は俊也と入浴するのに抵抗を見せたシグナムだが、俊也が本当に九歳の子供と変わらないと分かると抵抗も無くなったようだ。バスタオルを巻かずその圧倒的な肉体を曝け出しても俊也相手なら何も気にしないようになった。

「丁度いいですからシグナムも一緒に入ってはとうですか？ 小さな子二人だけでは心配ですし」

「そうだな……うん、私も先にお風呂を頂くとしようか」

「あたしは子供じゃねえよ！」

「リニスも俺を子供扱いして……」

ふてくされるヴィータと俊也の手を引いてシグナムは脱衣所へと向かう。

「それでは主はやて、お先に」

「うん、ゆっくりつかって温まるんやで」

脱衣所へと向かう三人を見送ったはやてとリニスは中断していた食事の準備を再開した。

「よっしゃ、ちょっとばかり気合い入れて作るか」

「ほったが落ちるようなものを作りましょうね」

「どう？ かゆいところは無い？」

「おう、無いぞ。いい感じだ。気持ちぞ」

ヴィータの髪を洗っているのは俊也だ。

手慣れた手つきで丁寧に優しく洗っていく。

のんびりと湯につかっているシグナムはそんな二人を微笑ましく思いながら眺めている。

ヴィータは子供扱いされる事を嫌う。

ヴォルケンリッターの外見年齢と実年齢には大きな開きがある。

外見年齢は小学生程度のヴィータだが、その実ゆうに数百年の時間を生きている。

無愛想で感情表現が下手、主の意見には従うが反発的な態度をとるときもあった。

「ふう……ありがとな。ほら、今度はあたしが洗ってやるよ」

それが今のヴィータはどうだ。

主に甘える事を覚え、趣味を見つけ、毎日笑顔で過ごしている。

家事もある程度手伝えるようになり、料理に限ってはシャマルを凌駕している。

(こつしてみれば普通の少女だな)

照れて拒否しているが、はやての髪を洗う時の練習だと結局洗われている俊也。

(うん、本当に私達は変わった)

騎士として、将として、そつなくこなしていたと自負している。

誇りもある。矜持もある。誇りを捨てず、どんな外道な主の命も忠実にこなしてきた。

騎士たちを纏め、指示を出し、どんな難敵であろうが切り捨ててきた。

騎士として、将としては優秀だっただろう。しかし、家族としてはどうだ？

考える。

霞んで途切れ途切れの記憶を呼び起こし、繋ぎ合わせる。

そこに現れたのは正しく闇の書の騎士である自分達。

道具、兵器として扱われ、その事を是として感情を殺し、必要最低限の言葉しか発しなかった。

(家族……それ以前の問題だったな)

長いヴォルケンリッターの歴史の中で異常なのは今なのだ。

戦いとは無縁、血の匂いも剣戟の音もない。あるのは温かな笑顔とひたすらに優しい時間。

(だが、今では胸を張って家族といえる)

仲間意識はあった。

しかし、それはよく分らないがおそらく職場仲間や同僚のような意識に近かったと思う。

だが、今は違う。今ははやてという主の元生活する真正正銘の家族だ。

感謝してもしきれない優しい主。

意外とドジでお茶目なところがあると判明したシャマル。

寡黙なところは相変わらずだが、ずっと雰囲気優しくなったがファイラ。

無邪気に笑うようになったヴィータ。

(時間はかかったが……ちゃんと家族になれたな)

八神はやてという至上の主の元に顕現できて幸せだ。もう何度となくそう思ってきたが、これからも変わらずそう思い続けるだろう。

「おい、シグナム」

「ん？ どうした？」

何故かぐつたりとしている俊也の背を叩きながらヴィータがシグナムに声をかける。

「こいよ、今度はお前の髪を洗ってやるよ」

一瞬きよとんと呆けてしまいがすぐに正気に戻り返事をする。

「そうか、頼む」

おそらく笑顔であろう自分が一番変わったのかも知れない。そうシグナムは思った。

とある守護騎士の初恋（前書き）

念話は>>で表現します。

とある守護騎士の初恋

風呂を出ると散歩に出ていたシャマルとザフィーラも既に帰宅しており、テーブルに座って三人を待っていた。

ヴィータが優勝の事を伝えると二人も褒め、夕食時は大変盛り上がった。

ハンバーグを美味しそうに食べ、ご飯も二杯お代わりしたヴィータは満足そうだった。

「あ、はやて、明日だけどじいちゃんたちがお祝いしてくれるっていうんだ。だからお昼ごはんは爺ちゃん達と食べるから」

「ほんまか？ ヴィータは好かれとるなあ。了解したで、明日の晩御飯は今日よりも豪勢にいくから楽しみにしといてな」

「おお！ やった！ 楽しみだ！」

賑やかに食卓をかこむ。八神家の食卓は笑顔が絶えない。

「一度私も挨拶に行った方がええんやろか？ うちのヴィータがいつもお世話になってますってな」

「それじゃあ思いつきりお母さんだよはやて」

「俊也君、その通りや。ヴィータは私の可愛い娘やからな」

そっくりヴィータの頭を撫でるはやて。

ヴィータは顔を真っ赤にして照れている。

「……ふふ、可愛いですね。プレシアと小さな頃のアリシアもあんな感じでしたよ」

「多分俺もあんな感じだったと思うな。母さんや姉ちゃんにベタベタに甘やかされてたからなあ」

サラダのプチトマトを口の中で転がしながら昔を思いだす。
……もしかしくなくても、相当なマザコンの上にシスコンだったのではなからうか？

他人の目なんて考えていなかった幼少期。第三者の目から見たら相当恥ずかしい事をやらかしていたような気がして冷や汗をかく。
今日も八神家の食卓は終始笑顔だった。

「よし、またあたしの勝ちだな！」

「また二位か、ヴィータってゲーム上手いよね……」

「それにしてもさつきから順位が変わらん」

「うう……みんな上手すぎです……」

食後、はやてはリニスと風呂へ。

残ったメンバーでテレビゲームをしていた。ザフィーラは見学だが。

国民的人気な髭の配管工のカートレース。先ほどから数回レースをしているが順位は変わらない。ヴィータがトップで僅差で俊也が二位、その後ろにシグナムが続き、ピリはずっとシヤマルだ。

「それにしても最近はやてはリニスと一緒に居る事が多くねえか？」

「確かに。主はやてはよくリニスに懐いている」

「あ、私もそう思います。はやてちゃん、結構リニスには甘えるのよね」

カチャカチャとコントローラーを動かしながら会話する。

「ううん、多分無条件に甘えられる年上の人だからと思うよ」

「私達には無条件に甘えられないんですか？」
「ほら、はやては皆の『主』だし。はやて自身も言ってるけど、シグナム達の保護者のつもりでいるんだよ。そりゃあたまには甘える事もあるだろうけど、基本お母さん役だからね」

俊也の言葉にどこか思うところがあるのか考え込むシグナム達。

「ヴィータが優勝した報告聞いているときとかさ、何ていうか……
そう、学校であつた出来事を子供から聞いているお母さん、そんな表情してたし」

「あたしってそんなに子供っぽいかな？」

ヴィータはシャルマルの方を向いたがシャルマルは眼をそらした。

「主としてちよつと気を張っている所があるんだと思うよ。本当に子供らしくない、大人っぽい女の子だ。それに親しい年上の人、石田先生だっけ？ その先生ともやっぱり主治医と患者という立場もあるし、はやては子供ながらに迷惑をかけてると思つてみたいだから、やっぱり甘えられない。その点リニスはしがらみもなく接しやすかつたんだと思うよ。リニスは子育ての経験あるし、母性も感じられたんだと思う。リニスが言つてた、はやてが胸を揉むのは母性を求めているからだつて。……やっぱり、どんなに大人びていて母親は恋しいみたいだね」

俊也が話すときちよつぱりしんみりした空気が流れた。

守護騎士たちは俊也の言う事は尤もだと思い、ふがいなさを噛みしめ、本の少しだけリニスに嫉妬した。

「ゲーム、という雰囲気ではなくなつたな。ここいらで止めるか」
「なんか空気がえちゃつてごめんね」

「俊也君が謝らなくていいんですよ。ちゃんとはやてちゃんの事見てくれて、心配してくれてありがとう」

少し和やかな空気に戻ってきた。

「……あたしはおっぱい揉まれた事ないけどな」

ヴィータの呟きには皆聞こえないふりをした。

翌日、ヴィータは朝食を頂くと早々に出かけ、シグナムも道場へと向かった。

【マスター、やはりそれ相応の施設が無ければこれ以上は厳しいかと思います】

「うーん……レイハの処理だけじゃ限界があるもんね。このロストロギアを詳しく調べてみたいんだけど」

ジュエルシード。

子供の姿になり過去に飛んだ原因。

おそらく相当な魔力を使ったにも関わらず、いくつかの球からは魔力を感じる事ができている。

「使い捨てではないという事ですね。魔力を収集しているのか自製しているのか……。電池の代わりになるようなものだったら、ほぼ完成に近いのですが」

研究はここにきて完全に手詰まりだった。やはりそれなりの設備が伴っていないとちゃんとした研究は難しい。

「二人ともお茶が入ったから休憩にせえへんか？」

はやての提案に従い、とりあえずコンソールを閉じてリビングへ向かう。

「お疲れさまや。順調なん？」

「いや、手詰まりだよ」

お手上げのポーズをするとはやては苦笑した。

「まあ気長にいこうや。それよりも俊也君がいたところ……魔法研究開発課やったっけ？ 実際に俊也君が作った魔法とかあるん？」

「俺が開発したのもあれば、共同開発したものもあるよ」

「これでいて俊也は優秀ですからね」

何気ない会話をしてのんびりとした時間が過ぎていく。

「そや、晩御飯はすき焼きにしようと思うんやけどどないやろ？」

御馳走イコールすき焼きとか安直かと思うけどな」

「俺はすき焼き好きだから問題ないよ」

「私も久しく口にしていませんね。桃子の作るすき焼きは絶品でした」

「私も久々に食べたいし、すき焼きで決まりやね。私とシャマルはお買いものに行くけど、留守番よろしくな。お昼ごはんまでには帰るから」

時刻は十時を少し回ったくらい。
朝食を食べてからすぐに作業を開始したので、二時間ほどコンソールとにらめっこしていたみたいだ。

「すみません、私も荷物持ちくらいできればいいのですが」

「気にしないでいいって。うちには荷物持ちに定評を持つファイラがおるからな。俊也君とリニスは留守番をお願いや」

俊也とリニスは保護されてから家を出ていない。

細心の注意を払うならそれで正解なのだが、やはりどこか気持的にいいものではない。なんせただ飯くらいの紐だ。それも二人。これは気まずい。

リニスはバイトでも見つけようかと思ったがはやてに止められた。そのかわりシャマルと同じく家事を請け負っているが。

「だから俊也君もそんな顔せんでいいからな！ もうカワええなあ
！」

「ちよっははやて、くるし……」

抱きつかれ頼ずりされる。

もう完全に弟として見られている俊也。何かと世話を焼いてくれるはやてはありがたいし、嫌な気持ちなど一つも抱かないが……恥ずかしいものは恥ずかしい。

ヴィータも何かと世話を焼きたがるし……何か年上に好かれるフエロモンでも出ているのだろうか？

「いい子に待っててな？ お菓子買ってくるからな」

「うぐぐぐ……リニス、シャマル、その温かい眼は止めて……」

はやての可愛がり方はすさまじい。

しかし良く考えてみると姉達のスキンシップにそっくりだったと気づいて何とも言えない気持ちになった。

「さて、そろそろ行くかな。ザフィーラ、いつもすまんけど今回も荷物持ち頼むな」

「そのくらいお安いご用です」

人型になって準備万全のザフィーラに微笑みかけ、さて出かけようとしているはやてに声をかける。

「あ……ごめん、買ってきてほしいものがあるんだけど」

「うん？ 俊也君がおねだりとは珍しいな！ よっしゃ言うてみ！」

何故か嬉しそうなのはやてに買ってきてほしいものを告げる。

「えっと、まずは……」

「それじゃあ、改めてヴィータおめでとうと言う事で、乾杯や！」

はやての音頭で乾杯をとりちょっと豪勢な夕食が始まった。

「うんめえ！ ギガうまだ」

肉をほおばり目を輝かせるヴィータ。

確かに美味い。味付けもさることながら奮発して良い肉を買ってきたみたいだ。

久々に食べる日本の御馳走はとても美味しく懐かしかった。
リニスも何年振りかに食べるすき焼きに大満足らしく可愛らしく
尻尾を振っている。

食卓は毎度ながら家族団欒。

ふーふーと豆腐を冷ましながら食べるはやて。

肉をほおばりほっぺを抑え幸せ一杯という表情のヴィータ。

春菊をつつくシグナム。

熱々の豆腐を頬張ってもがくシヤマル。

黙々と白菜を口に運ぶザフィーラ。

リニスはちゆるちゆると白滝を食べている。

いつもと変わらない食卓。

いつも変わらず笑顔がある食卓。

改めてこの家族は素晴らしいと再確認した。

しめのうどんも食べ終え、満腹感に浸っている時に俊也は行動を
開始した。

「ヴィータ、改めておめでとう」

「おう！ 何度もありがとうな」

ヴィータはかなり上機嫌だ。

無理もない。シグナムから聞いたがこうして祝い事してもらっ
た事など記憶にないという。

ヴォルケンリッターというものがどういう存在かはよく分からな
いが、だからこそこうして自分の為に祝ってくれる事が堪らなく嬉

しいみたいだ。

「俺からもささやかなプレゼントがあるんだ」

「お、本当か!？」

驚くヴィータに笑いかけあるものを取りに行くため席をはずす。

「ヴィータが羨ましいわあ。よかったな、好かれとるで？」

「ふふふ、今回はヴィータちゃんが主役ですものね」

「祝いの席だ、褒美があつてしかるべきだしな」

「………なんの話だ？」

事情を知る三人は表情が変わらないザフィーラ以外は笑顔だ。

事情が飲み込めずに箸を加えて首をかしげているシグナムにはリ

ニスが事情を説明する。

「お待たせ。こんなものしか作れなかったけど」

「おお………すっげえ」

俊也が持ってきたのはケーキだ。しかし、ただのケーキではない。

「アイスクリームケーキっていうんだ」

「アイスクリーム!? アイスなのかこれ!？」

ヴィータのリアクションに満足する俊也。

「日ごろのお礼もかねてちょっと気合い入れて作ってみたよ。ヴィータのために作ったんだ」

「あたしの為に?」

「そうだよ。みんなには感謝している。はやてにもシグナムにもシ

「ヤマルにもザフィーラにも」

アイスケーキをテーブルに置き、ヴィータの方を向き話す。

「でもヴィータには特に感謝してるんだ。リニスを元気づけてきた事、色々俺達の世話を焼いてくれた事。便乗みたいな形になるけど改めて言うよ、ありがとう」

「お、おう」

顔を紅くするヴィータ。

「色々ヴィータには救われているんだ。ヴィータの笑顔とか大好きだし、一緒にいるとそれだけで救いになる。ヴィータにはいつも笑っていて欲しい」

「う、うん」

どんどん紅くなるヴィータ。

「そんなヴィータの事が大好きなんだ。改めておめでとう、そしてありがとう」

真っ赤なヴィータはただただ頷く事だけしかできない。

> シグナム、シグナム…… <

> どうしたヴィータ？ <

> どうしよう……あたし、こんな告白されたの始めてで…… <

> あの言い回しではそうとも受け取れるなく <

> その……すごくうれしいんだ。うん、嬉しい。なんだろうこの気持ち。ドキドキする <

ヴィータのシグナムの念話は他の人には聞こえない。
そんな初々しい反応をするヴィータをとて愛おしく思いながら
シグナムは小さく微笑んだ

とある守護騎士の初恋（後書き）

ヒロインははやて。

でもヴィータがすごく可愛い。

うちのザフィーラは頻繁に人型になります。

開幕（前書き）

やっとこさなのはさん出せました。ちょこつとですけど。

開幕

平穩とはとても尊く得がたいものであり失ってからその大切さに気がつく。

あたりまえに訪れていた毎日が簡単に崩れ去る。そうして一度崩れ去ったものを元通りにするのは難しい。

八神はやての願いは欲が無いものだった。

家族と、友達と、ただ毎日笑ってすごせばそれで満足だった。

自分が作ったご飯を皆で食べて、一緒にゲームをして遊んで、お風呂に入って体を洗いっこして、隣り合って眠る。

ごくごく普通な一般的な家庭の日常風景。なんのひねりもない普通の生活を望んだ。

孤独だった。ただ孤独に一人耐えていた。

そんなはやての願いは叶った。忘れもしない誕生日、神様からのプレゼント。

真面目でとっつきにくい所があるが根は優しいシグナム。

口が悪く、見た目通り子供っぽいが、たまに大人びた姿を見せるヴァイター。

優しく面倒見がいいが、たまにうつかりとドジを踏むシャマル。

寡黙で静かだが気が利き頼りになる存在なザフィーラ。

四人の個性あふれる家族をができて……。

小さく可愛らしい弟のような存在である俊也。

とても優しく温かな母を感じさせるリニス。

二人のかけがえのない友達もできた。

はやては幸せだった。

今までの孤独がまるで嘘のような笑顔の絶えない毎日。

そんな楽しい日々がずっと続くと思っていた。信じて疑わなかった。

一度そんな幸せな日々を体験すれば孤独の日々に戻るのには耐え難い。今までは耐えられたが、前の状態に戻れば今度は絶対に耐えられない。

どんなに大人びていてもまだ九歳の少女だ。まだほんの子供。

親に甘え、我儘を言って過ごす……そんなあたりまえが与えられなかった子供でしかない。

はやては明るく振舞っていたが、どこか根っこの部分でネガティブ思考があった。

『おとももおかんもおらんのも、うちが悪い子やからや……』

そんな思考。大人びて、頼れる大人もいなかったため、知らず知らずに自分ひとりで抱え込むようになっていった。自覚は無いが。

実際にはやてに非は無い。はやてもすぐにそんな考えを振り払っていつも通りの一人で過ごす日々を送っていた。寂しさを押し殺して。

しかし、そんな忘れていた思考が完全にはやてを支配する出来事が起こってしまった。

ヴィータの優勝祝いをしてから三日後、はやては倒れた。

一時大パニックになった八神家だが、幸い症状は重くなく一日だけ大事をとって入院したが次の日からは普段の生活に戻った。

いや、普段の生活は正しくない。この日から八神家の日常はから

りと変わってしまったから……。

守護騎士の四人は家を空ける事が多くなった。

普段家に居る事が多いザフィーラでさえもほとんど家を空けている。ウィータはゲートボールに顔を出さなくなり、シグナムは剣術道場に向かう時間が極端に減った。

シヤマルは家事をする表情に明確に疲れが見えつつかりが多くなつた。

はやてを一人にさせないために常に俊也とリニスは家にいるが、守護騎士たちと過ごす時間は明らかに、そして大幅に減った。

夜遅くに帰宅、ひどい時は朝に帰ってくる事もあり、当然はやては相当心配した。

しかし、当の本人達は心配するな、何も無いの一点張り。何か隠し事があるのは明白なのだ。ただ、それをはやてに打ち明けようとならない。

家族と言ってもプライバシーはある。当然知られたくない秘密の一つや二つあるだろう。

だが、目に余る。

はやては急にこのような態度を取られ戸惑っていた。

自分を除けものに、仲間外れにされたようで疎外感を感じてしまつた。

しかし優しい彼女は守護騎士を問いたださなかった。主の命令という絶対権限があるにも関わらず、四人を信じて話してくれるのを待つ事を選んだ。

目に余る四人の行動に俊也とリニスは何をやっているのか問いただしたが、返ってきた言葉は『危ない事は無い、主にもお前たちにも迷惑はかけない。だからどうか黙って私達の事を見守っていてく

れ』というもの。シグナムは土下座をする勢いだっただけで慌てた二人は黙認するしかなかった。

守護騎士たちはこうもいった『主のそばには二人がいてくれ』

騎士達ははやての事を嫌っているわけではない。

いや、嫌うわけが無い。それならこうして家を空ける事が多くなつたのは何かしらははやての為のはずなのだ。

騎士たちは主至上主義。しかし、何が目的で、何をしているかが分からない。

「……シグナム達今日も帰ってくるの遅いんかなあ」

ただはやてが寂しがっている事実がそこにあるだけ。

笑顔の絶えなかった食卓は見る影もなく寂しいものへと変貌していた。せっかくの美味しい食事もどこか味気なく感じてしまう。

今日も朝早くから出掛けて行った四人。素人のはやての目から見ても疲れている事が眼に見えて分かる。つまり、休めていない。休む間も惜しんで何をしているのかはまだ話してくれない。その事ははやてをよけいに苦しめる。

「ごちそうさまや。うん、我ながら美味しかった、最高や！ まったく、こんな美味しいご飯を食べんでうちの不良たちはどこをほつとき歩いてるんやろな？」

明るく振舞う姿が痛々しい。

「さあ、三人でお風呂入ろうか」

それに何か怖がっているようにも見える。
多分、このままシグナム達が自分から離れていってしまうかもしれないと考えているのだ。

「今日も三人で寝よな」

以前にもましてはやてはリニスに甘えるようになった。
リニスだけではなく姉として振舞っていた俊也にも甘えるようになった。……このまま悪い方向へ進めば依存してしまうほどに。

はやてに甘えられるのは嬉しい。

可愛らしく、一緒に暮らしてとても良い子だと知っている。守ってあげたい……そう心から思える女の子。

「……どうにかして現状を変えないとね」

隣で眠るはやての頭を撫でながら呟く。

「そうですね……このままじゃはやてが可哀そう」

はやての自室の大きめのベッドで三人は眠っている。いつからこうして眠りはじめたのか……守護騎士達の様子がおかしくなってきたから一月以上も経つ。

「何をしてるんだらうね」

「分かりません。危ない事じゃなければいいんですけど」

心配しているのは俊也とリニスも同じ。

守護騎士たちは既に大切な家族だ。何が何でも守り通す、そう思えるほどに。

「ごめんな付きあつてもらつて。ほんまやつたらリニスもあんま外出するのはあかんのやる?」

「いえ、私は大丈夫ですよ。俊也は理由があつて外に出る事は難しいですが」

守護騎士達は朝早く帰つてきて仮眠をとるとまた出かけて行つた。ここ最近はろくに会話すらしていない。寂しそうな俊也は心が痛む。

そんな寂しそうな俊也は、リニスに気分転換をとリニスに誘つた。俊也は万が一姿を見られたら不味いので家にいるが、今日一日はリニスがはやてのそばに付きつきりになる。

外出と言つても車椅子生活のはやてに人ごみは辛い。なのでしばらく行つていなかた図書館へと行く事に決まつた。

静かに本を読むだけが少しでもはやての気分転換になれば目的は達せられる。リニス自身、日本の本は大好きなのでリニス本人も楽しみだつたりする。

はやては幅広く本を読む。

推理、サスペンス、恋愛、ファンタジーから料理本まで。だが、自身が魔法に出会つてからは魔法が登場するファンタジーをより多く読むようになった。

リニスは意外にライトノベルなどの娯楽本を好む。

海外でも注目されている日本のアニメや漫画などの娯楽は次元世

界でも群を抜いており正直面白いのだ。

次元世界で幅広く使われている魔法は科学の発展上にあるようなもので、ファンタジーやオカルトの類からくる魔法は存在しない。

あくまで術式をくみプログラムし計算し結果、魔法を行使する。

日本のアニメや漫画などでよくみられる『心の力』など『精霊が宿った武器』などといった考えは無く、そういった非現実的なものが逆に新鮮だった。

それに多種多様の引き込まれるストーリーや可愛らしいキャラクターなどにも惹かれあつたという間にのめりこんでしまった。

そのアニメやゲーム、漫画などの娯楽が魔法研究開発課では大いに役立つた。

俊也が大きな功績を残せたのも日本出身だった事とアリシアとリニスとが日本に滞在した期間があつた事が大きい。

図書館につき、好きな本を取り読む。

リニスはよくある剣と魔法の異世界ファンタジーもののライトノベルを、はやては興味があつたのか北欧神話の本を読んでいた。

「あかんわ。やっぱり原典に近いのはよくわからへん。もうちょっと分かりやすく書いてあるやつ取ってくるわ」

「一緒に行きましょうか？」

「ええつて。図書館は良く一人で来とつたからな。リニスは今日中にそのシリーズ読破するんやろ？」

「そうですね、続きが気になります」

ちょっと照れたように笑うリニスが妙に可愛くて図書館に来てよかったと思うはやて。

車椅子を器用に動かし目的の本棚へ。

「うーん見つけたのはええけどどこかへんなあ。あと……」

もうちよい……………」

必死に手を伸ばす。

リニスに着いてきてもらえばよかったと後悔していたら横からひよいと目的の本を取られた。いや、正確には取ってくれた。

「この本でいいのかな？」

「あ……………そうです。おおきに、助かりました」

本を渡してくれたのははやと同じくらいの年の女の子だ。

紫がかった長い髪でどこかほんわかした雰囲気を持つ少女。はやにてとつては滅多に触れ合う機会がない同世代の女の子。

「お礼なんていいよ。困った時はお互い様だよ」

「おおきに。私ってこんな有様やから結構困ること多いんよ。ほんまに助かりました」

「敬語なんて使わなくてもいいよ。年も同じくらいだと思うし。私ね、結構この図書館に通っていてね、何度か貴女の事見たことあるの。何度も話しかけようと思ってたんだけど中々きつかけが掴めなくて……………」

「そんな気にせんで話しかけてくれればよかったのに」

二人で笑い合う。

「丁度いいきつかけになったね。良かったら私とお友達になつてくれないかな？」

「え？ う、うん！ めっちゃ嬉しいわ！ 大歓迎や！ 私ね、八神はやてって名前やねん。足がこんなやから学校も行けてなくてな……………だから新しい友達、すっごく嬉しい」

「そんなに喜んで貰えて私も嬉しいよ！ 私の名前は……………」

「はやてなんだか嬉しそうだね」

「顔にでてもうとるか？ えへへ〜ちょっと良い事あったんよ」

夕飯は相変わらず三人で頂く。

しかし、いつもと違いはやては上機嫌だ。たまに思いだしたように笑顔になる。

【私から見ても上機嫌だと分かります】

「レイハから見てもわかるんか？ 結構顔に出やすいんかなあ私」

ぐにぐにとほっぺを摘む。その表情もとても嬉しそう。

「今日図書館で友達ができたらしんですよ」

「そうなんや！ 私と同じ年でめっちゃ可愛い子なんよ！」

なるほど、と俊也は納得した。

はやての友人関係はとても狭い。友人と呼べるような関係は俊也とリニスくらいのものだ。

それが同じ年の女の子の友達ができた。ヴィータともリニスとも違う、同じ屋根の下に暮らしていない友達。そんなあたりまえの友人がはやてには逆に新鮮なのだから笑えない。

「まだ私も名前を覚えてもらっていないんですけどね。私を読みふけている時に随分仲良くなったようです」

「またラノベ？」

「そうですね。この国の娯楽は次元世界の宝です」

生真面目で管理局じゃ名が知れていて一種の畏怖の対象であるリニス。

だが、そんな彼女がアニメ、漫画、ゲーム、ラノベなどを好むと知ると一気に親近感が湧いてくる。もっともその事実を知る局員は少ないが。

「それでな、その子もめっちゃ可愛いねん。私の周りは可愛い子や美人さんばかり集まってくるから不思議やね。

シグナムやシャマルやリニス、石田先生は美人。ヴィータや俊也君は可愛いし」

「はやて、俺は男で……」

「その子も可愛い系やね」

はやては俊也の心の叫びを黙殺し話を続ける。

「そんでな、その子の名前やけどな……」

そしてはやてが言った友達の名前を聞いて二人と一機は絶句した。

はやてに新しい友達ができた日、時刻はPM七時四十五分。

ヴィータとザフィーラは海鳴市のはるか上空にいた。

「封鎖領域……展開」

目的は蒐集。闇の書のページを埋めるため。

主に蒐集行為は禁じられている。よってこれは重大な裏切りだ。しかし、裏切りでもこの行為は止めるわけにはいかない。闇の書を完成させなければあの優しい主が死んでしまう。

寂しい思いをさせている事も承知している。そばにいてくれる俊也とリニスに闇の書を説明してない事も後ろめたく思う。

「でも……止めるわけにいかねえ」

シヤマルとシグナムは別の世界に蒐集に行っている。

二人とは別行動でヴィータとザフィーラがこの魔法文明のない地球に留まっているのは理由がある。

「近頃たまに感じる大きな魔力反応……蒐集できればいつきに二十ページは埋まりそうなんだけどな……」

そう、時々感じる大きな魔力反応。

魔法生物から蒐集する以上に効果をあげられる。

人から蒐集することは気が引けるが……はやての命にはかえられない。何しろ時間が無い。

「手分けして探そう」

「そうだな。ザフィーラも気をつけてな」

二手に分かれる。

結果を察知されてこの時間軸の俊也が現れる懸念があつたが、俊也からはそのような事を聞いていない。

ヴィータ達とは初対面だった。即ち俊也とはち合わせる事はない。

「……！ 魔力反応！ ついに見つけた！ ……いくよグラーファ

イゼン」

大きな魔力反応。

俊也の魔力と違う事も確認済み。

おそらく、無自覚な魔力持ち。せめて痛い思い、怖い思いをさせないように素早く終わらせる。それがヴィータのできる最善だ。

魔力反応の元に飛ぶ。

驚く事に魔力反応はヴィータに少しずつ近づいてきている。

「……魔導士か？ 管理局員ってわけじゃないだろうけど。無自覚な一般人である線は消えたか」

目標がいるビルにたどり着く。

屋上に人影。魔力反応は人影から。……蒐集する目標は目の前にいる。

「……っ」

油断しないようにグラ ファイゼンを構え、目標の顔が見える位置まで降下する。

そしてヴィータは己の眼を疑った。

その目標は自分が慕う少年にあまりに似ていたから。

「あの……あなたは？ あなたも魔導士なんですよね？」

どこか不安げな顔。その顔も、髪の色も、瞳も、何もかもが似ている。似すぎている。

「な……嘘だろ？」

ヴィータは動揺を隠せない。

鼓動も早くなる。完全に予想外な展開に頭が追いつかない。

「私……私の名前は高町なのは！ あなたのお名前は？」

「たか……まち」

その苗字に何故かぞくりと背中が震えた。

対峙する二人。

闇の書を巡る物語の幕開けはそんな光景からだった。

高町なのは(前書き)

うちのヴィータちゃんは猪じゃないです。

高町なのは

たかまち。高町。タカマチ。

何度もその言葉を頭の中で呟く。

目の前の少女は高町なのはと名乗った。

可愛らしい少女だ。

栗色の髪、大きな瞳、そのどれもが少女を映えさせる。

しかし、彼女は似すぎていた。

「あ……あの」

「……高町なのはと言ったな？ お前、高町俊也という名前に聞き覚えはあるか？」

「え？ 俊也？ うん聞いたことないなあ」

「そうか……」

他人の空似だと思っ事にした。

俊也は男。目の前の少女、なのはは女。別人だ。

「……悪く思うなよ。抵抗してくれてかまわない。こちらに非があるのは分かっている」

動揺する心を押さえつけ改めてグラ ファイゼンを構える。

できれば戦闘は避けたかった。知らないと言ったとはいえここまです容姿が似ている上に姓も同じ。無関係なはずがない。

しかし、それは俊也も言える事。俊也の口からなのはなどという人物名は出てきた事が無い。

お互いがお互いを知らない。そんなことがあり得るのか？ 双子といってもおかしくないほど似ている二人がそれぞれの存在を認識

していない。

「わけがわからねえと思うがそれはあたしも同じでな。だけど見つけちまったからにはやる事は一つだけだ」

「こころに妙なしこりができた感覚がする。

鼓動もまだ激しい。しかし、当初の目的は果たす。

「しっかりと受ける、手加減はするから」

ヴィータは手のひらほどの鉄球をぼんと頭上に投げ……。

「シュワレベフリーゲン！」

グラーフアイゼンでそれを思い切り叩きつけなのはに飛ばした。

「……！ 誘導弾！？」

とつさにシールドを張ったのはだが突然の攻撃に驚いているようだ。

「なんなの！？ どうしてこんなことするの！？」

わけがわからないだろう。突然襲われたのだから。

「よく防いだな」

「にやつ！？ きゃああああ！」

シールドは誘導弾を防ぐので精いっぱい。これ以上の攻撃は耐えられない。

ヴィータはグラ ファイゼンを思い切り振りおろし、鉄球の上からシールドに叩きつける。当然シールドが耐えられるはずもなく砕け散りなのは後方へ吹っ飛んで行った。

(……上手く蒐集するには弱らせて動けないようにしないとイケねえ。抵抗されたら上手く蒐集できなくて大事になりかねない)

闇打ちと同じ。騎士道も糞もない行為。

だが外道になり下がろうと成さねばならぬ事がある。矜持を捻じ曲げてでも成さねばならぬ事がある。

「……恨んでくれてかまわねえ。回復役も来るから……」

気絶したものと思っていたがヴィータの考えは外れていた。

「おいおい……手加減したとはいえあたしはヴォルケンリッターだぜ？」

顔が引きつるのが分かる。

ヴォルケンリッター、雲の騎士。数多の戦場を駆け抜けてきた戦士。

経験は常人のそれを遙かに上回る。素人が戦って勝てる相手ではない。

ヴィータはこの虫も殺せなさそうな少女に戦闘の心得があるとは思っていないかった。

管理世界ならまだしも地球は管理外世界。そしてここは平和な国日本。魔力があるのが無かるのが、普通の子供がヴォルケンリッターと”戦闘”できるなどあるはずもない。

(見た目通りの年齢ではない？ あたしと同じような？ ありえねえ。ならば何故？ 純粹に戦闘能力がある？ それこそまさかだ。魔法文明の無い世界、おまけにこの国には戦場もねえ、兵役もねえ。住人の身体能力が異様に高い？ いや、はやてや俊也は一般的なミッドヤベルカ人と大差ない。ならばこの線も却下。何かしらの武術を習っている？ ありえるが武術をかじったくらいの子供にあたしの鉄槌は防げねえ。魔法で身体能力の強化？ あり得る。シールドの強度も眼を見張るものがあつた。素人がとつさに張つたにしては強固すぎるし術の練りも上手い。……魔法に慣れ親しんでいる？ 昨日今日関わつたわけではなさそうだ。独学？ 限界がある。指示する人物がいる？ 魔法文明のないこの世界に？ 誰だ？ 魔法陣を見るにミッド式。まさか管理局員？ いや、仮にも法を守る組織、管理外世界には手を出さないだろう。

いや、まて。俊也の話では既に地球には管理局が来ている。俊也が親友、確かユーノと師になる女、クロノと共に解決した事件がある。ならばタイミングはその時か……。俊也と同時期に魔法に触れたと仮定しても関わつた時間は一年にも満たねえ。それでこの強さか？ ありえ……。なるな。俊也は囑託試験を受けてランクAAだと聞かされたらしいし。天才というやつか？ いや、この女が管理世界出身という可能性は？ 姓名は日本人のようだけど……)

なのはが起き上がるまでの数秒で頭の中で目まぐるしく思考するヴィータ。だが、情報が足りない。

「いったあゝ。いきなり何するの!？」

涙目だが目立つた怪我もないようだ。

ヴィータは気絶させるつもりで放つた一撃を受けてピンピンしているので警戒を強めた。

「ちゃんとお話ししようよ！ 私は高町なのは！ あなたの名前……」
なのはが喋りきる前にもう一発誘導弾を放つが今度もきっちりとしールドで受けられた。

（不意打ちだったけど……受けられたか）

「危ないなあ……もう、ちゃんとお話してよ」

当たり前だが怒気を含んだ声でそう言うとなのははペンダント状にして首からぶら下げていた宝石を手に取る。

その宝石を見てヴィータは二度目の驚愕をする。

あまりにも見慣れたその宝石。

いつも俊也の周りをふよふよと浮かんでいる、俊也が己の半身とも言ったデバイス。

「レイジングハート……セットアップ！」

【オーライマスター。セットアップ】

暴風のようにうねる桜色の魔力。

そしてなのははバリアジャケットを身に纏っていく。

（レイハ！ レイジングハート！ どうしてこの女が持っている！
？ あれは俊也のデバイスだ。二機あった？ たまたま名称が同じ？
？ 違う、あれは真正銘のレイハだ。家族は見間違わねえ。ただ
どうしてそこにある？ どうして俊也以外をマスターと呼ぶんだ
！？ わからねえ。もう然っせんわけがわからねえ！）

白を基調としたどこか制服を連想するバリアジャケット。

なのはに良く似合っていたが、ヴィータはそれどころじゃない。

理解の範疇を超えていた。

「くそつどうなってやがんだ!」

「それはこっちのセリフなの!」

なのはの放った二つの誘導弾を避け上空へ飛ぶ。

(誘導弾の扱いもそれなりに上手い!)

賞賛すべきだがこの場合はやっかいでしかない。

「ちっ」

二つをシールドで受け何とか体制を整えようとしていたが……。

「なっ! もう一つ!?!」

さっきまでは確認できていなかった桜色の誘導弾がヴィータに向かって飛んできていた。

(計三つ! こいつ、背中にもう一つ隠してやがったな!)

まんまと引つかかったヴィータだが、これしきの事で後れをとるような事はない。

グラ ファイゼンで誘導弾を叩き壊し、こちらも誘導弾で応戦しようとした最中眼を見開いた。

「デイバイーン……バスター!!」

なのはから放たれる桜色の光。一直線上のヴィータ目がけその美

しくも暴力的な魔力が襲いかかる。

「砲撃……！ くっそ！」

歯を噛みしめる。

誘導弾で気を逸らした所で本命を叩きつける。

近接、遠距離と違いはあるが先ほどヴィータの取った戦法と同じだ。

シールドを全開にして受け止める。シールドが割られはしないが、軽視できない威力だ。ヴィータは認識を改める。

（素人じゃねえ！ あたしと”戦闘”できるだけの戦士だ！）

侮っていた。可愛い見た目に騙されていた。

砲撃の威力は軽視できないものがあつた。これほどの砲撃、少なくともヴォルケンリッターは持ち合わせてはいない。直撃を受けることやっかいだ。この小さな魔導士はヴォルケンリッターの脅威になり得る。敵として認識できる。

「舐めるなよっ！」

「にゃっ！」

ディバインバスターを完全に受け切つた。なのはは少し驚いているようだ。

「侮らねえ！ お前はあたしと対等に戦えるすべを持ち合わせている！ 手を抜くなどといった非礼はもうしねえ！ ……全力だ。この鉄槌の騎士、全力でお前の相手になつてやる」

グラ ファイゼンを構える。
雰囲気も変わりなのはは少しだけひるんだ。

「現状の把握はこの際後回しだ。あたしからけしかけた喧嘩だ。非はあたしにある。恨んでくれていい」

「え？ 恨んでいいって何？」

なのははおどおどするばかり。

現状を把握できていないのはのも同じ。いや、むしろなのはのほうが混乱しているだろう。

「どつかのおっぱいほどバトルジャンキーのつもりはねえけど、あたしも騎士だ。強いものと戦う時の高揚感は否定できねえ。そしてさっきの砲撃を受けて高揚したのもまた事実」

ガチャンガチャンと機械音。

グラ ファイゼンにカートリッジがロードされた音だ。

「いくぜ。耐えるよ高町なのは」

「ちよつと……うわっ！」

全力飛行し屋上にいるなのはに迫る。

（認める。遠距離ではあたしの負けだ。近接を主体とするベルカの騎士でもあたしは万能型、どの距離でもそれなりに戦えるがミッド式と真っ向からの撃ち合いには一歩及ばない。

ならどうする？ 簡単、ミッドが苦手な接近戦に持ち込めばいい。思いのほか防御は固い。ならばその防御を上回る攻撃をすればいい。時間をかけるのは避けたい。一撃で決める……！）

今度はなのはが眼を見開く番だ。

「……おつきいね」

【呆けている場合ではありません！ 全力で防御します！】

レイジングハートはバリアジャケットに回していた魔力すら惜しみそれを解除。

なのはの全魔力をシールドへと注ぎこんだ。
その判断は正しい。

「ギガント……シユラークツ！」

ありえないほど巨大化したハンマーが降りおろされた。

たとえば巨人に踏みつぶされるようなもの。圧倒的質量からくる攻撃は単純で分かりやすい。シールドが保つかどうかも正直怪しいが、持たせなければ確実に死ぬ。

「きゃあああああつ！」

悲鳴を上げた所でなのはは気を失った。

誰でも分かる事だ。あの鉄の塊に押しつぶされたら死ぬ。シールドは巨大化していない状態でも破られた。防ぎきるのは難しいだろう。

「……まあしかたねえか」

しかし、巨大な鉄槌はシールドに当たる事は無かった。

寸止めではないが当たる直前にデバイスを強制的に待機モードにしたのだ。

【どうして止めたのです？】

「愚問だぞレイハ。あたしは別に命が欲しいってわけじゃない」

改めてデバイスを起動する。

「正直手こずった。だけど目的は果たす」

いざ蒐集しようとした刹那、ヴィータに向かって誘導弾が放たれた。

「ちっ………新手か！ 障壁っ！」

どうも面倒事が多く起こる。

放たれた金色の魔力弾を防ぎ、放ったであろう者を睨みつける。

(三人………少し不味いか？)

「なのはにそれ以上近づくな！」

射殺さんばかりの視線でヴィータを睨みつける少女。

長い金髪をツインテールにし、黒いバリアジャケットに黒いマント。年齢はなのと同じくらいか。

「管理局か！？」

「そつだ。そしてその子の友達だ！」

明確な敵意を向けてくる少女。
ヴィータの焦りは大きくなる。

(ここで管理局に見つかったか。しくじったな……。それになのは

の友達？ 繋がりがあある？ 何故だ、ここは管理外世界。何故現地
住人と管理局に繋がりがあある！」

「目的を教えてもらうよ。どうしてなのはを襲ったんだ？」

「これ以上その子に手出しすると容赦しないよ！」

残り二人もヴィータに敵意を向けてくる。それほどなのはが大事
なのだろう。

（犬耳の女……守護獣、いや使い魔か。そしてこつち……女顔だが
男だな。金髪に翠の瞳、そしてとびっきりの美少女に見えるが男……
…！）

三人を睨みつけながらヴィータは背中に冷たいものを感じた。

三人の内一人が俊也の話す親友にして師の特徴に一致する。

「……質問だ管理局。高町俊也、この名前に聞き覚えは？」

知らないでいてくれ、違っていてくれとヴィータは内心願う。

「高町？ ……知らない。なのはの家族にそんな名前の人はいない」

少女がデバイスを構えながら答える。

「次だ。ユーノ・スクライア、この名前に聞き覚えは？」

「……ユーノは僕だ」

外れていて欲しかった。違っていて欲しかった。

しかし、自らをユーノと名乗る者が目の前にいる。

「まじか……。リニス、という名前に聞き覚えは？」
「どうしてあんたがリニスを知っているんだい!？」

驚く使い魔。こちらも当たり前。

「なんてこった。ますます意味がわからねえ」

顔が引きつっているのが分かる。

俊也を知らない？ あり得ない。少なくともユーノ・スクライアは俊也に魔法を教えた張本人なのだから。

(駄目だ、あたしの理解の範疇を超えている。皆で相談しねえと……今は逃げに徹するしかねえか)

「最後の質問だ。その使い魔と黒いの、名前は？」

「……フェイト・テストロツサ」

「アルフだよ。大人しくお縄につきな」

名前を知って更に動揺。

俊也の相棒、リニスのマスターにして娘のような存在。任務に失敗して命を落とした少女と姓が同じ。

「これで正真正銘最後だ。アリシア、この名前に聞き覚えは？」

その名を口にしたとたん、明らかに三人の顔つきが変わった。

「どうしてアリシアを知っている!？」

驚愕の表情でフェイトが叫ぶ。

アルフは犬歯をむき出しにしてヴィータを睨みつける。

「くっそ、ますますわけわかんねえ」

なにか、なにかおかしい。

俊也とリニスの言うことと何故こつも食い違つ。

(信じていいんだよな二人とも……)

現状を打破するためヴィータはカートリッジをロードする。

(現状はあたしの不利、魔力蒐集もできていない)

「質問は終わりだ。当然だが大人しく捕まるつもりはねえぞ」

(残りカートリッジは一つ。心もとないが、なんとかするしかねえ)

長い夜はまだ終わらない。

高町なのは（後書き）

なのはを対等の敵として認めたが故の全力全開。
もちろんギガントシユラークはあのまま直撃すればオーバーキル。
なのはさんぺったんこ。

新たな疑問

(さて、どうしたものかね……)

敵は三人。対するこちらは一人。

戦力は未知数。戦況は圧倒的不利。

(最良はこいつらからも蒐集する事。でもさすがにそれは無理か)

アイゼンを構える。三人はなのはを庇うようにヴィータと対峙し、もちろんだが隙はない。

(ユーノは結界特化と俊也から聞いている。アルフと言った使い魔はデバイスなどの装備はなく無手。おそらくザファイラと同じ前衛接近戦タイプ。金髪……フェイトは一般的なミッド魔導士なら後衛砲台。でもデバイスの形状は……鎌？ 斧？ とにかく、接近戦を想定していると考えられるな。接近戦……一対一なら負けるつもりはねえが……)

鉄球を取り出し放り投げ、アイゼンで打ち出す。

(四人から蒐集することは無理。次点の最優はこの邪魔な三人を戦闘不能にすること。最悪はここであたしが捕まる事。……リスクは侵せねえ、今は逃げに徹する!)

「くらえっ!」

球は三発。本来は誘導弾だが細かい演算をする時間が惜しいので一直線上に進むだけのものだ。

「下がって！」

ユーノがシールドを展開し、残り二人は動けない。

外道だが、ヴィータははまだ昏倒しているのはに向けて撃つた。無論、誰かしらがしつかりと防ぐと見越しての事だが。

ここを戦場としてみればなのは明らかかな足手まとい。このチームの弱点はなのは守りながら立ちまわらないといけない事。その弱点をつかなければ勝機は無い。

(この隙に……)

先手を取った。読み通りに防御。

ヴィータは予定通りに離脱する。先ほどの攻撃から一転、背を向けて逃げ出すヴィータに呆気にとられる三人。

「ちよっ！ 逃げんな！」

「なのはは僕が。フェイトとアルフは追って！」

「分かった。バルディッシュ！」

【サー。ソニックムーブ】

フェイトが駆ける。その姿は正に金色の閃光と呼ばれるに相応しい。閃光のごとく駆ける様は見惚れてしまうほど美しい。が、それを確認する暇などヴィータにはなかった。

一気に加速したフェイトは逃げるヴィータの横を通り越し正面に回り込む。それにはさすがのヴィータも眼を剥いた。

「……おー、マジかよ」

「逃がさない。なのはを狙った理由、吐いてもらおう」

フェイトが睨みヴィータが冷や汗をかく。

(なんつー高機動！ 予想外だ！)

逃走に失敗したヴィータは焦る焦る。

「逃がしゃしないよ！ …… よくもあの優しい子に手え出してくれたね！」

アルフは犬歯をむき出しにして唸る。

その表情からは憤怒の様子が分かりやすく伝わってくる。

(前後で囲まれた。なのはにはユーノが付いている)

状況は既に詰み。だが、機はまだ残されている。

「……分かったよ、あたしの負けだ」

アイゼンを待機モードに戻し両手を上げる。

「やけに潔いじゃないのさ」

「ふん、勝てねえ勝負はしない主義だ。それに今は命を張るような時じゃねえ」

フェイトとアルフの警戒は解かれない。

元々警戒を解くのが目的ではない。この場で警戒を解くようなら三流以下の大間拔けだ。

「で、あたしはお前らに投降するわけだが……お前らの所属はどこだ？」

「……時空管理局巡航Ⅰ級八番艦アースラ」

「艦長の名前は？」

「艦長はリンディ・ハラOWNだ」

「ふん。お前は正規の局員なのか？」

「……囑託魔導士だ」

「なるほど、ひよっこか。船には執務官はいないのか？」

「クロノ・ハラOWN執務官がいる」

問答が続く。

あからさまなヴィータの時間稼ぎ。

しかし、その事にフェイトとアルフは気がつかない。

仮にヴィータの目の前にいるのがクロノ執務官であったとするならヴィータ思惑はすぐに感づかれただろう。しかし、相手は囑託。

年齢もまだ幼い。ヴィータの考えに気が付けるほど経験を積んでいるわけではなかった。

「アルフってのは誰かの使い魔か？」

「あたしはフェイトの使い魔だよ」

「アリシアと聞いて驚いていたけど、アリシアとはどういう関係だ？」

アリシアという言葉で顔を歪める二人。

その二人の表情にヴィータは首をかしげるばかりだ。

「アリシアは……私は……。私は、私はアリシアの妹だ！」

「フェイト……」

その言葉にはどんな感情がどれほど込められていたのだろうか。

正も負も、ひっくり返るめてぐちゃぐちゃにかき混ぜて……。自らをアリシアの妹と言ったフェイト。色々な思いが彼女の中にはあっ

だが、そう名乗った事に後悔は無い。

「……………っ！ 妹……………。なるほどな」

「だからなんであんながアリシアを知っているんだい！」

憤るアルフを無視して考える。無論両手を挙げた状態でだ。

「……………考えれば考えるほどわけわかんねえな」

俊也の話とやはり違うところが多々ある。

(艦長はクライドといったはずだけどな。姓は合っているけど。アリシアに妹……………これはたまたま話題に出なかったという可能性もある。……………しかし、一番解せねえのは俊也を知らないということだ(けど))

「何を言っているんだい！ それより話が長すぎるよ！ フェイト、いいかげん連行しよう？ なのはも早く医者に見せた方がいいと思うんだ」

「！ そうだね。あなた……………名前は？」

「名前か……………いや、止めとくよ。名前を知られたらこちらにデメリットが多いからな？」

そう言いやりと笑うヴィータ。

「なのはっ！」

「っ！ ユーノ！」

「どうしたんだい！？」

ユーノの叫び声を聞き振り返るフェイトとアルフ。

そしてその信じられない光景に眼を疑う。

「な……ななな」

「どついうこと……!？」

気絶しているなのは胸から腕が生えていた。

そうとしか表現できない。確かに生えている。ただし出血などはないため物理的に生えているわけではないようだ。

「これは……一体」

なのはの隣にいたユーノは突然のホラーに腰を抜かしていた。が、冷静さは失わない。

「……まさかリンカーコア!？」

良く見れば手は小さな桜色の球体を包み込むようにしている。腕はその球体を狙って生えたと見て間違いない。

それをリンカーコアだと判断したユーノ。その判断は正しい。だからこそユーノは迂闊に動けない。もしリンカーコアを傷つけたら取り返しがつかないからだ。

「形勢逆転だな管理局。囑託のお前で助かったよ。お前じゃなくてクロノちゃんだったらあたしの負けだった」

ヴィータはアイゼンの待機モードを解除し、構える。

フェイトとアルフは己の迂闊さを呪い、新たに現れた援軍と思われる男と女を睨みつけた。

深夜零時を回り日付は既に次の日。

すやすやと寝息をたてるはやてを起こさないように俊也とリニスはそっとベッドを抜け出した。

誰もいない真っ暗なリビングのソファーに腰掛け俊也は愛機に語りかける。

「レイハ……画像データを」

【了解ですマスター】

レイハが記録している膨大な画像データを映し出す。

「……」
「……」

俊也とリニスはそれを無言で見つめる。もう二度と会う事が出来ない大切な人達。二度と触れ合う事が出来ない大切な人達……。

レイハと出会い八年間。その軌跡とも言うべきデータ。

「懐かしいな……この頃は本当に小さいな俺」

「今と同じ姿ではありませんけどね」

クスリとリニスが笑う。

二人が見ている画像は小さな男の子二人が肩を組んでピースしているという微笑ましいものだ。

幼い俊也とユーノ。親友、師弟、最高の親友と胸を張って言える二人。

「こっちは二人して顔を赤くして可愛いですね」

「言ってくれるなよ。子供ながらに照れてたんだから。クロノさん
つてばあの顔、あの容姿で胸はすごいんだ」

「俊也のエッチ」

次の画像は先ほどの画像のすぐ後に撮られたものだ。

クロノが肩を組んでいる二人に後ろから抱きついて満面の笑みを
浮かべている。

「クロノも桃子やルシエ少将と同じ人種で見た目が変わりませんも
いんね」

「今になってから分かるけどアレはロリ巨乳っていうんだよね。い
や、年上だけど。見た目小学生で姉ちゃんより胸があるってどうい
うことだよ？」

「俊也のスケベ。でもその気持ちは分かります」

次の画像はアースラで撮ったもの。

「クライド提督、エイミィさん……」

親身になって世話をしてくれたクライド提督。からかわれてばっ
かりだったエイミィさん。

「あ、次は私とアリシアも映ってますね。懐かしいです……」

俊也、ユーノ、アリシア、リニスと高町家の面々が映っている。

「食事中ですね。この頃はお着に悪戦苦闘していた記憶があります」

家族団欒と言った風景。

アリシアとリニスと出会った事件が収束して、魔法の事を家族に話して……もちろんユーノの正体も暴露して……。

「ユーノの正体を知った姉ちゃんはむしろ興奮していたな」

次の画像は管理局の制服を着た俊也と母桃子の写真。

「入学式みたいですね」

「うん、なんだかんだいって母さんは応援してくれたからね」

次の画像。病室での一枚。

「プレシア母さん……」

「プレシア……」

はかなげに笑うプレシアがそこには映っていた。

俊也とリニスは次々に画像データを確認していく。

レジアス中將とその娘であるオーリスちゃんと撮ったもの。

ランスター提督と共に撮ったもの。

ユーノとティータと共に撮ったもの。

「あ、この画像ってば結構な激レアですね」

「そういえばそうだね。思えばすごい大物と知り合いだよなあ」

やや緊張した面持ちの俊也。その隣に立つ女性は緊張など一切見えない笑顔だが。

セミロングの金髪、服装は管理局の制服ではなく私服であることからプライベートであることが分かる。

その見惚れるような美しさはもちろんだが更に目を引くのはその瞳だ。

虹彩異色の瞳。その意味は次元世界の多くの人間が知ることだろう。

オリヴィア・ゼーゲブレヒト。

歩く理不尽と畏れられる聖王家の二女。俊也の直属の上司だ。

そして二人の後ろに立つ初老の男性こそがまごうことなき聖王陛下である。

「思えば天皇陛下と写真を撮っているようなものだもんなあ」

確かにリニスが言うように激レアであることは間違いない。

次の画像は出向先でのもの。

「カンナ三佐にトレニアか。結局トレニアには負け越してるな……」

苦笑する。

椅子に座ってコーヒを飲んでいる桜色の長髪が特徴的な美人が出向先、地上75部隊の部隊長であるカンナ・セツト三佐。

その隣でオレンジジュースを飲んでいる綺麗な銀髪の少女が出向先の相棒であるトレニア・サンク一尉。

ちなみにこの正しく小さな少女であるトレニア一尉は十一歳でランクはA+。しかし模擬戦でランクSの俊也を真正面から下した猛者だ。

「これは……あああの悪夢の後ですね」

「そうだね。二人とも良い顔してる」

ボロボロになったオリヴィアと同じくボロボロになっている少女が笑いながら抱き合っている。

ピンク色の髪にまだ幼い顔。将来間違いなく美人になると確信できる可愛い女の子だ。いや、実は少女ではないのだが。

このピンクの髪の女性の名はキャロ・ル・ルシエ。階級は少将。ミッドの抑止力と言われるミッドの最高戦力。『怪獣総進撃』『怪獣大戦争』などと呼ばれる色々ぶっ飛んだ魔導士だ。

ちなみにこの画像はオリヴィアとキャロが本気の模擬戦をして無人島を一つ海に沈めた後のものだ。

「この二人の模擬戦中継されましたよね」

「うん、下手な映画より迫力あったよね。サイヤ人と怪獣軍団の戦いだもん」

感慨深げに画像を見るが二人がベッドを抜け出した理由はこれではない。

いや、画像データを見る事が目的なのだがミッドで撮ったものではなく地球で撮ったものを見るために抜け出したのだ。

「……アリサ」

映し出された画像には勝気そうな金髪の少女と苦笑した俊也が映っていた。

アリサ・バニングス。掛けがえのない親友。友情だとか恋愛感情だとかを通り越して肉親にも近い感情を持っていた。親友にして恩人。失ってしまった大切な大切な人。

「俊也……」

「……ありがとうリニス」

顔が強張っていくのが分かったがリニスが手を握ってくれたので少し落ち着いた。

「……零」

心が乱され、逃げるように次の画像を開く。

そこには俊也に抱っこされ笑っている愛しい姪。

「兄ちゃん……」

優しい笑みを浮かべている兄、恭也。

「忍義姉さん……」

兄嫁である月村忍。兄と同じように優しい笑みを浮かべている。
……そして。

「……すずか義姉さん」

紫がかった長く艶やかな黒髪には随分と前に誕生日プレゼントとして贈ったヘアバンドをしている。

抜群のプロポーションを誇る姉の親友にして兄嫁の妹にして夜の一族の盟約を交わし生涯の友となった特別な人。

孤独になるはずだった幼少期。この人が常にかまってくれていたから孤独に泣かずに捻くれずに育ったと思う。

「紫がかった長い黒髪、大きな瞳。すずかの特徴に一致します」

「けどはやては同じ年と言った。はやてと同じ年と言ふ事は俺と同じ年という事。学校に月村姓はいなかった。同姓同名とも考えられるけど、月村と言ふ名字から考えるとその線も無いと思っ正しい。月村は普通の家系じゃないから」

「すずかは美由希と同じ年。この時代では高校生です。はやてが自分と同じ年と言ふには無理があります」

「……わからないな。姉ちゃんとすずか義姉さんは図書館によく行っていたからはち合わせる事はわかる。でも。年齢がどうしても合わない」

「確認するために接触するのは危険すぎますし……」

「傍観……するしかないのかな？ なんだらう、何か大事な事を見落としている……そんな気がする」

二人の出した結論は分からないというものだ。

サーチャーを飛ばすにしても確実にユーノに気づかれる。

「どうしたものか…… あっ帰ってきましたね」

玄関からドアを開ける音が聞こえた。

案の定シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人が帰宅しリビングに入ってきた。

「おかえり。ご飯温めようか？」

「それともお風呂にしますか？」

詮索しない事に決めている二人は何もない風に語りかける。

が、騎士達四人の表情がいつもと違っている事に気が付き首をかしげる。

「どろした……おっと！」

突然ヴィータが俊也に抱きついてきた。胸に顔を埋めているため表情は分からない。

「あらあら……いつになく積極的ですね」

リニスが笑う。

ヴィータはあのお祝いの日以来俊也を意識するようになった。

一緒に風呂に入るのも恥ずかしがり行動の一つ一つが初心な乙女という風になりとても微笑ましい限りだった。

俊也は気が付いていないが人生経験豊富なリニスはヴィータの恋心に気が付いていた。そのためこの抱きつくという行為にテンションを上げた。いつになっても女は恋の話が好物なのだ。

「俊也、リニス……お前らはあたし達の、はやての味方だよな？」

絞り出すようなヴィータの声にさらに首をかしげる。

「今さら何言ってるんだよ。俺達はみんなの味方だよ」

ヴィータの頭を撫でながら幼子に言い聞かせるような優しい声で俊也は嘘いつわりのない本心を言う。

「……すまないな、戯言だ。忘れてくれ」

シグナムはそう言い束ねていた髪をほどき床に座った。どうやらひどく疲れているようだ。

「俊也君、リニス……高町なのはって名前に聞き覚えあるかしら？」
シヤマルの問い。緊張した騎士の面々。
対する二人は今度は別の方向に首をかしげた。

「聞き覚えは無いけど。家族になのはって名前はいないし。高町の親戚に子供はいないし」

「……そうですか。では次です、アルフと言う名前は？」

「いえ、聞き覚えはありませんね」

「最後です。フェイト、フェイトという名前は？」

シヤマルの顔は真剣そのもの。シグナムも同じだ。狼形態で表情が読みにくいザフィーラも顔が見えないヴィータも同じだろう。

「人物名ですか？ 私達の携わっているプロジェクト名はフェイトですけど、人物名なら知らないですね」

「俺もリニスと同じだよ。……どうしたの皆？」

シグナム達は驚愕の表情を浮かべている。

生唾を飲み込んだのはヴィータだ。抱き合っている俊也にはわかった。

しかし、騎士達の質問の意図も驚愕の訳もわからない。

「……俊也、リニス。私達はお前達を信じている。ただ……もし、もしもだが……。いや、いい。忘れてくれ」

どこか居心地の悪い空気の中俊也はヴィータの頭を撫で続けた。

新たな疑問（後書き）

俊也世界最強の魔導士はキヤロ。

動き出す管理局（前書き）

今更ながらデバイスに写真撮影機能と動画撮影機能はあるのだろうか……。

動き出す管理局

次元航行艦アースラのミーティングルーム。

ここに集まった者は皆険しい顔をして映像を眺めていた。

視点はレイジングハート。機転を利かせた彼女は襲われてからアースラに保護されるまでの間を映像に収めていたのだ。

「……分からないな」

黒髪の小柄な少年、クロノ・ハラウンは顎に手をあて考え込む。場面は丁度ヴィータがなのには向かってギガントシユラクを叩き込もうとしている所だ。結局寸止めと言う器用なまねをして当たる事はなかったのだが。

「ユーノ、どう思う？ 君ならあの攻撃防げたか？」

「……難しいと思う。時間をかけて障壁を練れば可能性はあるかもしれない、ほんの少しだけど。でも、とっさに防ごうとするなら無理だと思う」

「僕も同意見だ。あれは僕だって防げない」

場面が切り替わる。

なのはの胸から生えていた腕は既に消え失せ、ユーノのどうしたものかという困惑した表情もしつかりと映っている。

遠くでは増援で現れた剣型のデバイスを持つ騎士とおそらく使い魔であろう犬耳の男がフェイトとアルフと激しい攻防を繰り返している。

そして先ほどなのはを襲った鉄槌の騎士と名乗る少女、即ちヴィータがユーノの前に降り立つ。

『くっ……!』

なのはを庇うように前に立っているためユーノの顔は見えないが、おそらくこの危機的状況に強張っているだろうことが想像できる。しかし、ヴィータの行動は予想外のものだった。

『そう身構えるなよ。あたしに攻撃の意思はねえよ』
『信じるとても?』

『そりゃあそうだな。別に信じてもらおうなんて思っちゃいねえ。だから今から言う言葉を信じなくてもいい』

画面に映るヴィータは小さく笑う。

『いいか、安静にしていれば一週間もしないうちに全快する。それまで魔法行使はよせ。バリアジャケットを展開するのも駄目だ。なるべくリンカーコアを刺激しないように安静にしてる。それから、激しい運動もあまりお勧めしない。リンカーコアも内蔵の一部だ。臓器に負担をかける事は止めた方がいい。それから煙草と酒も……いや、これはガキには関係ねえな』
『え? 君は何を言っているんだ!?!』

驚くのも無理は無い。ヴィータの口から語られるのはなのはを氣遣ったものだ。一日でも早く回復できるような確にアドバイスを言う。そのアドバイスを襲った張本人が言うものだから訳がわからない。

『うるせえ黙って聞いてる。レイ八、お前の御主人は大事な。軽いショック症状はあるかもしれないけどな。気絶したのは恐怖からだろうが……まあ漏らさなかつただけ優秀だな』

【……意図が分かりかねます】

『あたしだつて現状把握できていないんだからしょうがな……！
ちっ！』

ヴィータは急に表情を変え先ほど放つた鉄球を取り出す。

それに身構え覚悟を決めるユーノだがその鉄球はユーノにも向かわず、フェイトにもアルフにも向かわずに真っ直ぐにシグナムに向かい飛んで行った。

『え？』

『くっ……！ どういうつもりだ！？』

フェイトは呆気にとられた顔でヴィータとシグナムを見比べる。

九死に一生を得たのはフェイトだ。

シグナムの必殺技ともいえる紫電一閃でバルディッシュを砕かた。次のシグナムの攻撃で勝負が決まる、そして剣が降り下されようとしている正にその時ヴィータの誘導弾がシグナムの攻撃からフェイトを救つたのだ。

『お前……何故管理局の味方をする！』

怒気を孕んだ声が映像から響く。

『うっせえぞバトルおっぱいが！ いいか、その金髪の名前はフェイト・テストアロッサ。アリシアの妹だそうだ！』

ヴィータの声でシグナムが動揺している事がわかる。映像には映っていないがザフィーラも同様だ。

『……どういう事だ？』

『知るか！ こっちか説明してほしいくらいだよ！』

シグナムは追撃を止める。

『……潮時だな。引くぞ。貴様フェイトと言ったか……金髪、赤い瞳……確かにあいつの言っていた特徴に符合する。そうか……妹がいたのか』

シグナムが考え込むような顔をしてから数秒もせずに封鎖結界が解かれる。

『じゃあな。最後に本当に俊也を知らないんだな？』

ユーノは無言で首を横に振る。

ヴィータはユーノの返答を確認すると飛び立って行った。そこで映像は途切れている。

「さて、本当に分からないわね」

難しい顔で考え込んでいるのはアースラの艦長であるリンディ・ハラウン提督。彼女もこの映像の不可解さ、正確には敵の不可解さに悩む。

敵の正体は見当がつく。彼女が夫を失った事件の元凶である闇の書。結界が解かれたときに確認できた映像で書は確認できている。

ならば敵対した者たちは闇の書の騎士、ヴォルケンリッターであると見て間違いないだろう。しかし、管理局がつかんでいる情報で

は騎士達は感情が乏しく、命令を着々とこなす人形のようにであると記されている。

しかしどうだろうか？ 実際の騎士達はどうみても感情豊かだ。

「リニスやアリシアの事も知ってるし……訳がわかんないよ……」

アルフの言う事はもっともだ。

リニスとはプレシア・テストロツサの使い魔。その存在を知るのはフェイトとアルフ、虚数空間に落ちたプレシア、そして事件に関わったなのは、ユーノとアースラクルーしか知らないはずだ。

極めつけはアリシア。彼女の存在はフェイトとアルフすら知らなかった。それをヴォルケンリッターが知っているはずが無いのだ。

「私は妹と名乗った。でも、本当の意味で妹じゃない。正しくはクローンだから……。でも、あのハンマーの子も剣の女の人も私が妹だと言ったら納得した。……これはおかしいとおもう」

フェイトの言う事も正しい。

本来アリシアに妹はいない。フェイトは違法技術によって生み出された人造魔導士、クローンだ。その事実を知る者は限られているが……。

騎士達の言葉からアリシアとリニスを知っていると仮定する。ならば妹など存在しない事も当然知っているはずなのだ。

「なのはを気遣う言葉の意味も分からないな。あの赤い騎士、殺そうと思えば殺せたはず。でも表情は辛そうに見えるんだが……。それに明らかにフェイトの危機を救っている。理由は……多分、アリシアの妹だと聞いたからだろう」

騎士達にしても不本意な命令だったという事だろうか？

何故アリシアの妹を庇う必要があるのか？　アリシアとの関係は？

「一番分らないのは？高町俊也　ね。こればかりはなのはさんが起きてから聞くしかないか……」

闇の書はリンディにとっても因縁のあるロストログア。なるべく迅速に事を片づけたい。……被害を大きくしないために。

「……人手が足りないわね」

嘆いてもしょうが無い。魔導士不足は解決しない悩みだ。

もし人手が足りていたら被害を出さずに収束できるかもしれない。この騎士達は今までとは違うようでこちらを気遣っている。

騎士達その気になっていればなのはあのまま潰されて死んでいただろうし、フェイトだってあの剣に切り裂かれていたに違い無い。そしてユーノもまた同様に無事ではすまなかっただろう。

「……無いものはしょうがないか。一応増援の申請はしてみましよう」

せめて私と同じ思いをする人が出ないように尽力しよう。リンディのできる精いっぱいだった。

「追跡も失敗しちゃったし……」

「気を落とすなエイミィ。君はよくやったさ」

しょんぼりと肩を落としているのはエイミィリ・リミエッタ。アースラのクルーにしてクロノ執務官の補佐官を務めている。

「でもでも、なんであのちびっ子はクロノ君の事ちゃん付けで呼ん

「だんだろっね？」

「……僕に聞くなよ」

クロノのため息がやけに響く。

ヴォルケンリッターとの対峙、闇の書を巡り管理局が本格的に動き出した。

動き出す管理局（後書き）

当然騎士達はクロノ♀女だと思っています。

セッターマシンプ(前書き)

やっとここを山場の一歩手前まで来ました。

セットアップ

あれから騎士達は妙によそよそしい。

嫌悪などの感情は感じられないが確実に避けられている。いや、どう接して良いのかわからないというのが正しいようだが。

ボロボロになって帰ってくる事が多くなった。何かしら荒事をしている事は間違いないだろう。

深くは詮索しないが……心配である事は変わりはない。

はやては、ちょっと危うい。

騎士達と触れ合う時間が減ったため俊也とリニスに甘えるようになった。それはいい。

しかし、ちよつと度が過ぎているように感じる。

食事も風呂に入るのも一緒、寝るのも三人で。

最初は姉として振舞っていたはやてだが今の姿はどうか……。俊也のついて回るその姿は妹……。いや、まるで親鳥の背を必死に追う雛鳥のようで……。

はやての件も、騎士達の件も重要だが俊也とリニスはとある危機に頭を抱えていた。

「……どうしよう」

「……どうでしょう」

【……どうすればいいのでしょうか】

はやてから間借りしている部屋で緊急会議だ。

「どう誤魔化せば……」

【リニスは猫形態になればいいのでは】

「いや、姿を隠すのははやてが不審がるでしょう。私と俊也を紹介するのを楽しみにしているみたいですし」

「という事は必然的に俺のピーストモードも却下か」

悩む。悩みに悩むが状況はどう考えても詰みだった。

【危険は伴いますが外出するのは】

「それも却下だよレイハ。シグナム達がいらないのにここで俺達も出席しなかつたらはやてが悲しむ」

キッチンでははやてが上機嫌で今夜の仕込みをしている最中だろ
う。

「避けられない……か」

「覚悟を決めるべきです。それで疑問も解けます」

二人はため息を吐く。

今日は八神家に訪問者がある。

はやてが上機嫌なのはそのためだ。なんせ友達を家に招くのは初めての経験なのだから。

今夜、月村すずかが遊びに来る。

時間ももうない。夜も更け始めている。すずかがやってくるまで
もう時間はない。

「さて、吉が出るか凶が出るか……。すずか義姉さんなのか……。それとも」

【マスター！】

レイハが反応する。

俊也とりニスも機敏にそれを感じ取った。

「誰だ？ 魔力を垂れ流して……」

感じ取ったのは魔力反応。

あからさまなそれは挑発とも受け取れる。ここは管理外世界、魔力反応はありえない。

「厄介事ですか……この時期に。最悪は次元犯罪者。良くて管理局員ですけど……」

【確認しますか？】

「……見過ごせないか。俺に覚えは無いから俺とユーノが来る事はない。うん、確かめてみよう」

方針を決定した三人は頭を切り替える。幼いながら執務官としての俊也がそこにはいた。

部屋を出、鍋の準備をしているはやての元へ。

「はやて、少し家を出てくる」

「ほえ？」

俊也の言葉に一瞬呆ける。

「俊也君、なんか理由があって外出できんのやなかったの？」

おたまを持ったまま首をかしげるはやて。その仕草がいちいち可愛らしい。

俊也は保護されてから一度も家から出ていない。故にはやての疑問はもつともだ。

「……うん、でもすごく大事な用事なんだ」

「もうちょいでするかちゃんが遊びに来るんやけど」

「それまでには帰るよ。絶対」

ふつと息を吐き苦笑するはやて。

「そうか。うん、分かった。気をつけるんやで？ リニス、レイハ、ちゃんと危なくないように俊也君を見とくんやで？」

そのはやての優しく心配する言葉に頷くと二人と一機は家を出て行った。

「来たか」

八神家から数分もしない公園にその魔力を垂れ流した者が立っていた。

「怪しさ大爆発ですね」

【ここまであからさまな不審者はいつそ清々しいですね】

そこに立っていたのは仮面を付けた男。どこからどうみても不審者だ。

「ここは管理外世界だ。次元漂流者ではないな？ 目的はなんだ？」
「ほう、それはお前も全く同じではないのか？」

仮面の男が笑う。

それには全く反論できない。身分を証明できないという点で言えばそれは俊也もリニスも変わりがない。

「まあいい。本題はそんなことではない。闇の書の守護騎士、貴様らの家族で相違ないな？」

男の意図が分からない。

いや、何故ヴォルケンリッターの事を知っている？ 俊也とリニスの事を知っている？

(まさか……監視されていた!?)

その一つの可能性に肝が冷える。
いつから？ いつから見られていた？

突然現れた男が一筋縄ではいかない事を悟った。

すぐに確認して帰るつもりだったが……時間がかかるかも知れない。

「そう警戒するな。目的は同じだ、敵ではないさ。さて、そのヴォルケンリッターだが今管理局と交戦中だ」

「……なに？」

交戦中？ 管理局と？ 何故？

「分からないと言った顔だな。しかし、残念ながら事実なのだ。信用ならないか？ これがただの戯言ならそれでいいが真実ならどうする？ 状況はヴォルケンリッターに不利だ。このままいけば捕まるぞ？」

「信じてても？」

「信じてても信じなくてもかまわんさ。だが、もし彼らが管理局に捕まったらどうなる？ あの悪名高き闇の書の騎士達だ。まず間違はなく捕縛されよくて終身、最悪プログラムの抹消だ」

「悪名高い？」

悪名高い闇の書。闇の書にいわくがあるなんて初耳だった。

「ん？ なんだその反応は？ まさか知らないとは言わないだろう。まさか別の世界から来たから知らないともいうまいな？」

しかし俊也とリニスは本当に知らない。

今、現在進行中念話で作戦会議中の三人だが会議は紛糾している。

(この際いわくは置いておこう。ただこの目の前の仮面を信じていいのか……)

(怪しさ抜群ですが私達を畏にけるメリットはないはずです)

(マスター、リニス、確かに怪しさ無限大ですが、万が一話が本当なら不味い事態です)

(はやてから家族を取り上げるわけにはいかない……)

「……決まったようだな。案内しよう」

信用はできないが見逃せない。何故このタイミングで接触してきたのかも分からない。

「……なにが目的なんだ？」

「そう睨むな。敵ではないと言っただろう。お前達はただ家族を守るために管理局の邪魔をすればいい」

「信用は……うわっ」

「素晴らしい俊也を担ぎあげる仮面の男。」

「暴れるなよ。使い魔、先導する。ついてこい」

「……俊也に何かしたらくびり殺しますから肝に銘じておきなさい」
「おお怖い。じゃあいくぞ」

仮面の男は大きく跳躍し駆ける。中々のスピードに内心驚くがリ
ニスは同等のスピードで駆ける。

「ほう早いな」

「黙りなさい。俊也、大丈夫ですか？」

「ああ、中々の乗り心地だよ」

男の目的は分からない。敵ではないと言ったが味方でもないだろ
う。

(うーん……時間をかけたらはやてが心配する……。いや、それに
しても……)

俊也は肩に担ぎあげられている。そのため比較的男の顔に近い。
だから、妙に香る。

(香水？ シャンプー？ それにしても……良い香り……)

最高に乗り心地の悪い道中そんな事を思っていた。

「封鎖結界……！」

【何かしら起きている事は事実のようですね】

「嘘は言っていないと言っただろう」

目の前に広がるのは封鎖結界。しかも広域。単身で作り上げるには少々手間がかかる。

管理局ないし、魔法関係者が複数いることは確実らしい。

「さて、簡単な話だ。この封鎖結界をぶち壊し中で戦っている騎士達を助ければいい」

「……何故ここまでするんだ？ お前のメリットはどこにある？」

「ふん、ここでヴォルケンリッターが捕まれば都合が悪い。実にシンプルだろう？ 案内はした、家族を守ってやるといい」

仮面の男はそう最後に言い残し転移魔法で消えた。

「……一体なんだったんでしょっか」

「分からない。でも、魔法陣は円形。少なくともベルカの魔導士じゃない」

結界の中の様子は分からない。中にシグナム達がいるのかも分からない。けれども少しでも可能性があるのなら放ってはおけない。

【結界はどうしましょう】

「ぶち壊そう。……最悪、はやての所には帰れないな」

悲しい事実だが結界をぶち壊すのだ、管理局に姿が見られない訳がない。

管理局と交戦しているのが事実ならその敵を逃がす事になる。犯

罪だ。

しかし、俊也達が捕まるうとも最悪この時代の自分達と顔を合わせる事になるうともはやてから家族を引き離す事はできない。

「……こんな事はなかったはずだけだな。ここまで大規模な結界を張られたらさすがに俺もユーノも気づくと思うんだけど」

リニスの手を握る。もう片方の手にはレイハ。

（闇の書の事も分からない。……詳しく聞いておくべきだった）

今さら悔やんでも後の祭り。今はこの事態を乗り切る事を考える。

（別の世界から来たから分からない……か）

あの仮面の男に言われた言葉がリフレインする。

（確かに別の世界から来た……別の世界？）

ここにきてふと思いつく。

俊也達が体験しているのはタイムトラベル。

にわかには信じがたいがこうして体験しているのだから事実だ。

この時代の自分にはち合わせないように動いてきた。その方針は間違っていないと思う。

だがそれ以前に根本的に認識が間違っていたらどうだろう？

漫画や映画などで見られる時間旅行は二つに分けられる。

過去に干渉したら未来が変化するもの。この考えが一般的だろう。漫画などもそういう設定のものが大半だと思う。

ネコ型ロボットのお話や過去に飛ぶ車の映画もこの類だ。
しかし、それだけではない。

例えば国民的人気な七つの球を巡る物語。あのお話のタイムトラベルは過去に干渉しても元いた未来は変わらない。

そう、未来が荒廃する原因を取り除いてもあの男性下着の名を冠する青年の未来は何の変化もなかった。彼が干渉した過去は既に並行世界として彼の未来とかけ離れてしまっていた。

(並行……世界)

ドクンと大きく心臓が鼓動した。

(並行世界、パラレルワールドIF世界。色んな漫画を読んだ、アニメも見てるしゲームもした。それを題材にするものも数多くあった。まさか……まさか……)

「顔色が悪いですよ？　どうかしました？」

(年齢の合わないすずか義姉さん、感知きるはずのこの大規模結界、考えれば色々不審なところがある……！)

「俊也！　俊也！　どうしたんですか！？」

リニスの声で我に返りる。

考えるのは後だ。今はこの結界をぶち破るのを優先させないといけない。

「アレで壊します。詠唱を頼みますね」

「分かったよ。あれの直撃を受けたら壊れるだろうしね」

そうして俊也は考え付いた一つの可能性を頭の隅に追いやりリリスに合わせて詠唱する。

「アルカス・クルタス・エイギアス 煌めきたる天神よ 今導きのもと降り来たれ」

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

二人の魔力がうねる。

天候操作の儀式魔法。その大規模魔法は威力も大きい。

「撃つは雷 響くは轟雷 アルカス・クルタス・エイギアス！」

集められた雷雲から結界目がけて雷が落ちる。

サンダーフォールという名の儀式魔法。

天候を操り本物の雷を落とす魔法だ。

自然の脅威、雷の力を甘く見てはいけない。

魔導士が放つ砲撃など比較にならないとんでもない破壊力を秘めている。

故に、いかな強度を誇る結界だろうとその大半は耐えられず、碎け散る。

目の前の結界も例外ではなく。

轟音とともに碎け雲散する結界。

そして俊也は見た結界の中にいた者たちを。

(シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！　そして……)
息をのむ。隣でリニスが硬直しているのも分かる。それほどまで
の驚愕に襲われている。

(何故今まで考え付かなかった！　くっそ……！)

二人が釘付けになっているのは一人の少女。

煌めく長い金髪、赤い瞳、幼いがその姿はあまりのも似ていたの
だ。二人の、大切な少女に。

「……なるほど。リニス、どうやらロストロギアを過少評価してた
みたいだよ」

「な……ん」

リニスに声は届いていないようだ。

だが、目的は変わらない。

先ほど考え至った事が真実であるとしても関係ない。
ここに来た目的はなんだ？　……家族を救うためだ。

「レイハ」

【驚いてはいます。しかし、問題ありません】

「うん……いくよ」

愛機の言葉に笑顔で答え声高らかに言い放つ。

「我使命を受けしものなり」

動揺しているのは結界内にいた者たちも同じ。

「契約のもとその力を解き放て」

第三者の介入に驚き、戦闘は中止している。

「風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に」

我に戻ったりニスは己の目的を思い出す。しかし、どうしてもあの愛娘に似た少女が気になってしまう。

「この手に魔法を レイジングハート、セットアップ！」

吹き荒れる桜色の魔力。

ヴォルケンリッターは純粹に助けに来てくれた事を驚き。

「嘘……」

「そんなことつて……」

「レイジングハート？ 何故……！」

「くっどうなっているんだ！？」

「あり得ない……！」

【……理解の範疇を超えています】

管理局側は突然のありえない来訪者に完全に思考をかき乱され打ちのめされていた。

セッターアツプ(後書き)

出会ってそうそうにガチバトルに突入ですよ。

家族のために（前書き）

俊也のバリアジャケットは劇場版仕様。

家族のために

信じられないものを見ている。

境界を壊された事に驚いた。何者かの攻撃に警戒した。

そして見たのだ、この攻撃を行った第三者を。

「そん……な」

呟いたのはフェイトだ。

新たにカートリッジシステムを搭載した愛機、バルディッシュ・アサルトを持つ手が震える。

新たな敵は二人。そのうち一人を見て眼を見開く。

「リ……ニス」

アルフもお化けを見たような顔で硬直している。

そこにはかつての教育係、もう一人の母とも呼べる人が立っていたから。

「え？ え？ どうして？」

対するなのはは混乱の極みにあった。

信じられないものを見たのはなのはも同じだ。

同じく大混乱の極みにあるのはユーノとクロノも同じ。

フェイトとアルフと違い、彼女らが釘付けになっている女の子…

…？ 男の子…？

いや、性別はこの際どうでもいい。問題はその容姿とデバイス。

詠唱の声は聞こえた。結界内にいた者とモニターしていたアースラのクルーも聞いていた。

だからこそ信じられない。あの子供はデバイスの名前を何と言った？ 詠唱の言葉をどこかで聞いた事はないか？

戦場に乱入した二人はふわりと飛びあがる。

戦場はまだ硬直したままだ。

「おい…お前、何で？」

驚いているのはシグナム達も同じ。上手く言葉が発せないようだ。

<シグナム、ここは俺とリニスを受け持つ。騎士達ははやての所へ戻って>

<…… 援護は感謝する。しかし、お前達を残して撤退できるわけないだろう！？>

<大丈夫だよ、俺とリニスはこうみえて強い。特にリニスは頭一つ抜けてる。…俺ははやてが好きだ、みんないるあの家が好き。…帰らないつもりはないから>

<しかし…！>

<信用してくれ。シグナム達の深い事情は知らない。けど、管理局に捕まるわけにはいかないだろう>

<ぐっ……!>

<もう一度言う。信用してくれ……それでももし俺とリニスが明日まで戻らないようならはやてに伝えてほしい……>

しばしの沈黙。この戦場の誰もが動けない。

フェイトとアルフはまだ我に返っていないし、騎士達も俊也と念話をしているシグナムを除きまだ混乱している。

そしてなのはとクロノとユーノの三人は俊也の事を食い入るよう見つめていた。

(レイジングハート……形状は似ているけど細部は違う。でも、二機あるはずがない！なのはに僕があげた一機だけのはずなのに何故……)

(隣の女は使い魔だろうか？ここにきて守護騎士の仲間……協力者がいたというのか。それにしてもあの子供……)

(ふえ……なんでもあの子もレイジングハートを持つてるの!? それに……それに……)

白を基調としたバリアジャケット。どこかの制服を連想させるそれは、なのはの通う私立聖祥大学付属小学校の男子の制服によく似ていた。

栗色の髪の毛、顔立ち、なのはによく似ていた。

双子と言ったら誰もが信用する。それほどまでに二人はそっくりだった。

だからこそその大混乱。もっとも、俊也は目の前によく似る少女を見て先ほど至った推測が間違いないものだと悟る。

「……引くぞつ！ 俊也、リニス……ご武運を！」

悔しさにゆがむシグナムに笑顔で頷き、離脱していくヴォルケンリッターを見送る。

シグナムは俊也の提案を受け入れる事にした。

反発はあった。特にヴィータは最後まで反対したが結局は俊也に説き伏せられた。

「必ず帰ってこい。主も、俺達も待っている」

「また一緒にお風呂に入りましょうね……」

「俊也、リニス……帰ってこなかったらぶっ飛ばすからな。だから、絶対に帰ってこいよ……」

騎士達が全員離れた頃、俊也とリニスは結界を張りなおす。無論管理局の足止めの為。

「まさか、管理局と対立する日がくるとは……」

「俊也、状況は飲み込めませんが私は貴方に従います」

呆けている間に騎士達を取り逃がすという致命的な失敗を犯した管理局側。

苦虫を噛み潰したような顔のクロノは俊也達と二十メートルほど距離を空けて問う。

「……僕は時空管理局の執務官、クロノ・ハラオウン。……何が目的で騎士達を逃がしたのかは知らないが、抵抗しないなら君達には弁護の機会が与えられる」

クロノという言葉に二人が反応する。

リニスは必死に現状把握をしようと頭をフル回転させ、俊也もまたこの場を乗り切りはやての元に帰る事を考える。どう乗り切るか……。

「クロノさん……残念ながら無抵抗と言っわけにはいかな」
「あ、あの！」

会話に割り込んできたのはなのはだ。
必死で声を上げ、どこか緊張した面持ちで俊也に話しかける。

「わ、私は高町なのは！ あ、あなたは……！？」

（高町なのは……確か、シャマルが知っているかと聞いてきた事があつたような。……なるほど、この子が、”俺”か）

「執務官の会話に割り込むのは感心しないよ。ほら、クロノさんも困ってる」

「にゃ！？」「ごめんクロノ君……」

しょんぼりとする姿は中々可愛らしい。自画自賛と言っわけではないが。

「こんな時はどう挨拶するのが正解だろうね。初めまして、もう一人のボク、とでも言おうか。うん、母さんにそっくりだ。将来は母さんに似て美人になるね」

「え？ お母さん？ え？」

＜俊也……よもやここは私達の過去ではないのですか？＞
＜さすがリニス。多分そうだと思う。あの人がこの世界のクロノさ

んで、この俺にソックリなのがこの世界の俺だろう。レイ八持つてるし>

険しい顔のリニス。俊也と同じ結論に至り心の中で愕然としている。

「俺の名前は高町俊也。初めまして、なのは」

俊也の自己紹介で管理局側に動揺が走る。

今まで調べても調べても分からなかった謎の人物高町俊也が突如目の前に現れたからだ。

クロノ達からしたら先ほどからの急展開についていけないというのが現状だろう。

<敵はクロノさん、なのは、ユーノ、それに犬耳のお姉さんに……

この世界のアリシア。どうみる？>

<なのは……はこの時期の俊也の実力と〓と仮定します。これは脅威になり得ません>

<この時期の俺はシールド、砲撃、誘導弾くらいしかできなかつたから。戦力として見なくていいだろうね>

<未知数はアリシアと使い魔です。アリシアはフルバックでしたが

……この世界のあの子はデバイスの形状からおそらく前衛。使い魔は……徒手空拳ですから同じく前衛でしょう>

<そしてクロノさん。俺はクロノさんに一度も勝った事が無い……

エターナルコフィンを撃たれたらこちらの負けだ>

<前衛、前衛、独立汎用、後衛、補助。中々にやりにくい相手です

……でも、一番やっかいな人は変わりないですね>

この場で一番の脅威を再確認し頷き合う。

「でも、捕まるわけにはいかないんだ。抵抗させてもらおうクロノさん」

そう言いレイハを振るう。俊也の足もとに魔法陣が広がり、黒いマントが具現化される。風になびくそのマントはフェイトのマントにそっくりだった。

「どっ？ このマントかっこいいでしょ？」

「……なら、僕は仕事をしないとイケないか」

背中のマントを見ながら言う俊也。どこか気の抜けた俊也と対照的にクロノは臨戦態勢をとる。

そのクロノ動きを見て、まだ若干混乱しながらも他の皆も身構える。

「リニス」

「はい」

左手に小さな魔力球を造る俊也。

(……誘導弾？ でも数が一つでは……)

それを誘導弾と判断したクロノ。しかし、その判断は大きな間違いだっただ。

それをばいっと後ろに投げ捨てる。

その不可解な行動に眉根を寄せるクロノだが刹那に己の迂闊さを呪った。

「フラッシュファイア ブレイク！」

突如としてその魔力球が砕け散り眼が眩むほどの閃光が結界内を包む。

真つ白な世界。皆視界を奪われる。そう、背を向けている俊也とリニスの二人以外の全員が。

「レイハ！ リニス！ いくぞ、チームライトニングスターズ、アリシアがいなくとも勝利をもぎ取って見せる！」

「もちろんです俊也！」

【了解ですマスター】

完全に頭を切り替える。

管理局最強と名高い使い魔と管理局の白い魔獣と呼ばれる執務官は久しく離れていた戦場に降り立った。

「レイハ！」

【了解です。ソニックムーブ】

「ソニックムーブ！」

状況は圧倒的不利。

しかし、優しい彼女の待つ家に帰るため、桜色と金色の閃光は戦場を駆ける。

家族のために（後書き）

先手必勝太陽拳！

激突（前書き）

クロノの扱いが酷い小説を結構見ますけど作者はクロノ好きです。

激突

俊也は言う、師が優秀だったからこそ自分は魔導士として大成できた。

技術者としてではなく魔導士として俊也を鍛えた人物は大きく四人。

クロノ・ハラOWN執務官、ティアナ・ランスター提督、オリヴィア姫殿下、ユーノスクライア司書長の四人。

この大物四人の中で最も戦にくいのは誰か？

氷結能力を持つデバイス、デュランダルを持ちバリバリの一線で活躍する執務官であるクロノ。

提督であるため一線は退いているが、まだまだ実力は衰えずクロノを軽くあしらうほどの強者であるティアナ。

魔導士としての活動はしていなく無限書庫の司書長兼考古学者として活躍するユーノ。

オリヴィア姫殿下は人外なので除外する。

誰と戦いたくないかという俊也とリニスはユーノと答える。

あまり華やかな能力は持っていないがユーノの力は脅威の一言だ。

結界魔導士という珍しい能力を持つユーノ。ランクは九歳時点でAと優秀だ。そして結界魔導士としてユーノより優秀な魔導士を見たことが無い。

防御という一点に関してはまさに鉄壁。Sランク同士が全力で戦っても壊れない結界を張れるなど稀有だ。

派手な能力ではないためどうしても陰に隠れてしまうが十分に最

高位の魔導士である。まあオリヴィアが全力で殴ったら結界は砕け散ったが。

全力で守りに回られたら厄介なことこの上ない。

防御を突破するのに結構な力を要するし、更にその間は敵の攻撃もさばかなければいけない。これはかなりキツイ。

故に戦いたくない、戦いにくい相手はユーノなのだ。

(俺の世界、ユーノは司書長。魔導士としての活動はしていない。だからユーノの全盛期は今！)

二人はユーノの前に降り立つ。

「……くっ！」

まだ視界がぼやけてるユーノは眼を擦りながらも身構える。立派だがここが本物の戦場で、俊也とりニスが犯罪者ならユーノの命は既に無い。

「……久しぶり、親友。相変わらず可愛い顔してるね」

「可愛さなら負けてませんよ俊也」

ユーノの顔を見て思わず顔が綻ぶ。

魔法との出会いは同時にユーノとの出会いでもある。

親友にして師匠。最初俊也の事を女の子と勘違いしていた、可愛い顔した男の子。

だが、容赦はしない。

「リングバインド！ チェーンバインド！ ストラグルバインド！」

「ライトニングバインド！ チェーンバインド！ ストラグルバイ

ンドー！」

「え？ うわわっ！ うわっ！」

まさに雁字搦め。

襲いかかるバインドの嵐になすすべもないユーノ。

「クリスタルケージ」

トドメといわんばかりに二重のクリスタルケージ。もうユーノはピクリとも動けない。

「一番の懸念はこれでクリアです」

「奇襲成功だね。……そろそろ視力が戻る頃、クロノさんにだけは十分に気をつけて……」

先手を取られたクロノ達はようやく動き出す。

数秒もしないうちにユーノがやられて焦っているようだ。

「ユーノ君！ もうっいきなり攻撃してきて……お話聞かせてもらっから！」

なのはがレイジングハートを構える。

「リニス、次の一手であの子は落ちる。できれば未知数のアリシアと使い魔をなんとかして……」

「二人がかりでクロノですね。確実にいきましょう」

作戦を確認すると俊也もレイ八を構える。

「レイ八、カノンモード」

【オーライマスター。カノンモード】

砲撃用に姿を変えるレイハ。俊也はトリガーに指をかけ同じくレイジングハートをこちらに向けるなのはと対峙する。

「デイバイン……バスター！」

「デイバイン……バスター！」

二つの桜色の光が激突する。

バスターが放たれると同時にリニスは未だ上手く動けないフェイトとアルフの元へ飛ぶ。

作戦ではすぐに俊也もリニスに追いつき、連携して二人を倒してからクロノに挑む予定だった。目くらましが効いているうちに迅速に終わらせる必要がある。時間がたてばたつほどに俊也とリニスは不利になるのだから。

しかし、思うようにいかないのが戦場の常か……。俊也はすぐに驚愕に眼を剥くこととなる。

「にやつ……くうくう互角……かな？ でもあの子もデイバインバスターなんだね」

【拮抗してます。全くの互角ですマスター】

片目を閉じ負けないように必死に魔力を込める。

自分と同じ技に驚く余裕もないようだ。

対して焦るのは俊也だ。なのはの砲撃と拮抗してしまっている。ありえない。

この時期の俊也はまだまだ魔導士としては未熟だ。もちろん術式の練りも甘いし魔力の運用も下手だ。

故にバスター拮抗する事なく俊也が圧倒するはずだった。

俊也は体は小さくなつたが能力も九歳当時に戻つたわけではない。もちろん身体能力などは九歳の子供と同じだが、培つた経験や知識が消えたわけではない。

俊也のデイバインバスターは九歳当時よりもより洗練されている。威力、発動時間、体にかかる負担の軽減、その全てがなのはのバスターより上回つてしかるべきなのだ。

しかし、結果はどうだ？ 俊也が手加減しているわけではない。管理局の花形、高町俊也執務官のバスターと全く同じである。なのにこの結果、予想外だ。想定外にもほどがある事態だった。

「馬鹿なっ！ 拮抗！？ 俺のバスターと同じ威力！？」

【全くの互角です。驚きました】

打ち合いでは決着がつかない。
互いに砲撃を止める。

「いくよっ！ アクセルシューター！」

「読み違えた……！ クロスファイア……シュート！」

次の一手はお互いに誘導弾。

（なのはを上方に修正。実力未知数。バスターが拮抗なんて笑えない冗談だ……）

なのはの誘導弾を回避しつつ近づく。おそらく近接でならこちらに分があるであろうという予想からだ。

遠距離での打ち合いでは決着はつかない。ならば近づいて叩くしかないが……そう上手くはいかないみたいだ。

「……クロノさん」

「なのは、君は下がって僕の援護をお願いする」

立ちはだかるのはクロノ執務官。

性別の違いなどあるが、クロノの実力は身にしみて知っている。
正直真正面から戦いたくない相手だ。

「さて、僕が相手になる。闇の書との関係、吐いてもらっぞ」

「……捕まる気はないと言ったはずですよ」

クロスレンジで対峙してから確認できた。これは嬉しい誤算だ。

(デュランダルじゃ……ない！)

デバイスが違ったのだ。俊也の師であるクロノとデバイスが違う。
ならば、少しは勝機が見えてくる。

(出し惜しみはできない……！)

「レイハ、フルドライブ。……エクセリオン！」

【オーライ。エクセリオン】

クロノと対峙するや否やすぐさまフルドライブ。

レイハは再び形状を変化させる。その姿は杖というより槍に近い。

俊也がフルパフォーマンスで戦えるエクセリオンモード。逆に言えば全力全開で挑まなければ負ける相手と言う事だ。

それに驚愕するクロノとなのは。それはレイジングハートにカー
トリッジを搭載した際に新しく加えられた機能、いわば奥の手だっ
たから。

「な、なんで!?!」

「どうして君がそれを……」

動揺する二人、致命的な隙ができた。……見逃す手は無い。

「一撃必倒！ デイバインバスター！」

練り上げた魔力を拳で打ち出す。

遠距離のバスターより威力は劣るが、それでも無視できない威力を持っている。

とつさに練り上げた為術式も甘い。故に……。

「くっ……危なかった」

「く、クロノ君……」

クロノは完璧に防いだ。想定内。だが、ここからは相手も想像していないだろう渾身の一撃を放つ。

そしてそれは見事にシールドを砕きクロノを殴り飛ばす事に成功する。

「ぐあっ……！」

「きゃっ！ クロノ君！」

俊也は真っ直ぐに拳を振りぬいた。いわゆる正拳突きというやつだ。

大地に足がついていないから本来の威力には一歩及ばないが、この正拳は俊也の近接において最高の威力を誇る体術である。

無論、ただの正拳突きではない。

「こつちの世界のクロノさん、断空という技術はご存知ですか？」

オリヴィア直伝、地獄の特訓の末に身に付けた。

「御神の才能無くとも、霸王流には本の少しだけ適性があったみたいです。ま、本当にちょっとだけですが、うん、本当に……」

苦痛に顔を歪めるクロノとクロノを心配するのは。

クロノは相手の力量を大幅に上方修正するとよるめきながらもデバイスを構えた。

「だ、大丈夫なのクロノ君？ すっごくいいの貰っちゃったみたいだけど……」

「心配ない。……もう油断しない」

クロノの眼を見て生唾を飲み込む俊也。

どうやら本気にさせてしまったらしい。

（デュランダル無しにしてもクロノさん相手にどれだけ戦えるか……）

願わくば先ほどの攻撃が程良くクロノの足を引っ張るように、と願いながらレイハを構えなおした。

激突（後書き）

砲撃でなのはさんに勝てる人はユニゾンしたはやくらいしかないな
と思うんだ。

アルフの慟哭

俊也がクロノを本気にさせ焦っているころリニスもまた焦っていた。

「リニス……会いたかった」

眼を潤ませるフェイト。

「どこにいったんだい。すっごく心配したんだからね」

同じくぐずるアルフ。

(うーん……この世界の私と勘違いしているという事でしょうね)
戦うという雰囲気ではない。リニスも涙目の女の子二人を殴り倒すほど鬼畜ではないし、愛娘と同じ顔は正直殴れない。

「アリシア……」

思わず声をかけるが、愛娘の名を口にした瞬間二人が凍った。

「リニス？ 何を言っているんだい……？ フェイトとアリシアを間違っなんて……」

「フェイト？ 誰の事を言っているのです？ その子はアリシアでしょっ」

その言葉でフェイトの顔に絶望が張り付く。

「はは……冗談にしては笑えないよ」

「……冗談？ それよりもあなたの名前を聞かせて下さい」

今度はアルフの顔に絶望が張り付く。

「は……なんだい、リニス。あたしもフェイトの事も分からないのかい？」

地の底から響くような暗い声。

アルフは拳を振るわせながら喋る。

「すみません、私はあなたの事を知りませんし、フェイトという子の事も知りません」

その言葉が決定打だった。

リニスは本当に二人の事は知らない。目の前のフェイトもこの世界のアリシアだと勘違いしている。他意は無い。しかし、アルフにはそんなリニスの事情など知った事じゃなかった。

「うわあああ！」

「……っ！」

声を張り上げ拳を振るうアルフ。

リニスはそれを何なく回避するが、突然のアルフの豹変に驚いた。

「このっ！ リニスがフェイトの事知らないわけ無いだろう！ あたしの事を知らないわけ無いだろう！ この偽物っ！ あんなに傷ついてそれでも前に進もうとしているフェイトにこんな仕打ちってないよっ！ 絶対に許さない……これ以上フェイトを悲しませるような事をするなあああっ！」

魂からの叫び。涙を流しながら拳を振るう蹴りを放つ。型も糞もあつたものじゃない滅茶苦茶なものだったが、妙な迫力にリニスは圧倒された。

フェイトを知らないトリニスに言われた。

これはアルフにとって見過ごせない。フェイトも傷ついたらろう。彼女は自分の大好きな主人に害なす者を許さない。

だが、今回は少しばかり私情も混じる。

群れからはぐれて死にかけているアルフを救つたのはフェイトだ。命の恩人でもあり同時に大好きな主。二人に主従のしがらみは無く姉妹のように育った。

姉のようで、妹のような……フェイトの為なら躊躇わず命を捨てられる。それほどまでにアルフの中でフェイトは大きな存在だ。

ではリニスとはアルフの中でどういった存在だろうか？

フェイトとアルフに魔法を教え、食事を作り、一緒に風呂に入り、寝るときは本を読んでくれて、朝は優しく起こしてくれる。

悪戯を知れば叱り、良い事をすれば笑顔で褒め、抱きつけば抱きしめ返してくれる。

リニスの食事が好きだった。綺麗な笑顔が好きだった。頭を撫でられたら安心した。抱きしめてくれたときに香る甘い匂いが好きだった。

今でこそ見た目は成人女性のアルフだが、フェイトの使い魔になった頃はまだまだ子供だった。

姉妹のようなフェイトと二人して甘えられる優しい存在。

母だ。

リニスはアルフにとって大好きなお母さんなのだ。

ある日忽然と姿を消したリニス。
プレシアは多くは語らない。納得できなかったが、それでも納得するしかなかった。

フェイトは凄く落ち込んだ。アルフは何とか慰めていたが自身も寂しかった。

心配した。心配して心配して……でも、リニスは戻ってこなかった。

だが、突然リニスは目の前に現れた。

歓喜した。とても嬉しかった。

最後に見たときと変わらない姿。

優しい瞳、薄茶色のショートカット、豊かな胸、トレードマークといってもいい帽子。そのどれもが変わらない。

成長したため身長はさほど差がなくなったが、それでも母に甘えたい衝動は抑えられない。

抱きついて胸に顔を埋めたい。抱きしめてほしい。親に甘えるのは子の特権だ。

リニスは優しい言葉をかけてくれると思っていた。だが、現実是非常だった。

「ちつくしょう！ 偽物っ！ 逃げんじやないよ！」

「くっ……落ち着いて……！」

だが、リニスは知らないと言った。

母親にお前なんて知らないと言われたのだ。

その衝撃は計り知れないだろう。

「うるさいっ！ リニスがそんな事言うもんかっ！」

故にアルフはリニスを偽物と断じた。

正解にはアルフの判断は正しい。だが、偽物と断じてもそれを認めたくない。だって、大好きな母が目の前にいるのだから。

自分でも感情がぐちゃぐちゃで訳がわからなくなっているのだから。だから、このアルフの荒れっぷりはある種の現実逃避である。

「フェイト、手伝っておくれよ。この偽物とっ捕まえるんだ。……

もしかしたら本物のリニスがどこにいるのか知っているかもしれない」

「う、うん……」

ここで戸惑うばかりだったフェイトも参戦する。

「……やりにくいですね」

先ほどからアルフの攻撃はリニスにかすりもしない。

怒りや悲しみが爆発し、出鱈目な攻撃しか繰り出さないアルフ。そんな幼稚な攻撃を避けるなどリニスにとっては容易だ。

反撃して潰す事も簡単だが、どうも攻められないでいた。

「偽物……偽物……！ フォトンランサー、ファイアッ」

フェイトの援護攻撃。

これで二対一と不利な状況に立たされた。

「フォトンランサー……直射射撃」

アルフの蹴りを避け、フォトンランサーはラウンドシールドで受け止める。

(アリシアは攻撃魔法を使えない。やはり、こっちの世界のアリシアと差異があるようですね)

「……アルフ、勝つよ!」

「おつともさ!」

バルディッシュを振りリニスに接近するフェイト。

突き出される拳、繰り出される蹴り、振り下される刃、襲いかかる魔力弾。

フェイトとアルフはすさまじいコンビネーションを見た。傍からみると圧巻の一言。息の合った攻撃の嵐はまるで演武のようで圧倒される。

しかし、そのどれもがリニスに当たらない、かすりもしない。

ここでリニスの異常さが際立つ。

(なんで当たらないんだよ!? これだけ攻撃しているのに!)

(上手い……! 全部ギリギリの所で避けられる。シールドのタイミングも完璧だ)

二人は焦る。

リニスに戦闘技術を教わった。リニスがとても優れている事は知っている。

でも、ここまで強かっただろうか? まがりなりに経験も積んだ。ある種の修羅場もくぐりぬけてきた。そう、成長しているはずなのだ、格段に。

なのにこの結果はどうだ? リニスは顔色一つ変えていない。対

する自分達はスタミナを消耗し息も徐々に上がってきている。強い。ただただその二言がフェイトとアルフの頭の中を支配する。

(使い魔はだいぶ落ち着いてきたようですね。荒さが無くなってきています。アリシア……ここまで接近戦ができるとは驚きです。…ですけど)

「まだまだ甘いですね」

「くっ……！ 離せっ！」

「アルフ！」

リニスはアルフの蹴りを受け止めた。

それだけで驚異の一言なのだがリニスはだ止まらない。

「筋はいい。ですが、喧嘩殺法には限界があります」

受け止めた刹那にアルフの足首にチェーンバインドが絡みつく。

「くっ……フォトン……」

「遅いです。フォトンランサー！」

フェイトよりも早くフォトンランサーを放つ。

それを見て驚くフェイトだが持ち前の高機動で避ける。しかし牽制に成功したりニスの次の行動はフェイトの予想外のもので、次の一手は避けられなかった。

「しっかりと受け止めなさい。いきますよっ！」

「え？ うあっ！」

チェーンバインドはアルフの足首とリニスの右手を繋いでいる。リニスはソニックムーブで距離とり、鎖の長さがそれなりに長くなったところで行動に移る。

アルフを鉄球に見たて、フェイトに向かってぶん投げたのだ。さながらモーニングスターか。鎖と同じような特性を持つチェーンバインドだからこそといえる活用方法だ。ただ拘束しかできないと思いついていたら考え付かない使用方法。鎖を魔法で作りだしていると考えられる事が出来ればこういった鞭のように使用するという応用もできる。もっとも、鎖事態に攻撃力は無いのだが。

「アルフっ！」

そしてぶん投げられたアルフはリニスの思惑通りにフェイトに受け止められる。

「はい、もう一本です」

「え？」

二人が密着している状態。こんな好機は無い。

左手から延びる新たなチェーンバインドは二人をぐるぐるに巻き身動きが取れない状態にする。

そしてアルフの足首に絡みついたままのチェーンバインドを一端解除し、新たにもう一本作り上げ同じように巻きつける。

二人は二重のチェーンバインドに縛られた。見動きは………できない。

「ふう、何とかかなりましたね」

チェーンを両手から切り離したら終了だ。勝負はついた。

雁字搦めで空中に浮かぶフェイトとアルフ。そしてそれを見小さ

く息を吐くりニス。

「くっそ……なんで、なんでなんだよ……」

「アルフ……」

とめどなく涙を流すアルフ。後ろから抱きとめている形になるため顔は見えないが、悲しみに顔を歪ませているであろう使い魔を心配する。

（それにしても……この偽リニス、強い……！）

とんでもない相手だ。フェイトは心底そう思う。

二人がかりで攻撃しても一撃も入れられず、一転攻撃に移ればあっという間に捕縛されてしまった。

どこか複雑そうな顔をしているリニスの偽物……もしかしたら本物のリニスより強いのではとフェイトは考えていた。

「さて、後は俊也の援護を。……まずは後衛を落とすのが必定ですね」

「くっ！　なのはに手を出さないで！」

友人を心配するフェイトにリニスは優しく答える。

「安心なさいなアリシア。怪我はさせません。ユーノやあなた達と同じように捕縛して……クロノも捕縛して私達は帰ります」

手のひらに魔力を集める。砲撃で落とす。仮にディバインバスターを撃つてきても、未熟であろうこの平行世界の俊也の攻撃では勝負にならない。そう当然のようにリニスは思っていた。

「帰るって……どこにだよ？ 闇の書の主の所かい？」
「優しい寂しがりやな女の子の所にですよ」

術式が完成。魔法陣が空中に描かれる。

「トライデント……スマツシャー！」

そして放たれる金色の光。

三本に枝分かれした直射砲撃。この時代の俊也のディバインバスターを大きく上回る攻撃。

その大きな脅威になる砲撃がクロノを援護しているのはに襲いかかる。

アルフの慟哭（後書き）

うちのリニスさんは鬼強いです。

手札は多数（前書き）

リニスさんの魔法の元ネタをわかる人はいるだろうか……。

手札は多数

一瞬の隙も許されない。

一番のやつかいな能力を持つのはユーノだが、次にやつかいなのは間違いなくクロノだ。

彼の戦闘スタイルは独立汎用型。ポジションでいえばオールラウンダー。苦手な距離は無い。

それは俊也も同じだがそれは当然だ。ユーノに基礎を教わったが、さらにそれを突き詰めた応用や戦闘技術はクロノから学んだのだから。

現在戦っているクロノは厳密には師匠ではないのだが、戦闘スタイルは全く同じだった。男女の違いはあるが背丈や体格などはほぼ同じなのでそのまま師匠と戦っていると行って間違いではないだろう。

先ほどのヴォルケンリッターとの戦闘による消耗、俊也の入れた一撃が効いているのか、万全の状態とは言いにくいクロノだが、それでも強敵なのは変わりがない。

体格ではクロノに負けている俊也。接近戦ではやはり体格差は大きい。互いにデバイスを用いた棒術や拳や蹴りで戦っている。が、子供の姿ではリーチも短いし力もない。

フルドライブ状態で何とか互角にまで持っていきけているが、長時間フルドライブを維持するのは体にかかる負担が大きい。時間をかけるほど勝機は失せていく。

クロノと戦うときは常に神経を研ぎ澄まさなければいけない。

戦闘技術もさることながら恐ろしくバインドの扱い方が上手いのだ。

クロノが得意とするディレイバインドは空間設置型、設置された空間に侵入したら発動する仕組みだ。不可視なので不用意に動き回

るとすぐに捕まってしまう。

瞬間的な機動力はソニックムーブを習得している俊也の方が上だろう。しかし、小回りが利かず接近戦で使用するには無理がある。かといって距離を空けるとクロノ、なのは両者の砲撃にさらされる。現在ほぼクロノと密着状態であるためなのはは砲撃を撃てない。クロノを巻き込む可能性があるためだ。

「くっ……中々やるな君は！」

「あまり褒めないで下さいよっ！」

現在俊也とクロノは互角。

手負いのクロノとフルドライブ状態の俊也が……だ。

そもそもエクセリオンモードはこの時代ではなくもつと後の時代に搭載されるものだ。体の出来上がっていない子供では負担が大きすぎる。現在は問題なくとも後々体にダメージが残る可能性が大だ。早めに勝負を決めたいが、決められない。

俊也とクロノ、共に攻撃型ではなく技巧派。両社とも攻撃型であったならどちらかの攻撃が上回ればすぐに決着はつく。

しかしどちらとも技巧派なら勝負が長引くのは必然。攻撃力はフルドライブ状態の俊也が上回るだろうが、攻撃が当たらなければ全く意味がない。

だが、転機は突然として訪れた。

「ははっ！ さすがリニスだ！」

「……何っ！ なのはっ！」

「にゃっ！ わわっ！ レイジングハート、お願い！」

【ディバインバスター】

後方で攻撃の機会をうかがっていたなのはに金色の砲撃が襲いかかる。

リニスのトライデントスマツシャだ。

こちらに攻撃が来ると言う事はフェイトとアルフが倒されたという事実にはならない。あの二人を相手にしながら更に援護攻撃をするとなると俊也にもクロノにも難しい。

「馬鹿な……フェイトとアルフがこんな短時間でやられるなんて……」

「ふふ……リニスを甘く見ていましたね。俺は模擬戦で一度もリニスに勝った事がないんですよ」

クロノと俊也は睨みあったまま動かない。動けない。

すぐにでもなのはの援護に回りたいクロノだが、ここで背を向けるほど愚かではない。背を向けた瞬間に勝負が決するためだ。即ち己の敗北。

ディバインバスターで迎え撃つなのは。

桜色と金色の光のぶつかり合い。

俊也とクロノは一端手を休め行く末を見守る。

なのはの砲撃の天才だ。負ける事はそうそうないと考えているクロノ。

対する俊也は先ほどバスターが拮抗したためなのはが撃ち負けると確信していた。フルドライブ状態で撃ちこんだなら負けはしないが、通常の状態で撃つたならリニスのトライデントスマツシャは俊也のディバインバスターを上回る威力を持っているからだ。当然なのははここで墮ちる。そしてやっと当初の目的通り二人でクロノに当たれると思っていたが……ことごとく俊也の思い通りにはなら

ない。

「すごい砲撃……！ このままじゃやられちゃう……！」

事実、少しずつだがなのはの砲撃が押されている。必死に力を込めているが状況は覆らない。

「レイジングハート、絶対に負けないよ……！」

【その意気ですマスター。カートリッジロード】

ガチャンという機械音がレイジングハートから聞こえた刹那、なのはの魔力が跳ね上がり必然的にディバインバスターの威力も上がる。

押されていたなのはの砲撃はカートリッジの効果で今やリニスの砲撃と拮抗している。

それに驚いたのは二人と一機。

「カートリッジ！ こっちのレイ八にはそんなのも仕込んでるの！？ ミッド式とは、それに加えてインテリジェントデバイスとは相性が悪いのに！」

俊也のレイ八にはカートリッジシステムは非搭載だ。故にその違いに驚く。これは完全に俊也の読み違い。インテリジェントデバイスにカートリッジは搭載されていないとの思い込みによるミスだ。

「……あのなのはの砲撃と撃ち合えるのか」

クロノは敵ながら感心していた。クロノは砲撃勝負ではなのはに勝てない。いや、そもそも砲撃でなのはに勝てる者は少ないと確信

していたからだ。

「これで互角……あの強いのよ。でも……ここで負けるわけにはいかないから！」

【カートリッジロード】

再度ロード。合計二つ。

俊也に言わせてみれば無茶苦茶だ。カートリッジは体にかかる負担が大きい。故に連続で使用するなど言語道断、ある程度鍛えられた大人ならまだしもなのは子供、絶対に後々体に影響がある。

子供のころからこんな負担ばかりかけていたら体もリンカーコアも壊れかねない。何故このような危険を容認したのかと俊也は憤慨する。

そしてカートリッジで力を上げたデイバンバスターはここで完全にトライデントスマツシャを上回った。

桜色の光は金色の光の飲み込み進む。そして爆音と共にリニスをも飲み込んだ。

「リニスっ！」

あせる俊也。ここでカートリッジとは完全に予想外。そしてリニスの砲撃を上回る事も予想外。

認めよう、高町なのはは九歳時の俊也を完全に上回る力を持っている。

「……君の使い魔はこれで戦闘不能だろう。大人しく投降する事を進めるが」

「クロノさん、あなたは完全にリニスを見誤ってます。彼女がこれ

くらいで墮ちるなら管理局最強の使い魔は名乗れません」
「……何？」

管理局という言葉に反応するクロノ。対し俊也は思わず出てしまった失言に舌打ちをする。

「状況が悪すぎます。作戦変更と行きますか」
「何を……!!」

戦闘続行と思っていたクロノは慌てて顔を腕で覆う。
なぜなら俊也の左手に先ほどのフラッシュスフィアがあったからだ。そのスフィアの効力も知っている。故に眼を潰されないようにしたのだが……。

「戦場で眼を閉じるとは余裕ですね」
【ラウンドシールド】

そんな無防備な姿を見逃すわけもない。俊也は通常の大きさよりも二回りほど小さく圧縮したラウンドシールドを展開、それをクロノに叩きつける。物理的な痛みは無いが……。

「シールドブレイク！」
「何っ……!! うあっ!!」

叩きつけた瞬間に自らのシールドを破壊。その時生じた衝撃でクロノを吹き飛ばす事に成功する。

「クロスファイアっ!!」
「わわわっ!!」

クロスファイアでなのはを牽制し、ソニックムーブでリニスの元へ駆ける。個人で戦うよりリニスと連携を取った方が得策だと考えた。あのままクロノとなのはを相手にしていたら俊也が負けていた可能性が高い。

「……大丈夫そうだね」

「ええ、しかし驚きました。まさか撃ち負けるとは……」

バスターの直撃を受けたりニスだが思いのほかけろりとしている。衝撃で帽子は吹っ飛んだようだが、ダメージは少ないようだ。

「……あんたよくあれで無事だったね」

「私だったらやられてた」

縛りあげられているフェイトとアルフが半分あきれるような声で言う。

「リニスの強さは知っているだろアリシア……」

そして俊也は色々感情の混じった今にも泣き出しそうな目でフェイトに言う。が、やはりアリシアという言葉に反応してアルフは怒りフェイトは悲しそうに俯く。

「リニス、あの子はやばい。事、砲撃に関しては完全に俺を上回っている」

「ですね。今しがた痛感した所です」

時間はあまりかけられない。クロノもなのはも体制を整えつつある。

ここまで距離が離れていると主だった攻撃は砲撃メインとなる。
一見俊也達が不利のように思われる……が。

「でも弱点は俺と同じだと思う。あの子は女の子だから俺より効果はあると思うよ」

「……そうですね。そうなると接近しなければ。……勝負はあの子がバスターを撃ってきたとき」

「砲撃で俺に勝っていても、それだけ。俺にはあの子が知らない技がある」

師から学んだもの、そして魔法研究開発課で開発したもの。

とくに後者は絶対に相手は知らない。なぜならその魔法は数年後に俊也達が作り上げるオリジナル魔法に分類される新魔法なのだから。

相手からしてみれば未知の魔法だ。かなりの脅威になるだろう。

「札の多さならクロノさんにも負けない自信がある……」

「そうですね、名誉課員の名は伊達ではありませんからね」

「……きた。準備はいい？」

「問題ありません。流石にカートリッジの乱発はしないでしょ。」

まあ使っても問題ありませんが」

「流石リニス。食べきれる？」

「問題ありません、御馳走です」

すぐ隣で身動きがとれないフェイトとアルフは何とか戦力を分析しようと俊也とリニスを見続ける。

しかし残念な事にこれといって弱点らしい弱点は見つけられないでいた。

「プラズマグレネード、セット」

リニスが一言呟くと突き出した右の掌を中心に魔法陣が浮かび上がる。

(二重……?)

魔法陣が二重になっている事に気がついたフェイト。だが、展開された魔法陣が何を意味するのかは分からない。

(シールド? 攻撃をする様子はないし……何だろう?)

しかしすぐにその意味を知る事になる。

「さあ撃つてきなさい。砲撃メインのミッドチルダ魔導士の天敵は総じて私ですよ?」

手札は多数（後書き）

次からクロス技が多数でてきます。

クロスした技そのものではなく、それを元ネタにして俊也たちがミッド式の魔法を開発した、というのが正しいです。ですので、一部クロス元の技と違う部分などもあります。

クロス技の詳細なども俊也達の設定とともに掲載したいです。

異世界の師弟の決着

俊也とリニスを除く一同は驚愕に眼を剥く。

なのは予想通りデイバインバスターを撃ちこんできた。

決して軽視できない威力を持つ砲撃だ、防御するにしても気を抜くとシールドごとやられてしまう。

だが、その砲撃をリニスは防いだ。いや、防いただけではここま
で驚かない。

「ふふふ……しっかりといただきましたよ」

なのはの攻撃は二重の魔法陣に吸い込まれた。デイバインバスターを取り込んだのだ。

「まさか……吸収!？」

声を上げたのはフェイト。咄嗟に思いついたが信じられないという顔をしていた。

単純に防ぐのではなく相手の砲撃を取り込む。それが魔力による攻撃なら理論上は可能かもしれない。ただ、それがとんでもなく難しい技術だということは言われなくても理解できる。

「そのまさかですよアリシア。防御でも反射でもなく吸収。砲撃、誘導弾、それが純粋な魔力によるものならこうして魔法陣内に取り込む事ができるのです。無論限界はありますが」

制限は純粋な魔力であること。レアスキルによって変換されたものや質量兵器は吸収できない。なのはのデイバインバスターは吸収可能でもフェイトのサンダーレイジなどは吸収は不可能だ。故にク

ロノのデバイスがデュランダルではない事が俊也達の有利に働く。

「そしてこの魔法は吸収するだけではありません」

二重の魔法陣、前の陣から桜色の光が、後ろの陣から金色の光が溢れる。

「お返ししますっ!!」

そしてリニスは吸収したディバインバスターをなのはに向かって放った。

ただそのまま返したのではない。ディバインバスターに加えて自らの砲撃を上乗せしたものを放ったのだ。

つまりディバインバスター+トライデントスマツシャー。その二つの力を合わせた威力がある。

証拠に砲撃の色は桜と金が混じりあつたものをしている。

相手の攻撃を吸収し、自らの力を上乗せして相手に返す。

俊也が開発したものだ。似たような効力を持つ魔法はあるかもしれないが、この魔法は紛れもなくオリジナル。初見で見破られる事はまず無い。

「嘘!? すごい……」

「呆けるなのは! 逃げないと不味い!」

迷わず回避するクロノとなのは。リニスの放った複合砲撃は見るからに威力があるものだ。回避を選んだのは正解だ。

全力で回避したため当たりはしなかったが複合砲撃はそのまま真っ直ぐに進みビルを何棟か破壊していった。当たったら一たまりも無かっただろう。

「さて、次は俺の番ですね……」

レイ八を掲げスフィアを作る。しかし、ただのスフィアじゃない。すぐ横で様子を見ているフェイトとアルフの顔が恐怖に歪む。

「嘘……大きすぎる！」

「こ、こんなものぶっ放そうってのかい!？」

俊也のスフィアはどんどん大きくなっていく。

一メートル、三メートル、八メートル、十、十五、二十二、二十八……その直径およそ三十メートル。規格外に大きすぎた。

「さあどうします？ ゆうにこの街を一瞬で消し飛ばすほどの魔力は集まっています」

「……正気か？ 本気でそんなものを放とうとしているのか？」

なのはを後ろに庇うように立つクロノ。その顔は青い。見た事もないほどの巨大な魔力球。直撃すれば戦艦すら落とせそうなほどだ。防ぐ事は……絶望的。

後ろのなのはは恐怖からかたかたと震えている。無知な子供でもあの巨大な魔力球が当たれば無事に済まない事は分かるだろう。

「避けてもいいですよ？ でも避けた場合は結界ごと街が吹っ飛ぶ。非殺傷設定でも無機物は破壊できますからね」

「く、くそ……」

見誤っていたのか。

確かに一筋縄ではいかない相手ではなかった。仮にも執務官であるクロノと渡り合ったのだ。ただものであるはずがない。

だが、ここまでは予想外だ。あんな巨大な魔力球は見た事がない。ランクに表すとS越えは軽いだろう。いや、Sランクでは済まないかもしれない。

「なのは……全力で防御する、君もそうしてくれ。……正直防ぐ事は難しいけどほんの少しでも街の被害は減らせるだろう。……幸い非殺傷設定らしいから死ぬ事はない」

「わ、わかったの……レイジングハート、全力で防御だよ！」

覚悟を決めたクロノとなのは。

止める止めると騒ぎ立てるフェイトとアルフに軽く笑顔を見せ無情にも俊也はレイハを振り下す。

「リニス……」

「了解です。あの子の相手は私が」

「いくよ……ファイアツ！」

規格外な魔力球が解き放たれる。

「なのはっ！ クロノっ！」

「ちつくしょう！なのはと同じ顔して何てえげつないんだい！」

叫びもがくが、チェーンバインドによる拘束から抜け出せない二人は成すすべがない。

「……くっそ……！」

「クロノ君……！」

ガチガチに防御を固めるフェイトとなのはだが今悠然と迫ってきている巨大な魔力の塊を見るとその努力も徒労に終わると悟る。

(いくらなんでもでかすぎる……!)

奥歯を噛みしめ悔しさに顔を歪めるクロノ。

思わず目を閉じてしまうのは。

バインドをどうにかしようともがくフェイトとアルフ。

ほくそ笑む俊也。

次の行動の準備を整えるリニス。

結界内は爆音と光に支配された。

鼓膜が破れるのではないかと思うほどの轟音、一瞬で視界を奪われる閃光。

音の衝撃に耐える。

そう、音の衝撃に。

「引っかかりましたね!」

「え? きゃああああああ……」

ソニックムーブで突っ込んできたリニスはそのままなのは搔っ攫うように抱き上げ大きく距離を取った。

「なのは!?!」

「隙がないのなら相手の隙を作りだせばいいってマサルさんが言っていました」

「くっ……そ……!」

眼前に現れた俊也に対しデバイスを構えようとするクロノだが、やはりその挙動は遅い。

クロノが構える前に俊也の攻撃が決まった。

レイハをクロノのデバイス、S2Uにあてがい一言。

「ブレイクインパルス」

「なっ!？」

ブレイクインパルス。その効果は知っている。クロノも使える魔法だ。

かつてクロノが時の庭園で傀儡兵を倒したのもこの魔法。

一定の振動を相手に送り内側から爆散させるという魔法である。

事、精密機械相手だったら絶大な威力を誇るであろう。

デバイスは言わずもがな精密機械。そんなデバイス相手にこの魔法を使えばもちろん……。

「……そうくるか……予想外だったよ」

「執務官の戦闘は相手を倒す事が目的ではない。あくまで逮捕、捕縛が目的です」

「そうだな……そう考えれば武器破壊はとても効果的だ。肉弾戦に心得があるベルカの騎士ならまだしも僕らミッドの魔導士はデバイスが無くなったら途端に弱体化する」

SU2は爆発を伴い砕けた。

バリアジャケットは解除されていないが、魔法も今までのような高速処理や精密操作などはもう無理だろう。

クロノの勝機は完全に失せた。

「……なぜ早くこの魔法を使わなかったんだ？」

「知っているでしょう? 一瞬の接触だったらこの魔法は成立しません。あの攻防の中にそんな隙はなかった。あったなら俺のレイハがクロノさんに壊されていた可能性があります」

「そうだな……。ならさっきの巨大スフィアは？」

「ふふ……。フェイクシルエットって知っています？」

「幻影魔法……！」

そう、先ほどの巨大なスフィアは幻影。そもそもあんな巨大なスフィアを作りだす事など俊也にはできない。

「また珍しいものを……」

「師の一人に幻影魔法使いがいましたね。そして幻影に気を取られている際に……」

「一番最初の目くらましか。今回は音も備わっていたな……そうか、油断した」

デバイスを持っていないクロノは俊也には勝てない。

もう状況は覆らない。

「では拘束させてもらいます」

「しかたないか……。でも、あの子達を甘く見ない方がいいぞ？」

チェーンバインドで拘束されたクロノだがその眼にあきらめの色は窺えない。

「もちろんですよ。油断しません。あなたのように拘束して俺達は家に帰ります」

やっとの事でクロノを拘束する事に成功した俊也だが時間をかけすぎていた。

遠くリニスとなのはの方を見る。

そしてクロノが笑みを浮かべていることには気がつかなかった。

異世界の師弟の決着（後書き）

デバイス壊されたらどうしようにもないと思うの。

油断大敵

「さて、大人しくしていなさい」

「は、離してなの……」

現在ののははリニスの腕の中にいる。抱きかかえられて身動きが取れない状態だ。

「抱き心地もあの子にそっくりですね。本当によく似てる」

「あ、あの、リニスさん？」

戦闘という空気では無くなっていた。なのはに現状を打破するすべは無い。意外と力が強いリニスの拘束からは抜け出せない。

「なんですか？」

「ど、どうしてこんな事するの？ リニスさんの事はフェイトちゃんから聞いたことがあるの。だからどうしてフェイトちゃんと戦うような事したのか分からないの……」

「フェイト？」

フェイト、おそらく人物名。しかしリニスには心当たりがない名前だ。

「そうだよ、それにあの私にそっくりな子は誰なの？ 俊也君って名前らしいけど。名字は私と同じだから家族に聞いてみても誰も知らないって言うてたの。お母さんもお父さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも」

「……待って下さい。お父さんと言いましたね？ ……この世界ではあなたのお父さんは生きていますか？」

「？ お父さんは元気だよ」

なのはの答えに息をのむリニス。

(平行世界……性別の逆転は先ほどこの目で確認しましたが……)

俊也に父親はいない。周りの手助けもあつたが母親である桃子が女手一つで育て上げた。

父親である高町士郎は俊也が生まれて間もなく仕事中にテロに会い帰らぬ人となっている。

(この世界では士郎氏が生きている……)

胸が締め付けられる思いだ。

俊也は父親に関する記憶がない。顔も写真でしか知らない。家族の話聞き自分の父親に誇りを持っているが、寂しかった事には変わりがないだろう。

兄である恭也が父親役を勤めようとしていたみたいだが、それも不十分だったようだ。兄は兄でしかなく決して父ではない。

(……どうすれば)

会わせてあげたい。

だがこうして明確に管理局と敵対した今では難しいだろう。

なのはを抱きかかえたまま思い悩む。

だがそれは決定的な隙となった。

戦場で動きを止めるなど愚か者がする事。ほんの一瞬の間でも命取りになってしまう。

「なのはを離しな！」

突然の大声に驚き振り返る。

そこには先ほど拘束した使い魔、アルフが拳を振り上げていた。

「なっ！ いつのまに………！」

驚いた。チェーンバインド二本での拘束はそれなりに強固だ。短時間で抜けられるものではないのだが………現にアルフは拘束を抜け出している。

（まさかバインドブレイク？ 見誤りましたか………かなり優秀なようです）

ラウンドシールドを展開し拳を受け止めるが………。

「シールドブレイクッ！」

「なっ！」

アルフの拳は止まらずシールドを砕きリニスに直撃する。

「くう………！」

思わず体制を崩してしまふ。なのはも腕から抜け出してしまった。アルフが初めてリニスに一撃を入れた瞬間、戦局は大きく傾く。

「なのは！ クロノの指示通りだよ！」

「分かってるの！」

なのははレイジングハートを構えリニスに狙いを定める。

「デイベイーン……バスター！」
「くっ……シールド！」

体制を崩しつつも再度シールドを展開する。プラズマグレネイドを展開する暇は無い。バスターの威力は並ではなく少しでも集中が乱れたらシールドごとやられてしまう。リニスの得意とする砲撃であるトライデントスマツシャーなら押し勝つこともできるが撃つタイミングなどあるはずもなくどうしても防御に徹してしまう。

しかしこの場にいる敵はなのはだけでない。シールドを殴り壊したアルフはまだ攻撃の手を緩めない。

「ランサー！ ファイアツ！」
「厄介な！」

アルフの放つフotonランサーを防ぐためにもう片方の手でシールドを展開。状況はかなり厳しい。

「いくよっレイジングハート！」

【カートリッジロード】

「！ こうもぼんぼんと使って……！」

いらつきながも更にシールドに魔力をつぎ込む。カートリッジは体にとても負担がかかる。まだ体が出来上がっていない子供が使用すれば後々どんな後遺症が出てくるか分かったものではない。

（どうしてこっちの管理局は子供のデバイスにこんなものを組み込んでいるのですか？ 使用を許可しているのですか！）

歯を食いしばる。なのはのバスターは予想以上。シールドもガリ

ガリと削られていく。

「いいかげんっ！ 観念しなっ！」

「くっ！ しくじりましたね……っ」

やはり二人同時相手にするのは難しい。

リニスはあくまで拘束を目的に動いている。全力は出していない。上手く手加減しながら立ちまわっていたのが仇となった。

戦闘不能にするならわりかし簡単だ。逆に怪我をさせないように拘束する方が難しい。

フェイトとアルフは完全に拘束されていた。手際良く事は運べた。だが相手が二重のバインドを砕く術を持ち合わせていたのが誤算だった。

魔法での拘束は時間があれば自力で解除する事ができる。

物理的な拘束具を持ち合わせていない俊也とリニスはだからこそ素早く事を済ませたかった。

タイムリミットはユーノの拘束が解ける時。さすがにあのバインドの雁字搦めを解くには時間がかかるだろうが、決して解除できないわけではない。

二重のバインドを解除するのにも時間がかかる。これだけの短時間でバインドを解除する事が優秀であるという証と言える。

俊也とリニスは敵の戦力を見誤るといふシンプルなミスを犯した。決してやってはならない重大なミスだ。

正直クロノとユーノ以外は戦力として数えていなかった。

だがその戦力外が思いのほか強力だった。

なのはの砲撃は通常の状態の俊也を上回り、フェイトとアルフはリニスと真正面から戦えるほどのコンビネーションを見せた。

現在のリニスの魔導士ランクはおそらくAAAからS前後。

これはマスターが俊也になったためランクがあがったと予想されるからだ。

マスターがアリシアの時はAランク。プレシアがマスターの時はS+ランクあった。

ランクが違ってくるのは供給される魔力などが違ってくる。使い魔の強さは主によって左右されるし、優秀な魔導士か判断するにはまず使い魔を見ろとまで言われている。最盛期はやはりプレシアの使い魔であった時。俊也ほどの魔導士でもプレシアには敵わない。

現状Sランク程度と予想されるリニスと戦えるフェイトとアルフ。その彼女らを戦力外と認識するほどリニスは逸脱してはいない。

そして……戦力分析を誤った結果がこれだ。

「捕まえたよ……絶対に離さない」

結局二人の攻撃を完全に捌く事が出来ずにアルフに背後から抱き締められる形で捕まってしまう。

なのはがカートリッジをロードしなければ捕まる事はなかったはずだ。

また、リニスが全力を出していれば捕まる事もなかった。いや、ただの腕力だけの拘束ならすぐにでも解ける。そして単純なバインドでの拘束でもすぐに解ける。術も持っている。

しかし……。

「考えましたね……これはやっかいです」

アルフはリニスにしがみついたまま自分ごとチェーンバインドで拘束した。

「頼むよなのは！」

「うん！ レストリクトロック！」

「収束系の上位魔法！？」

更になのはのバインドがリニスとアルフを拘束する。

収束系の上位に位置する強固なバインド。俊也とリニスの持つどのバインドよりも強固で解除は難しい。まさか魔法に出会ったばかりの人間がこのような上位魔法を使用してくるとは思わないだろう。

こうしてリニスは完全に拘束されてしまった。

「なのは！ 絶対にこの偽リニスは離さない！ 早くフェイトの援護にいつておくれよ！」

「わかったの！ 絶対に勝つから少しの間まっててね！」

拘束されたりニスとアルフを残してなのはは飛び去っていった。

おそらくフェイトは俊也と交戦中なのだろう。俊也は二対一の不利な状態で戦わなければならなくなった。

「……………クロノの指示通りと言いましたね。あの子、拘束されながらもあなたたちに念話で指示を出していたのですか？」

「その通りだよ。こうも言っていた。拘束に至るまでは見事だけど詰めが甘かったってね。こちらに出来るだけ怪我を負わせないように動いたことがミスだと言っていたよ」

「そうですね……………意識を刈り取るかスタンバレットでも打ち込んでいたら結果は別でしたか」

悔やんでも襲い。手心を加えたのが命取りになった。

さすがのリニスもこの状態を脱するのは厳しい。レストリクトロ

ツクがなければだいぶ違ってくるのだが……上位魔法の名は伊達ではない。

「私は詰みましたか……衰えましたね……」

あまりに不甲斐ない結末に顔を歪める。

優しい俊也の事だからリニスを見捨てて逃げるといふ選択は絶対はない。そしてそれはリニスにも全く同じ事が言える。

俊也とリニス、どちらか一人が捕まればそれで負けだった。

「あまり無茶しなければいいのですが……」

孤立奮闘しているであろう俊也を心配しつつこれから自分たちがどう動くのが最善か考える。

(このようなお別れになって残念ですはやて……)

おそらくもうあの優しい家には帰れない。

俊也と自分が居なくなつて悲しむであろう少女を想いリニスは心を痛めた。

油断大敵（後書き）

わりとあっさり捕まりました。

収束系上位魔法なんだから拘束力はんぱないはず。

限定解除

フェイトは焦っていた。

油断ならない相手だと分かっただけはいても相手は自分よりもなお小さい男の子だ。

(攻めきれない……！)

だが、決定打を与えられない。

上手く避け、捌き、隙を窺って攻撃してくる。

(それどころか逆に攻められてる……！)

ソニックムーブで距離を詰めれば同じくソニックムーブで逃げられる。

フォトンランサーはクロスファイアで相殺。かといって大きく距離を取ればデivainバスターの餌食になる。

「速いなっ！ くっそ……！」

俊也もまた焦っていた。

予想以上の高機動。俊也の知るアリシアとは似ても似つかない戦闘スタイル。

(く……速度を削がなきゃ……)

スピードは完全に負けている。ヒットアンドアウェイを繰り返されたら俊也のスタミナが先に尽きる。

(フルドライブを維持するのもきつくなってきた……)

俊也は今現在フェイトと同じ戦法をとっている。

近づいてはデバイス振るい、ソニックムーブで距離を取りスフィアで牽制しつつ遠距離では砲撃。

全く同じ戦法なため戦闘は均衡してどんどん長引いていく。どんどん俊也の不利になっていく。

(クロノさんを無力化できたのはよかった。なのはもリニス引き離してくれた。でも、このアリシアは予想外すぎる！)

デバイス同士をぶつけ合い、離れ、また近づきぶつけ合う。

「君、強いね……攻めきれないよ」

「それはこっちのセリフだよアリシア。こっちの君はやんちゃがすぎるー！」

マントの中に隠していたスフィアを放つがフェイトはソニックムーブで逃げて当たらない。

「バスター！」

「くっ……！」

デイベインバスターで追い打ちをかけ体制を崩す事に成功する。疲れてきているのはフェイトも同じ事。完全に防ぐ事に失敗したその隙を俊也は見逃さない。

「デイベインスフィア多重展開！ 包囲弾！」

「なっ！ 多すぎる！？」

体制を崩したフェイトを囲むように多重展開されたディバインスファイア。

フェイクシルエツトで造り出した偽物も多く混じっているのだが、全部が全部偽物というわけではない。

その数たるやゆうに百以上を超えている。

スファイアに囲まれたフェイトは下手に身動きとれない状態だ。

（魔力の消費が激しいから使いたくはなかったけど、出し惜しみしてたら負ける！）

幻影魔法は決して少なくない魔力を使用する。いかに魔力量が常人より多い俊也といえど限界はある。

クロノとなのはを騙すのに使ったあの巨大スファイアにもかなりの魔力をつぎ込んだ。エクセリオンモードの維持にも結構な魔力を使っている為に残りの魔力が心もなくなってきた。

「はあ……はあ……アリシア、ノーマークだったからかなりきつかった。今のうちにバインド……つと！」

俊也はソニックムーブで距離を取る。刹那のタイミングで先ほど俊也のいた場所を砲撃が通り過ぎる。いわずもがな、なのはのディバインバスターだ。

「むう……避けられちゃった。今度はしっかり当てるよ！ レイジングハート！」

【オーライマスター】

次を撃つためにレイジングハートを構えなおすなのは。もちろんカートリッジのロードも忘れない。

「アリシアの動きを封じたと思ったら……！ リニスは何をやっているの！？」

思わず毒づいてしまう。フェイト一人でも厄介なのにそこになのはが加わるとなると押し負けてしまう。

フェイトは今気づいていないようだが、別にスフィアに囲まれていても砲撃はできる。だから多くのスフィアに囲まれ焦っているうちにバンドをかけておきたかった。

「出し惜しみは無しか……よし、俺も札を一枚切るか」

レイハをフェイトの方に付きつけたままマントに手をかける。

「いつくよお！ デイバイーン……バスター！」

再び俊也に向かう桜色の砲撃。

しかし、俊也は避ける様子も相殺させる様子も見せない。

ただ、背中で風になびいていたマントを砲撃の方向に向ける。

「アリシア、このマントがバリアジャケットの一部だと思ったかい？」

「……バリアジャケットじゃない？」

「そう、分からなかったかもしれないけどこのマントはバリアジャケットを纏った後に作り出したもの。このマントを出す前に俺の足もとに魔法陣が浮かび上がったの気がつかなかった？」

「そういえば……」

そう、確かに最初に姿を見せた時はマントなどなかった。俊也のいう通りマントは後々作り出したもの。

「ふふふ……俺の札の一つ。リニスのプラズマグレネイドには劣る性能だけだ」

バスターはもう寸前まで迫っている。しかし、俊也はシールドの一つも張らない。

なのはのバスターは俊也のバスターと互角、カートリッジを使えば威力は上回る。直撃すればそのまま戦闘不能に陥るレベルの攻撃だ。そんな砲撃を目の当たりにして直立不動など考えられない。

しかし、フェイトが見たものは攻撃を受ける俊也でも攻撃を防ぐ俊也でもなく……。

「ひらり！ ってね」

マントでデイバインバスターを受けると信じられない事にそのまま反射してなのはの方へ向かっていった。

「リフレクト！？」

フェイトが驚愕に目を剥く。先ほどリニスも使用していたが反射魔法など本来はそうそうお目にかかれるものではない。

「にゃ！？ うっそおおお！？」

「なのはー！？」

まさかの展開に対処しきれなかったなのはは己の放ったデイバインバスターを受けてしまう。

爆発音と共に煙に包まれるなのはを呆然と見つめるフェイト。さすがに反射されるなど予想できなかった。

「マントは壊れたか。ふう、でも良しとしよう。俺の勝ちだなアリシア」

「驚いた……でも、君はなのはを過小評価しているよ」

フェイトは確信している。なのははこの程度では堕ちない。

なんせディバインバスターより威力が上であるフォトンランサー・フランクスシフトを受け切ったのだ。そしてあの頃より魔法の運用も技術も向上している。

「……いや、でもバスターの直撃を受けて……」

ゾクリと悪寒が走る。

フェイトに向けていた視線をなのはに戻す。

「まじか……!?!」

あなどっていた。なのはをまだ侮っていた。

「固いな!? くっそ!」

焦る。完全になのはを下したものと思い込んでいた。

(あの奇襲の反射から咄嗟に防御が間に合ったのか!?)

焦る焦る。完全に、幼少期の俊也を完全に超えている。実力もAどころでは済まないだろう。

「本物の天才かっ!」

マントの再展開は間に合わない。シールドの展開は……。

「ひら マント……実在していたなんてびっくりなの。でも、負けない!」

機械音が合計四回。つまり四回のカートリッジのロード。

「どれだけロードしてるんだよ。くっそ、無茶が過ぎるぞっ」

俊也のレイハにはカートリッジ機能は付いていない。

シールドを張るにしてもあれだけ威力を高めたバスターを受け切る自信は無い。相殺しようにも威力が足りない、魔力も足りない。

フェイトの動きを封じ込めているデイベインスファイアの包囲弾を維持しているために現在進行形でガリガリと魔力は削られていつて。もう、後は無い。

「全力っ! 全開っ! デイベイン……バスター!」

「くっそ……バスター!」

ぶつかり合う桜色の砲撃。しかし、今回は目に見えてなのはバスターが押している。

「一気に押し切るよレイジングハート!」

【オーライマスター】

「きつついな……レイハ、持ちそうか?」

【厳しいですね。あのデイベインバスターは完全にこちらを上回っています】

消耗がある、そして十全の力を発揮できない子供の姿でもフルドライブ状態だ。

砲撃という一点のみだが完全に自分を上回る平行世界の自分に畏怖の念を抱く。

しかし、俊也にも意地がある。いくら子供の姿になろうとも培った経験は変わらない。

特訓もつんだ、修羅場もくぐった。努力を重ねて手に入れた今の強さだ。いくら全力が出せなくとも……。

「魔法を知って一年にも満たないひよっこに負けてたまるかっ！意地があるんだよっ！ レイハっ！」

【マスター、しかし……】

もはや俊也と以心伝心の関係であるレイハは己が主がやるうとしている事を感じくが……。

「レイハっ！」

【……了解しました】

しびしびといった感じではあるが了承する。

世界が変わっても根元は同じ。負けず嫌いなところも二人に共通していた。

「リミッタ 解除っ！ ブラスターワンっ！」

刹那膨れ上がる俊也の魔力。

それはカートリッジ四本で強化されたなのはの魔力を凌いだ。

「にゃ！？ 急に……強くっ！」

完全に押していたディバインバスターを押し返していく。

俊也の戦いも決着が近づいていた。

限定解除（後書き）

俊也のマントはシールド魔法の一種。効果はドラえもんあれ。
ディバインスフィアの包囲弾はピッコロさんのアレです。

決着（前書き）

更新遅くて申し訳ないです……。

決着

「そ、そんな……あのなのはが撃ち負けた!？」

リニスを拘束したままアルフは驚愕する。

アルフが知る限りなのはの砲撃は何より強い。自分が知る魔導士の中でも最高クラス。

クロノもフェイトも砲撃ではなのはに敵わない。それほどまでになのはの砲撃は強力だ。

なのにどうしたことだろう？ カートリッジを使い強化されたあの凶悪な砲撃に打ち勝った。

なのはは砲撃押し返され桜色の魔力の奔流にのみ込まれた。勝敗は決しただろう。

「勝敗は決しましたね」

「く、くそ……なのはが負けるなんて……」

「勘違いしているようですが負けたのは私達です」

リニスの言葉に首をかしげる。

ユーノは多重バインドで拘束、クロノもバインドで拘束、フェイトは身動きが取れない。アルフはリニスを拘束していて動けないし、なのはあの砲撃に飲み込まれた。唯一自由なのは俊也のみ。状況を見るなら負けたのは管理局側だ。

「はあ……あの子はまた無茶をして。アルフといいましたね？ 私達を拘束したら早急に医者の準備をお願いします」

「何だつて？」

リニスとアルフは決着がついた二人の白い魔導士の方を見る。

「う……」

「意識があるんだ？ まったく、大したものだよ君は」

なのは霞みがかつた頭を覚醒させるために頭を振る。
そして自分が置かれた状況を理解した。

「にや！？ ちょっと……あわわわわ」

顔を真っ赤にして慌てふためく。

今のなのははいわゆるお姫様抱っこの形で俊也に抱えられている。
砲撃の直撃を受けて落下するなのは俊也が受け止めたのでこの
格好なのだが……小学三年生ながらしっかりとした女の子であるな
のはは憧れのこの体制に恥ずかしがる。

「本当に強い。小さな頃の僕を完全に上回っている。魔力、魔法セ
ンス、共に一級品だ。既にエースといっても大げさではないな」
「う……えと、その」

なのはは何を話しているかわからない。

俊也との距離は近い。改めて近くで顔を見ると本当に自分にソッ
クリだと思う。

髪を短く切ったらもう外見では見分けがつかないだろう。双子と
言われても信じてしまう。

「あの……俊也、君？ でいいのかな？」

「……ふふ、この未熟すぎる小さな体でリミットブレイクは無謀だ

「ったか……な」

「ふえ？」

「うっ……うっ……ふ」

「え……？」

びちゃつとなのはの顔に液体が降り注ぐ。

手で触れ、確認する。

手のひらは真っ赤。液体は今まさに俊也の口からこぼれおちた血液に他ならない。

「きゃあああああああ！」

現実を認識するとなのは甲高い悲鳴を力いっばい上げた。

「どう思うユーノ？」

「どうもこうもないよ。正直何が何だか分からない」

ベッドに寝かされた俊也を見て悩みに悩む。

リニスは別室に軟禁されているためこの部屋にはいないが、アースラの主要メンバーはこの病室に集まっていた。

ちなみになのはは顔面に吐血を浴びたのがよほど怖かったらしく、未だに半ベそ状態でフェイトに抱きつき頭を撫でられあやされている。

「ここまでなのはさんにそっくりでなのに……」

「はい、不思議な事に血縁関係は確認できません。正真正銘の他人

です」

リンディとエイミーも頭を悩ませる。

リニスの要望通り拘束してからすぐに俊也は病室へと担ぎ込まれた。

幸い命に別条はないが過度の魔力と肉体行使により内臓に少々ダメージがあったために絶対安静状態だ。

俊也から採取した血液となのはの血液を比べると、結果は他人と違うものだった。双子と言われれば納得してしまうほどそっくりなのに二人の間に血縁関係は認められなかった。これには一同驚いた。

「……私と同じクローンということは考えられないのかな？」

「フェイトの考えも分かるが、それなら他人と言う結果は出ないはずだ。それになのはは魔導士になって日も浅いし名も知られていない。そんな彼女のクローンを作るとは考えにくい」

クロノの言う通りだ。

いくらなのはが優秀な魔導士であってもあくまで彼女は管理外世界の現地協力者。わざわざなのはのクローンを作るメリットが無い。なのは以上の魔導士はいくらでも存在しているのだから。

「そしてこれね。レイジングハート……どうしてこの子がなのはさんと同じデバイスを持っているのかしら？」

【……】
「黙秘……か。主思いなのは分かるが、少しは協力してくれると助かるんだが」

俊也のレイハは回収されて監視下に置かれている。まだ詳しい解析などする前に何かしら話を聞きたかったが一向に口を開こうとしない。

「やっぱりリニスから話を聞いた方が早いんじゃないか？ この子も眼を覚まさないし、レイジングハートだって一言もしゃべらないし」

「アルフさんの言う通りね……協力的だといいいのだけど」

リンディは溜息を吐く。予想できない事態に頭が痛い。

なのはそっくりの男の子、プレシアの使い魔、二つのレイジングハート。守護騎士を逃がしたことから闇の書の関係者であることは間違いない。重要参考人だ。何としても情報を聞き出したい。

「……クロノ、リニスさんをこの部屋へ」

「了解しました艦長。拘束してからは抵抗のそぶりを見せないので問題無いと思います」

リンディの指示に頷きクロノは退室する。

「ふう……分からない事だらけね」

リンディはベッドの隣の椅子に腰かけ改めて俊也を見る。

(本当になのはさんにそっくり)

小さく寝息を立てる俊也の頭を撫でる。本当に小さい子供だ。なのはやフェイトと同じ、もしくは下ということもありえる。

そんな小さな子供が見せた戦闘は脅威の一言に尽きる。

戦闘方法は既に完成されていると聞いていい。近、中、遠距離とそつなく対応できそのどれもが一定水準を遥かに超える腕を持っている。

機動力も申し分ない。目くらましや幻影、反射など覚えている魔

法も豊かだ。

そして最初にユーノを潰しに行った観察眼の鋭さにも唸らされる。フルバツクを潰すのは定石だが、ユーノのポジションを一瞬にして見抜いたか……。

(あるいは知っていた?)

急に沸いた疑問を頭を振って振り払う。それは無いだろうと。

(それよりも……)

何よりも気になるのがレイジングハートだ。

なのはのレイジングハートと同じエクセリオンモードが搭載されていた。

元々出自不明でスクライアが保管していたインテリジェントデバイスがレイジングハートだ。それが二機あったというのはありえない話ではないが、それにエクセリオンモードが搭載されている事はありえない。

カートリッジ機能と同時に搭載した最新のシステムだ。それが搭載されているのはどう考えてもおかしい。

それに相違点も多々ある。デザイン、色調、トリガーの有無など細かい事を上げればきりが無いが、その中でも俊也が最後に見せたものは見過ごす事が出来ない。

(確か、ブラスタワーワン、と言っていたわね)

なのはのレイジングハートには無い機能。

爆発的に膨れ上がった魔力と俊也の周りに浮いていた小型の機械。リンディはマリーにも確認したが知らない技術だと言っていた。その未知の機能は脅威の一言で、カートリッジ四つという鬼のような

強化を施されたなのはデイバインバスターと真正面から対決して打ち勝つというとてもない結果を見せた。

（分からない事が多すぎるわ……報告書にどう書いたらいいのかしら）

リンデイが二度目になる大きな溜息を吐いたところ、クロノが両腕を拘束されたリニスを伴って部屋に戻ってきた。
リニスを見てフェイトとアルフの顔が強張る。

「連れてきました」

「御苦労さまクロノ。……どうかしたのかしら？ お化けを見たいな表情をしてるわよ？」

部屋に入った瞬間、リニスはリンデイを見て驚きに眼を剥き硬直していた。

ありえないものを見た、という表情だ。

「まさか……リンデイ・ハラオウンですか？」

「はい、私がアースラの艦長のリンデイで間違いないわ」

「そんな……ここにも相違点が……」

突然ぶつぶつと喋り出すリニス。心なしか顔が蒼い。

「何かおかしいことがあったかしら？」

「……クライド提督……。アースラの艦長はクライド・ハラオウンではないのですか？」

「……！？」

「なっ……！！」

リニスから出た言葉に驚くのはリンディとクロノ。その名はリンディの愛する夫、そしてクロノの敬愛する勇敢な父の名だったからだ。

今は亡きクライド。その名をリニスが知っている事が解せない。なんせ二人には何の接点も無いし、リニスがプレシアの使い魔になった頃には既にクライドはこの世にはいないのだから。

「……説明、してもらおうよ」

少々私情が混じるのも仕方がない。

鋭くなったリンディの眼光にリニスは息を飲む。

「……全て、というわけにはいきませんが。私も現状を確認しなければいけません」

リニスも覚悟を決めリンディの視線に応えた。

そして心の中であやまる。あの心優しい少女に。

(すみませんはやて。このようなお別れになるなど私達も不本意です)

悲しむであろうはやてを想い心を痛める。

短い付き合いだったけど、確かに家族だった。はやては既にリニスの娘も同然。

娘を悲しめる己の不甲斐なさに泣きたくなるが、それは後回し。

後悔は後だ、今はこの状況を乗り切らなければ……。

決着（後書き）

なのはとは血縁関係は無し。よく似た他人です。だから結婚もOK
ですけどメインヒロインははやて。

そうしてはやては同格のヒロインであるはずなのはやフェイトよ
り扱いが悪いのだろうか。

設定（前書き）

俊也世界の人物設定です。

原作との相違点などはこんな感じになっております。

設定

高町俊也

主人公、高町なのはの異世界同一存在で男性。

所属は時空管理局本局技術部魔法研究開発課。階級は一尉。

九歳の頃に魔法に出会い十歳で嘱託魔導士に。短期訓練校を卒業しその後正式に局員入り。航空隊に配属されるものの半年程でオリヴィアに引き抜かれ技術官に。

プレシア達の教育の元デバイスマイスターをはじめ様々な資格を取得。技術官として若くして一流に数えられる。そして三度試験に落ちたが十五歳の時に執務官試験に合格。その後地上部隊に出向し管理局の花形として活躍するが、とある次元犯罪者の捕縛任務に失敗。そして平行世界に迷い込む。記録上は十七歳で殉職。

最高ランクは総合S。魔導士としてのスペックはなのはに劣る。感覚で魔法を組まずちゃんとした順序を経て魔法を作り上げる。

得意な魔法は縮小と圧縮そして変身。レアスキルは無し。

戦闘タイプはクロノが一番近い。

最大攻撃力ではなのはに劣り、最大スピードはフェイトに劣る。ポジションはオールラウンダー。苦手な距離は無く遊撃として行動すれば一番力を発揮する。会得している多種多様な技で戦闘をかき乱すトリックスタータイプの魔導士である。

霸王流を取得しているがそこそこの使い手にはなれるものの達人として大成はできない。

基本は甘えんぼ。なのはとは違う幼少期を過ごしたため素直に人に甘える事ができる。十一歳の頃までは姉などと一緒に風呂に入っていた。

なのはと違い収束の適正が高くないためスターライトブレイカーとレストリクトロックは使用できない。

以下簡単な経歴など。

本局の執務官一尉。

ユーノに魔法を習い、クロノに鍛えられる。

師はユーノ、クロノ、ティアナ、オリヴィア。

魔力ランクはAAA 魔導師ランクは総合S。

オールラウンダー。

所持デバイスはレイジングハート、劇場版仕様。

所属 時空管理局本局技術部魔法研究開発課。

九歳 パラサイトシード事件（オリジナル事件） ユーノ、魔法と出会う。

十歳 傀儡人形事件（オリジナル事件） アリシア、リニスと出会う 囑託試験に合格 プレシアと出会う。

十一歳 短期訓練を修了し管理局入局 武装隊に所属 艦の修理で暇を持て余しているランスター提督に扱かれる アリサが亡くなる。

十二歳 オリヴィアから勧誘され魔法開発課に転属 名誉課員になる デバイスマイスターの勉強を始める すずかによるつまみ食い未遂事件。

十三歳 デバイスマイスターの資格を取得 新魔法を色々と開発ルシエ少将と出会う。

十四歳 新魔法の功績が認められ表彰される プレシア亡くなる。

十五歳 中学卒業 ミッドに本格的に移住 執務官試験に合格

ティータと友人になる 地上75部隊に出向になる トレニア一尉にボコボコにされる アリシア、リニスと共にチームライトニングスターズ結成 雑誌の表紙を飾る。

十六歳 リニスと本気の模擬戦をし敗北 ルシエ少将とオリヴィア少将の本気の模擬戦でミッドの無人島が壊滅。

十七歳 ジュエルシード強奪事件 記録上殉職。

ユーノ・スクライア。

俊也の親友にして魔法の師。結界魔導師としては超一流なのだがいかんせん目立たない。

出会いは原作に近いが、最初にフェレット状態ではなく人間状態だった。

俊也を女の子だと間違う。お前も人の事は言えないとは俊也の談。魔道士タイプ、ランク等原作同様。無限書庫の司書から司書長に出世するのも原作同様。しかし眼鏡はかけていないし髪も伸ばしていない。

俊也にビーストモードを教えたのはユーノ。

リニス・テストロッサ

プレシア、アリシア、俊也と三人の主に使えた、仕えている優秀な使い魔。己の母と呼べるプレシアの姓を名乗っている。

使い魔として破格の能力を誇る。長年培った技術は本物であり、俊也は全力の模擬戦でリニスに破れている。最盛期はプレシアの使い魔だったころ。遠中近と全ての間合いで全力を出せるオールレンジアタッカー。

長い時間プレシアの助手も務めていたので知識も豊富、欠点らしい欠点が見つからない完璧超人。

趣味は日本の漫画やアニメといった娯楽全般。

アリシア・テストロッサ

大魔導師プレシアの一人娘。

母親に比べれば魔導師としての資質は悪い。攻撃魔法が不得手で補助で本領発揮するフルバック。

デバイスマイスターとしてそこそこ名が知られている技術官。執

務官補佐の資格を取ってからは研修としてクロノの補佐につく。

明るく元気いっぱいであるだけで皆に元気を分け与えるムードメーカーだった。

俊也はアリシアの事が好きだった。しかしそれが恋愛感情だったのかは分からない。

享年二十歳。

プレシア・テストロッサ

原作と違い狂っていない。

技術者として頭一つ抜けた才をもっており俊也世界と原作世界の技術力の差は彼女がいたからこそ。

また技術者にあるまじき戦闘力を持っているため多くの武装隊員に畏れ奉られた。

リニスと契約したのは彼女が六歳の頃。

研究完成まであと一歩というところではやり病に倒れて闘病するも病には勝てずに多くの人が見守る中息を引き取る。

俊也のミッドチルダでの母とも呼べる人。プレシアも俊也を息子のように可愛がった。

俊也が極めて高い技術や知識を持つのはプレシアが直々に享受したため。

クロノ・ハラウン

原作世界とは違い女性。俊也に魔法の応用などを教えた第二の師匠。ランクは原作同様AAA+

氷結魔法を操る凄腕の執務官。とても小柄ながらそれに反するように胸が大きいのが特徴。

世話焼きで面倒見がいいので周囲からの信頼が厚い。

俊也と出会った時点で既にデュランダルを持っていた。

これと言って飛びぬけた才を待たずに超一流になった努力の人。俊也は模擬戦で勝った事がない。

エイミイとは特別な関係。

クライド・ハラウン

原作とは違い存命。アースラの艦長を務める。

男の子が欲しかったためか俊也の事を息子のように可愛がった。

また、父を知らない俊也はクライドの事を父親のように思った。
た。

リンディ・ハラウン

原作とは違い既に亡くなっている。

原因はクロノ出産後に体を壊したため。

エイミイ・リミエッタ

原作とは違い執務官補ではなくアースラの筆頭オペレーター。

よく俊也をからかうため少々俊也は苦手意識を持っている。

クロノとは特別な関係。

高町士郎

原作とは違い既に亡くなっている。

原因は俊也が生まれて間もない頃ボディガードの仕事中にテロに
あつたため。

高町（月村）恭也

原作より二歳ほど年上。

俊也九歳時点で月村忍と結婚済み。

高町美由希

原作より三つほど年上。

俊也九歳時点で大学生。

月村忍

原作より二歳ほど年上。俊也の義理の姉にあたる。

月村すずか

原作とは違い美由希と同一年で親友。

俊也の事を弟のように可愛がる。俊也が甘えんぼになったのは家に一人残る俊也のそばに常に一緒にいたすずかが全力で甘やかしたため。俊也はすずかがいたから孤独な幼少期を過ごさなかった。

その後つまみ食い未遂事件を経て俊也と夜の一族の盟約を結ぶ。

アリサ・バニングス

原作と違い既に亡くなっている。

俊也の親友にして初めての友達。友達になったきっかけは教室で友達を作らずに一人うじうじとしていた俊也をうっとおしいと殴り倒したから。

俊也が心の底から好きといえる女の子だったが、それが恋愛感情かはずい確認できなかった。

身代金目的で誘拐されついに帰ってくる事はなかった。享年十一歳。

ティアナ・ランスター

原作とは違いクロノの執務官の先輩に当たる。現職は次元航行艦の提督。ランクは原作とは違いS-。

俊也に幻影魔法を享受した第三の師。

幻影魔法を使えば管理局ピカイチの実力を誇る。質量を持った幻影を展開するという反則ができる。言うなれば分身の術が使える。

幻影魔法だけではなく射撃の腕前もかなりのもの。一端戦闘になれば幻影で戦場を滅茶苦茶にひっかきまわし自分は安全な場所で射撃するというえげつない戦法をとる。やっとのことで倒したと思ったらそれは幻影で、無傷の本人が笑いなが現れてクロスファイアを

撃ちこむなんてことが頻繁にある。近接も苦手ではなくとも戦いにくい、戦いたくない相手である。現在は一線を退き艦長職に収まっているが有事の際は自ら動く。

年齢は二十四歳。

ティード・ランスター

原作とは違い存命。

俊也の同期の執務官で良き友人。年齢は十九歳。

オリヴィア・ゼーゲブレヒト

歩く理不尽と畏れられる超人。俊也の直属の上司にあたる。俊也に霸王流を教え込んだ張本人。

聖王家の二女。魔法研究開発課の課長であり階級は一佐。プレシアの弟子であり色々技術を教わった。

ランクは脅威のSSS。個人戦闘力では管理世界最強。技術官でありながらその強さは他を圧倒して寄せ付けない。

一心王族だから前線に出せないという政治的理由もあるがそこに存在するだけで既に抑止力になっている。

俊也を引きぬいたのはプレシアの言葉があつたから。

戦闘ではバグのような強さを発揮する。具体的にはヴォルテールを真正面から殴り倒して勝つくらいにふざけている。

更に俊也のおかげで開発できた数多くの新魔法のせいで強さに磨きがかかってしまう。ヒューマンを超えた何か。

基本的に温厚な性格だが一端火がつくとどこまでも逝ってしまい手がつけれなくなる。王族であることを鼻にかけない気さくな人のため皆から好かれている。

年齢は二十四歳。

キャロ・ル・ルシエ。

怪獣総進撃と畏れられる管理世界最高戦力。階級は少将。

竜の巫女として桁はずれな力を持つ。本人事態は総合A程度のフルバックだが、そこに召喚能力を加味すると条件付きEXというふざけたランクになる。

更に召喚した竜にブーストをかけ強化するという反則までやってのける。召喚できる竜の種類は十騎。

本気になれば最大十体の同時召喚が可能なので彼女と本気で戦うなら戦艦が何十隻か必要になる。

ちなみに彼女が反旗を翻したら地上本部くらいだったら半日もかからずに壊滅する。

その出鱈目な能力の代償かホルモンバランスがおかしいのか外見年齢がとても幼い。原作ストライカーズのキャラと同じ見た目と思ってもらっている。原作ヴィヴィッド編のキャラより幼く見える。

年齢は三十六歳。酒も煙草も嗜む見た目幼女。婚期を完全に逃し、なおかつ彼女を恐れて男がよってこなく彼氏ができないのが悩みの種。

シャリオ・フィニーニ

原作とは違い俊也の四つ年上。デバイスマスターとメカニックマイスターの資格を持つ技術官で俊也の先輩に当たる。階級は二尉フェイトが存在しないため執務官補ではない。

マリエル・アテンザ

原作とは違い俊也の二つつ年下。

技術官としての後輩に当たる。階級は三尉

ゲンヤ・ナカジマ

原作とは違い航空部隊の部隊長。階級は三佐。

俊也が航空部隊にいた頃の上司に当たる。面倒見が良く、俊也もゲンヤに懐いていた。

クイント・ナカジマ

原作とは違い存命。管理局入りしておらず専業主婦。戦闘力は皆無な普通の女性。

ギンガ・ナカジマ

原作とは違い戦闘機人ではない。ナカジマ夫妻の実子。だが、食欲は原作そのまま。

年齢は十二歳。管理局には入局していない。

スバル・ナカジマ

原作とは違い戦闘機人ではない。ナカジマ夫妻の実子。ギンガと同じで食欲は原作仕様。

年齢は十歳。姉同様入局はしていない。

レジアス・ゲイズ

プレシアを通じて知り合う。

プレシアの研究に全面協力していた地上の英雄。階級は中将。

原作とは違い黒い所皆無な正義の人。

オーリス・ゲイズ

原作とは違い、遅くに授かったレジアスの一人娘。スバルの同級生で十歳。局入りはしていない。

カナナ・セツト

出向先、地上75部隊の部隊長。階級は三佐。

セツテのオリジナルとの異世界同一存在。戦闘機人ではない。デスクワークの鬼。

セツテとは違い感情豊か。

年齢は二十八歳。

トレニア・サンク

出向先、地上75部隊で俊也の相棒だった。

チンクのオリジナルとの異世界同一存在。階級は一尉。

戦闘機人ではないが極めて高い戦闘力を誇る。

俊也転属時の模擬戦、トレニアは突貫し俊也に肉薄、レイ八を掴むとレアスキル、ランブルデトネイタで爆破。上手く魔法の使えない俊也を一方的にボコボコにするというえげつない戦い方をした。地上のエース。年齢は十二歳。ランクは陸戦AA。

デザイン博士。

何故か正義に目覚めたあの人。

とりあえず自分を作った脳味噌をぶつ殺し伝説の三提督に保護を求めた。

管理局の最高頭脳。自分の知識を世の為人の為に使う。

この人が理論を作らないからクローン技術のプロジェクトFは俊也世界には存在しない。

生体義肢は出力を強化したらそのまま戦闘機人になるけど、そんな倫理に外れたことなんてしないさせない。

マッドじゃない、もはや別人。

プロジェクトFが存在しないため、フェイトとエリオは俊也世界では存在しない。

設定（後書き）

こんな感じで妄想していました。
年齢は俊也十七歳時のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7305p/>

白き不屈の魔導士

2011年10月29日01時13分発行